

廃棄物埋設施設における
許可基準規則への適合性について

第十条 廃棄物埋設地のうち第四号

(廃止措置の開始後の評価)

廃棄物埋設地の状態設定

-状態変化の評価(化学的影響)-

2020年7月

日本原燃株式会社

目 次

1. はじめに.....	1
2. 解析条件.....	1
(1) 解析コード.....	1
(2) 解析モデル.....	2
(3) 地下水組成.....	4
(4) 難透水性覆土の設定.....	4
(5) セメント系材料の設定.....	8
(6) 生成を想定した二次鉱物.....	10
(7) 熱力学データベース.....	12
3. 解析結果.....	12
(1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)	12
(2) 難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合(ケース②)	21
4. 参考文献.....	30

添付資料1 パラメータ設定根拠集

添付資料2 地下水組成のチャージバランス計算

添付資料3 覆土が長期間にわたり低透水性を維持することができる要因

参考資料1 ペクレ数分布

参考資料2 難透水性覆土の材料仕様をNa型ベントナイトとした場合

1. はじめに

本資料は、「第十条 廃棄物埋設地のうち第四号（廃止措置の開始後の評価）」を補足説明するものである。

難透水性覆土に対する安全機能として低透水性が期待されている。難透水性覆土の透水性は、ベントナイト系材料に含まれる膨潤性鉱物であるモンモリロナイトにより支配されていることが知られている⁽¹⁾。一方、廃棄体固型化材や埋設設備には多量のセメント系材料が用いられている。セメント系材料と接触した地下水は、セメント系材料から溶出するセメント成分や1号廃棄物埋設地に埋設された廃棄体に含まれる可溶性塩により組成が変化し、高アルカリ性となる。高アルカリ性の地下水は、ベントナイト系材料中のモンモリロナイトを溶解あるいは変質させ、難透水性覆土の低透水性機能が次第に低下することが懸念される。ここでは、これらの化学的影響を考慮しても難透水性覆土の低透水性が、期待する期間において維持されることを確認するため、難透水性覆土とセメント系材料を接触させた反応系における地球化学解析により、難透水性覆土中の等価透水係数の変遷を評価した。評価期間は、廃止措置の開始後の確からしい評価期間として1,000年後とした。(また、参考として地下水シナリオにおいて移行抑制機能を期待する数万年(20,000年後)についても評価した。)

なお、1号及び3号廃棄物埋設地の評価結果は併記する。

2. 解析条件

(1) 解析コード

本解析では、難透水性覆土へのアルカリ成分の移行挙動とモンモリロナイトの化学的な溶解を連成させて評価する必要があるため、これらを連成して解析できる PHREEQC-TRANS(化学反応物質移行連成解析コード)により、セメント系材料が用いられる埋設設備から難透水性覆土へのアルカリ成分の移行及び化学反応を評価した。

本解析で用いた PHREEQC-TRANS で中心となる地球化学解析は、アメリカ地質調査所(USGS)が開発・公開している PHREEQC⁽²⁾⁽³⁾をベースとしている。PHREEQCはソースプログラムが公開されており、広く検証されている⁽⁴⁾。また、PHREEQC-TRANSは地球化学解析と物質移行解析を連成させることで、地球化学反応の進展に伴う物質移行パラメータ(空隙率、拡散係数)の変化も同時に反映しながら、長期の変質挙動を解析することができる解析コードである。

(2) 解析モデル

本解析では、地下水は廃棄物埋設地の下部より流入し、廃棄物埋設地内を通過して再び廃棄物埋設地下部より流出することから、セメント系材料から難透水性覆土への移流成分は少ないと想定される。そのため地球化学解析における物質移行は拡散によつてのみ起こるものとした。

なお、埋設設備周辺の難透水性覆土及び下部覆土において、ペクレ数分布より、評価期間内で拡散場が継続することを確認している。(参考資料 1「ペクレ数分布」、補足説明資料 6「透水係数の設定」参考資料 1「3. 確認結果」及び補足説明資料 7「埋設設備からの流出水量」添付資料 5「放射性物質を含む地下水が分水界の北側へ移行した場合の線量評価について」を参照。)

解析モデルについては、廃棄物埋設地で用いられるセメント系材料が難透水性覆土に与える影響を検討するため、セメント系材料と難透水性覆土が接する領域を解析対象とした 1 次元モデルを設定した。難透水性覆土の厚さは 2m を設定した。

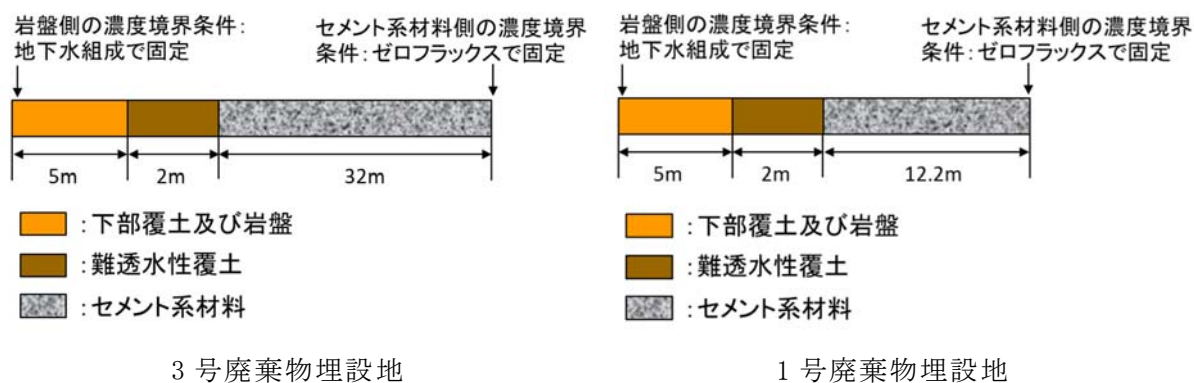
ここで、難透水性覆土中のモンモリロナイトの溶解量は、セメント系材料から溶出し難透水性覆土へ移行して化学反応に寄与するアルカリ量で決定される。セメント系材料のアルカリ量は、セメント系材料の種類や配合に加え、体積により決定される。1 次元体系では、体積は各材料のモデル長さに反映される。そこで、セメント系材料のモデル長さは、難透水性覆土に対して十分な長さとして、埋設設備の一基当たりの外形寸法の最大幅の半分(3号廃棄物埋設地では 64m の半分の 32m、1号廃棄物埋設地では 24.4m の半分の 12.2m)の長さを設定した。(難透水性覆土とセメント系材料の体積比を考慮すると、難透水性覆土 2m に対するセメント系材料の長さは、埋設設備の一基当たりの外形寸法の最大幅の半分の長さより短い。)

なお、2号廃棄物埋設地は、3号廃棄物埋設地と同種の廃棄体(充填固化体)及び類似施設であり、解析結果はいずれかの廃棄物埋設地で代表することができる。埋設設備の一基当たりの外形寸法の最大幅の半分の長さをセメント系材料のモデル長さに設定する場合、2号廃棄物埋設地と比べ3号廃棄物埋設地の方が長く、その分アルカリ量は多くなることから、3号廃棄物埋設地の解析結果で代表することとした。一方、1号廃棄物埋設地については、廃棄体(均質・均一固化体)に塩類(硫酸塩、ほう酸塩)が含まれているため、セメント系材料から浸出してくるアルカリ成分に加え、廃棄体から溶出する塩が難透水性覆土に含まれるモンモリロナイトの変質に影響を及ぼす可能性

がある。そのため、3号廃棄物埋設地とは別に解析を行うこととした。

以上より、解析では3号及び1号廃棄物埋設地を評価対象とした。

また、本解析では、難透水性覆土とセメント系材料の相互作用に着目するため、難透水性覆土とセメント系材料のみが反応し、下部覆土及び岩盤は反応しないものとした。境界条件に関して、難透水性覆土端から離れた点では、セメント影響を受けずに地下水組成と同じ液相組成になると考えられるため、地下水組成固定条件を設定した。一方、セメント系材料端は、セメント系材料の成分がセメント系材料の端から解析体系外へ移行しないように濃度勾配ゼロの境界条件(反射条件)とした。3号及び1号廃棄物埋設地の解析体系の概念図を第1図に示す。



第1図 解析体系概念図

(3) 地下水組成

廃棄物埋設地周辺の地下水組成は、淡水で地表付近の地下水であるという特性をふまえて地表付近の淡水と大気圧との平衡を考慮したモデル地下水 FOHP (Fresh-Oxidizing-High-pH) ⁽⁵⁾を参照することとした。解析で設定した地下水組成を第 1 表に示す。

第 1 表 設定した地下水組成

pH	8.46
Na	$3.22 \times 10^{-3} \text{mol/L}$
K	$5.79 \times 10^{-5} \text{mol/L}$
Ca	$1.01 \times 10^{-4} \text{mol/L}$
Mg	$6.50 \times 10^{-5} \text{mol/L}$
C	$3.54 \times 10^{-3} \text{mol/L}$
S	$1.00 \times 10^{-6} \text{mol/L}$
Cl	$4.40 \times 10^{-6} \text{mol/L}$
Al	$3.61 \times 10^{-7} \text{mol/L}$
Si	$3.40 \times 10^{-4} \text{mol/L}$

(4) 難透水性覆土の設定

(i) 難透水性覆土の鉱物組成

ここでは Ca 型ベントナイト(クニボンド)を 3 割配合した材料仕様とした。難透水性覆土の乾燥密度は 1.61Mg/m^3 と設定した。難透水性覆土の初期鉱物組成を第 2 表に示す。

第 2 表 難透水性覆土の初期鉱物組成

	Ca 型ベントナイト(クニボンド) 30wt%				
	モンモリロナイト				随伴鉱物
	Na-Mont	Ca-Mont	K-Mont	Mg-Mont	カルセドニ
mol/L _{water} ^{*1}	0.33	1.94	0.06	0.23	2.94

*1: 空隙水 1L に対する鉱物の物質質量

(ii) モンモリロナイトの溶解速度

モンモリロナイトの溶解速度は TRU2 次レポート⁽⁶⁾で使用されている式を使用した。セメント由来の高 pH 溶液の影響を考慮するため、Sato et al. (2004)⁽⁷⁾がモンモリロナイト試料を用いて種々の pH 条件(8~13)におけるフロースルー試験で測定された溶解速度の結果より、pH の関数として求めた溶解速度式と平衡に接近した場合のモンモリロナイトの溶解速度に対する飽和依存性の式について、Cama et al. (2000)⁽⁸⁾がモンモリロナイトの溶解速度実験データに基づきフィッティングによって求めた経験式を合わせた数式 1 を用いた。文献⁽⁹⁾では、強アルカリ性条件では、Cama et al. (2000)が弱アルカリ条件で求めた溶解速度の ΔGr 依存性よりも、より小さい ΔGr (より不飽和な環境)で溶解速度が小さくなることが確認されていること(第 2 図)から、Cama 式を適用した。

なお、第 2 図における数値中の E は、指数表記における基数の 10 を示す(例えば、1E+2 は 1×10^2 を示す。以下、同様。)

また、鉱物の反応表面積は、モンモリロナイトの比表面積として Yokoyama, S. et al. (2005)⁽¹⁰⁾にて N_2 -BET 法で算出された $7m^2/g$ を用いてモンモリロナイト 1mol 当たりの反応表面積に換算して使用した。

$$Rate = \left(4.74 \cdot 10^{-6} \cdot e^{-39.57/RT} \cdot \frac{177 \cdot e^{20.37/RT} \cdot a_{OH^-}}{1 + 177 \cdot e^{20.37/RT} \cdot a_{OH^-}} + 1.70 \cdot e^{69.67/RT} \cdot \frac{0.0297 \cdot e^{23.53/RT} \cdot a_{OH^-}}{1 + 0.0297 \cdot e^{23.53/RT} \cdot a_{OH^-}} \right) \cdot A_{min} \cdot \{1 - \exp(6 \cdot 10^{-10} \cdot (2 \cdot \Delta Gr/RT)^6)\}$$

(数式 1)

Rate : モンモリロナイトの溶解速度 [mol/s]

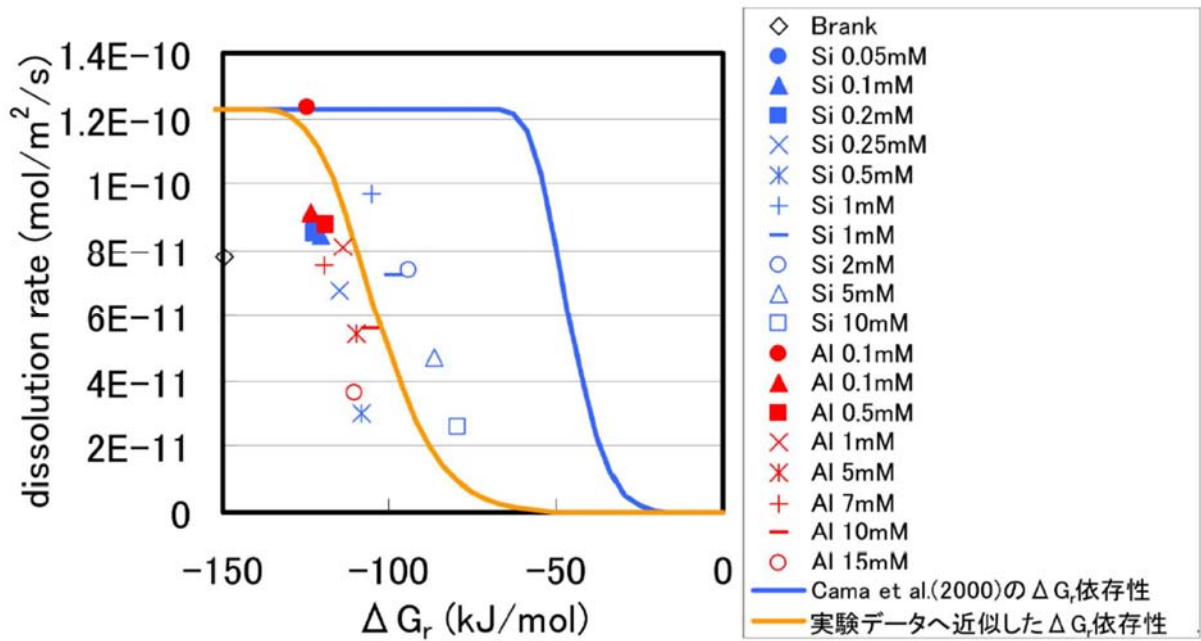
R : 気体定数 [kJ/(K·mol)]

T : 絶対温度 [K]

a_{OH^-} : OH^- イオンの活量

A_{min} : 鉱物の反応表面積 [m^2]

ΔGr : 反応のギブス自由エネルギー変化(化学親和力) [kJ/mol]



第2図 モンモリロナイトの溶解速度と化学親和力 ΔG_r の関係(文献⁽⁹⁾)

(iii) 難透水性覆土の透水係数の変遷評価式

難透水性覆土の透水係数は、TRU2次レポート⁽⁶⁾で使用されている、ベントナイトに対し様々な条件下で求めた透水係数の実測値に基づき、伊藤ら(2005)⁽¹⁾が求めたベントナイトと透水係数の関係式(数式2)を使用した。

$$K = 10^{1.30 \cdot C_i} \cdot e_{sme}^{3.48 \cdot C_i} \cdot K_0 \quad \text{(数式 2)}$$

ただし、 $C_i > 10^{1.49 \cdot ESP - 1.0}$ のとき、 $C_i = 10^{1.49 \cdot ESP - 1.0}$

$K > 10^{1.63 \cdot e_{sme} - 0.24} \cdot K_0$ のとき、 $K = 10^{1.63 \cdot e_{sme} - 0.24} \cdot K_0$

$K > 1.0 \cdot 10^{-5}$ のとき、 $K = 1.0 \cdot 10^{-5}$

$$K_0 = \begin{cases} (0.91 - 1.57 \cdot ESP + 2.00 \cdot ESP^2) \times 10^{-13} \times e_{sme}^{7.44 - 5.69 \cdot ESP} & e_{sme} \leq 7.0 \\ (0.91 - 1.57 \cdot ESP + 2.00 \cdot ESP^2) \times 10^{-13} \times 7.0^{7.44 - 5.69 \cdot ESP} \left(\frac{e_{sme}}{7.0}\right)^{11.4} & 7.0 < e_{sme} \end{cases}$$

ただし、 $K_0 < K_0|_{ESP=1}$ のとき、 $K_0 = K_0|_{ESP=1}$

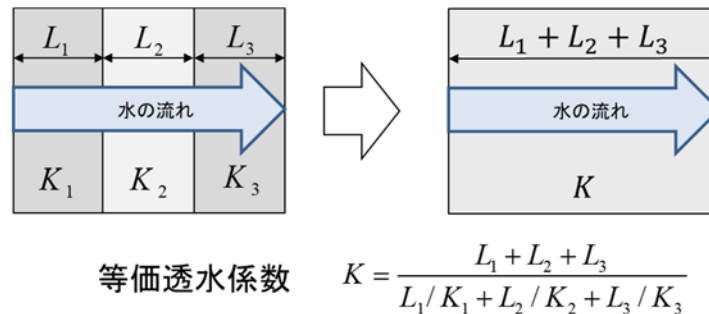
C_i : 空隙水の当量イオン濃度 [eq/L]

ESP : ベントナイトの交換性ナトリウム割合 [-]

e_{sme} : スメクタイト間隙比 [-]

K : 透水係数 [m/s]

難透水性覆土全体の透水係数に関しては、文献⁽¹¹⁾を参考に、第3図に示すように異なる透水係数を持つ材料に対して直列となる方向の透水性を考えた場合の系全体の透水係数(等価透水係数)で表現した。



第3図 等価透水係数の設定(直列)

(iv) 難透水性覆土の拡散係数

難透水性覆土中の拡散係数は、TRU2次レポート⁽⁶⁾で使用されている、空隙率とモンモリロナイトの含有割合を関数とする経験式⁽¹²⁾(数式3)を設定した現実的な拡散モデルとした(以下「ケース①」という。確からしい設定に相当する。)

$$D_e = 2.27 \times 10^{-9} \times \varepsilon^n \quad (\text{数式 3})$$

$$n = 2.22 f_s^{0.13} + 1$$

$$f_s = a \times f_b$$

D_e : 実効拡散係数 [m²/s]

ε : 空隙率 [-]

a : ベントナイト中のモンモリロナイト割合 [-]

f_b : ベントナイトの配合割合 [-]

また、上記で設定した経験式(数式 3)において、ベントナイト中のモンモリロナイトの割合 a (若しくはベントナイトの配合割合 f_b)を 0 とした場合、 ε の指数 n は 1 となり、実効拡散係数は単純に空隙率に比例するという拡散モデル(拡散係数が大きい方が、アルカリ成分が難透水性覆土中を移動する速度を大きく見積もることになり、モンモリロナイトの溶解が広範囲に広がる可能性がある)となる(数式 4)。そのため数式 4 を用いた解析も行った(以下「ケース②」という。厳しい設定に相当する。)

$$D_e = 2.27 \times 10^{-9} \times \varepsilon \quad (\text{数式 4})$$

(5) セメント系材料の設定

(i) セメント系材料の鉱物組成

廃棄物埋設地で使用されているセメント系材料のうち、充填モルタルの配合を参照した。

なお、3 号廃棄物埋設地の充填モルタルの配合は候補配合とした。初期鉱物組成の算定方法は、文献⁽¹³⁾に記載されている算定方法を参考した。参照した算定方法では、初期鉱物として C-S-H ゲル、ハイドロタルサイト、エトリンガイト、(余剰 Al_2O_3 をギブサイト)、NaOH、KOH を想定しており、セメント系材料のバッチ式浸漬実験との比較において、液相成分の再現性が高く、適用可能なモデルであることが示されたもの⁽¹³⁾である。

なお、どちらの条件においても、骨材については反応しないものとした。

a. 3 号廃棄物埋設地

ここでは 3 号廃棄物埋設地の充填モルタルの候補配合とした。3 号廃棄物埋設地の解析で設定したセメント系材料の初期鉱物組成を第 3 表に示す。

第3表 セメント系材料の初期鉱物組成(3号廃棄物埋設地)

	結合材(C)					
	C-S-H ゲル	ハイドロ タルサイト	エトリン ガイト	ギブサイト	NaOH	KOH
mol/L _{water} *1	9.51	0.33	0.04	0.94	0.03	0.03

*1：空隙水 1L に対する鉱物の物質質量

b. 1号廃棄物埋設地

1号廃棄物埋設地で使用されている配合を参照した。1号廃棄物埋設地の解析で設定したセメント系材料の初期鉱物組成を第4表に示す。

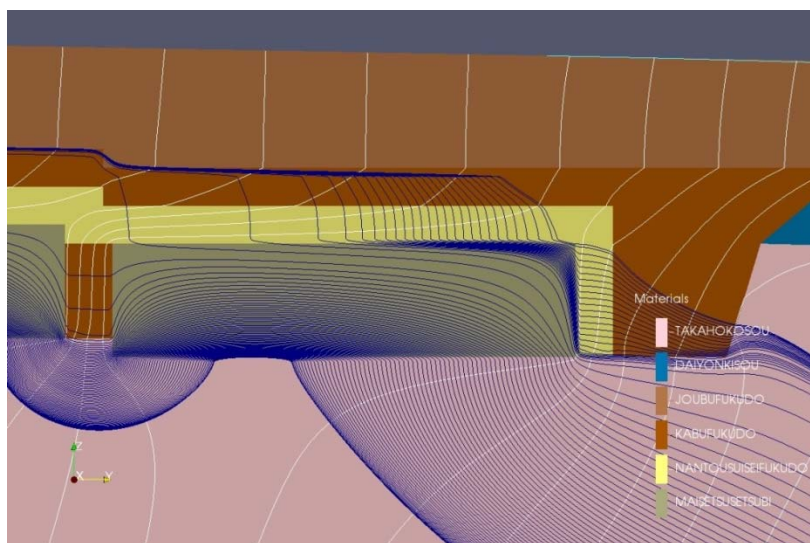
第4表 セメント系材料の初期鉱物組成(1号廃棄物埋設地)

	結合材(C)					
	C-S-H ゲル	ハイドロ タルサイト	エトリン ガイト	ギブサイト	NaOH	KOH
mol/L _{water} *1	6.46	0.41	0.01	1.19	0.01	0.01

*1：空隙水 1L に対する鉱物の物質質量

(ii) 廃棄体に含まれる塩量(1号廃棄物埋設地で設定)

1号廃棄物埋設地の廃棄体(均質・均一固化体)に含まれる塩類(ほう酸塩及び硫酸塩)の量について、1号廃棄物埋設地の埋設実績から集計を用いて設定した。また、セメント系材料の幾何学的な劣化(ひび割れ)に伴い1号廃棄物埋設地内には、地下水は難透水性覆土が設置されていない下部から入り込み、主に下部から岩盤中へと移行していく。したがって、廃棄物埋設地内に存在する塩の大半は、それらの流れに乗って岩盤中へ移動していくと考えられる(第4図)。廃棄物埋設地から流出する全体の流量のうち、難透水性覆土へ移動する流量を踏まえ、本解析では、難透水性覆土へ移動する塩量を全体の10%と設定した(地下水流動解析の詳細は、補足説明資料7「埋設設備からの流出水量」添付資料5「放射性物質を含む地下水が分水界の北側へ移行した場合の線量評価について」を参照)。1号廃棄物埋設地の解析で設定した塩濃度を第5表に示す。



第 4 図 廃棄物埋設地の地下水流動概念図

第 5 表 解析で設定した塩濃度

ほう酸塩 ($\text{Na}_2\text{B}_4\text{O}_7 \cdot 10\text{H}_2\text{O}$)	硫酸塩 (Na_2SO_4)
0.01mol/L_water*1	0.07mol/L_water*1

*1：空隙水 1L に対する鉱物の物質質量

(iii) セメント系材料の拡散係数

セメント系材料中の拡散係数については、セメント系材料は長期的に化学劣化以外の幾何学的劣化(ひび割れ)が想定されるため、物質移動が速い状態となることを想定し、拡散係数として自由水中のトリチウム水の拡散係数 ($2.27 \times 10^{-9} \text{m}^2/\text{s}^{(14)}$) を設定した(拡散係数が大きい方がアルカリ供給速度は大きく見積もられる。)

(6) 生成を想定した二次鉱物

セメント系材料と地下水が反応した溶液が難透水性覆土へ移行する際に難透水性覆土中のモンモリロナイトの溶解が生じると、空隙水中の Si や Al あるいは Mg といった反応生成物である溶存化学種の濃度が徐々に上昇し、条件に応じて過飽和となり、種々の二次鉱物が沈殿すると考えられる。生成する二次鉱物の種類によって、溶液組成や pH、空隙率が変化し、難透水性覆土の透水性に影響を及ぼす可能性がある。

文献⁽¹⁵⁾では、セメント系材料と反応した溶液と接する緩衝材(ベントナイト系材料)の鉱物学的変化の可能性について、室内試験結果、関連する天然事例から得られる情報に基づき考察を行い、多様な系の特徴に応じて生成頻度が高いと判断された鉱物をまとめている。

一方、二次鉱物の変遷は熱力学的平衡だけで決まるものではなく反応速度の影響を受ける。しかしながら、反応速度に関する知見は乏しく反応速度の影響を定量的に表現するのは困難である。文献⁽¹⁵⁾では、熱力学的に安定な鉱物(安定相)、安定相と比べ相対的に準安定な鉱物(準安定相)に分類し、複数の鉱物変遷シナリオを作成している。本解析では、生成する可能性がある二次鉱物を幅広く網羅するために、準安定相や安定相を含め多くの二次鉱物を設定した(第6表)。

第6表 生成を想定した二次鉱物

フィリップサイト	ブルーサイト	C_3ASH_4
クリノプチロライト	カルサイト	C_4AH_{13}
ヒューランダイト	ドロマイト	C_4AH_{19}
C-S-H ゲル	カルセドニ	ゲーレンナイト水和物
エトリングイト	カリ長石	カオリナイト
モノサルフェート	アナルサイム	パイロフィライト
ハイドロタルサイト	ローモンタイト	フリーデル氏塩
セピオライト	イライト	2 水石膏
ポルトランダイト		

また、1号廃棄物埋設地では、廃棄体に含まれる塩とセメント成分及びベントナイトが反応して二次鉱物が生成する可能性も考えられる。そこで、塩影響に係る二次鉱物としてNa及びCaを含むほう酸塩及び硫酸塩を設定した(第7表)。1号廃棄物埋設地を対象とした解析では、第6表に加え第7表を設定した。

第7表 塩影響を考慮した際に生成を想定した二次鉱物(1号廃棄物埋設地で設定)

ほう酸塩	硫酸塩
Ca ₃ B ₂ O ₆	Na ₂ SO ₄ ・10H ₂ O
CaB ₄ O ₇	Thaumasite
CaB ₂ O ₄	エトリンガイト
NaBO ₂	2水石膏
Colemanite	

(7) 熱力学データベース

熱力学データベースは、TRU2次レポート⁽⁶⁾で使用されていた JNC-TDB. TRU⁽¹⁶⁾をベースに、C-S-Hゲルの熱力学データとして A. Atkinson⁽¹⁷⁾のデータを追加して使用した。1号廃棄物埋設地ではセメント・ベントナイト相互作用だけでなく廃棄体に含まれる塩類による影響も評価するため、液相中のイオン濃度が高濃度になることが予想される。そのため、イオン強度が高い領域でも適用可能な活量補正モデルを用いる必要がある。ここでは、PHREEQCに同梱されている SIT モデルに対応した熱力学データベース (sit.dat) を用いた。

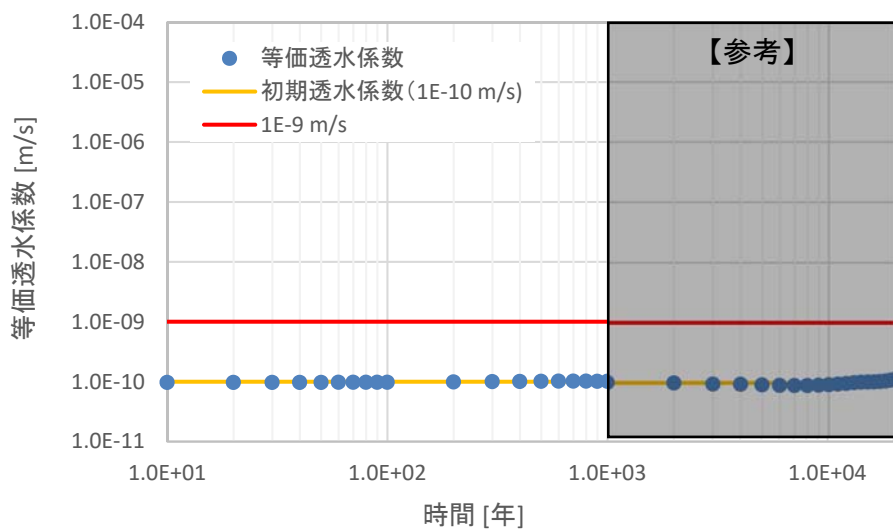
3. 解析結果

(1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)

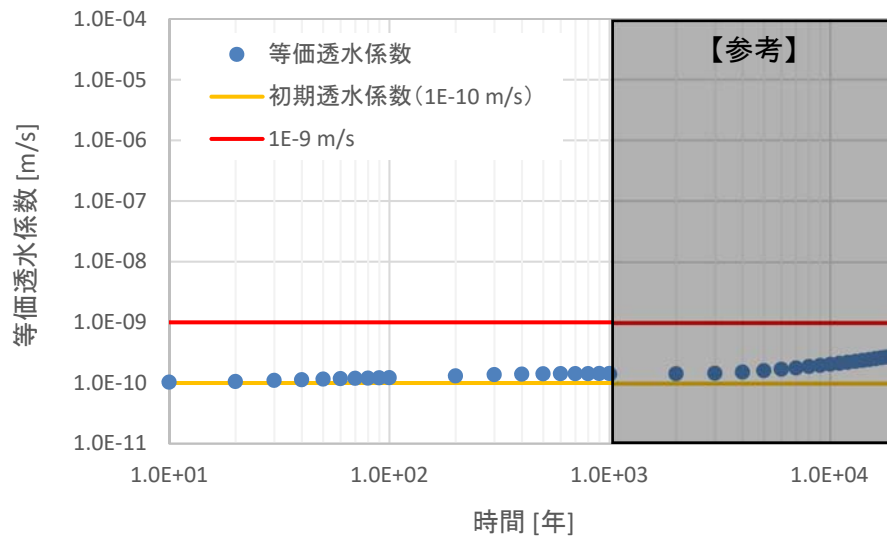
難透水性覆土中の拡散係数モデルを空隙率とモンモリロナイトの含有割合を関数とする経験式とした現実的なモデル(数式 3)で、難透水性覆土の等価透水係数の時間変化を解析的に評価した。3号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果を第5図に、1号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果を第6図に示す。また、3号廃棄物埋設地の難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図を第7図に、難透水性覆土内の液相組成分布図を第8図に、参考として覆土にアルカリ成分を供給する埋設設備内の pH、Ca 濃度分布図を第9図に示す。1号廃棄物埋設地においても同様に、難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図を第10図に、難透水性覆土内の液相組成分布図を第11図に、参考として覆土にアルカリ成分を供給する埋設設備内の pH、Ca 濃度分布図を第12図に示す。

3号廃棄物埋設地の難透水性覆土の等価透水係数は、1,000年後には、セメント系材

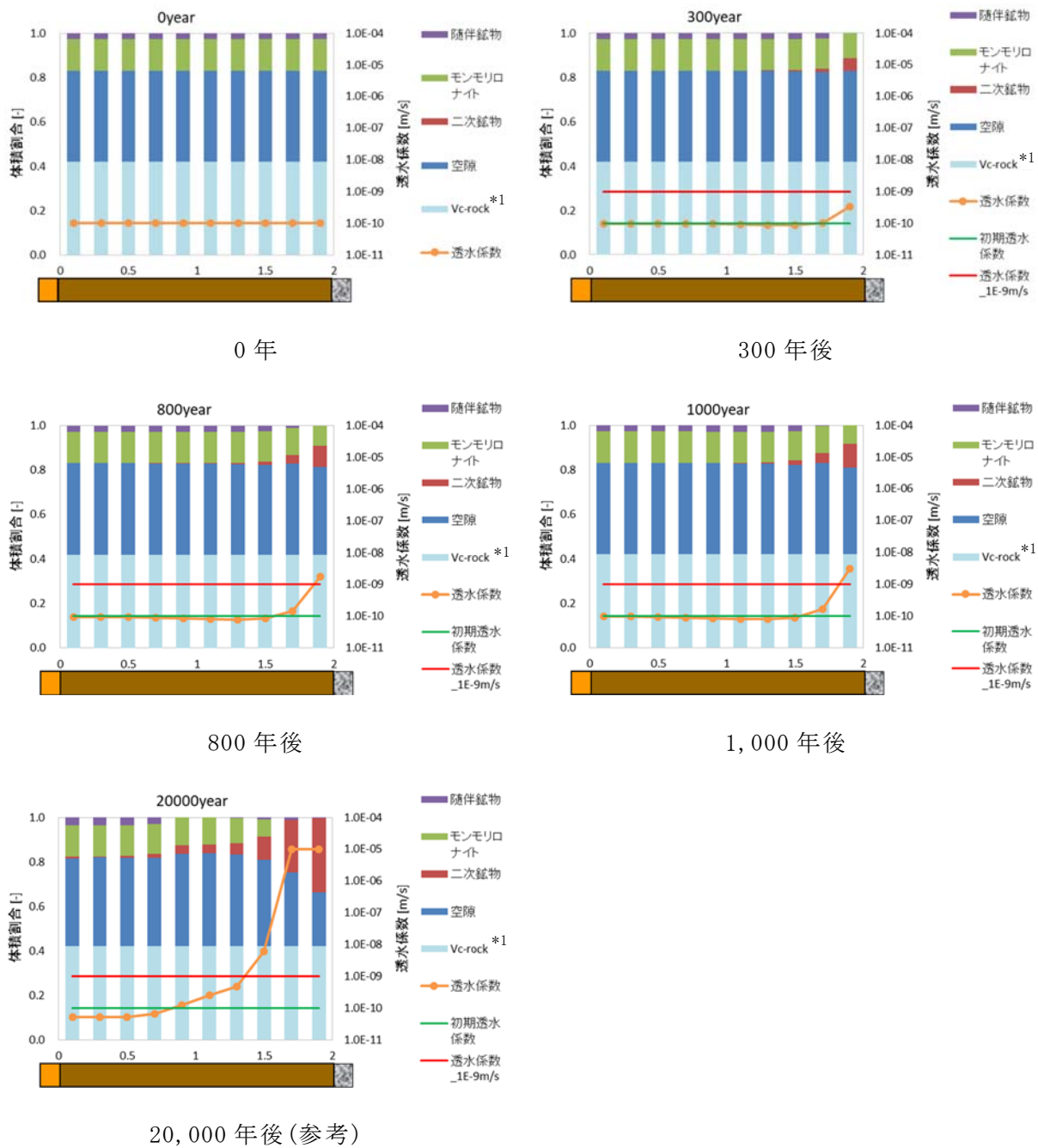
料と接する面ではベントナイトが若干溶解することにより透水係数がわずかに上昇するものの、それより内側の領域ではベントナイトの変質は見られず透水係数も初期値を維持していた。一方で、岩盤側ではベントナイトの変質はごくわずかであり透水係数の上昇も見られなかった。1号廃棄物埋設地のベントナイトの変質については、1,000年後の段階で、セメント系材料境界近傍のベントナイトが全溶解している層があった。セメント系材料由来のアルカリ成分の他に廃棄体に含まれる塩の影響を受け、3号廃棄物埋設地の結果よりも早い段階からベントナイトの変質が見られた。



第 5 図 3号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果
(ケース①：難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)

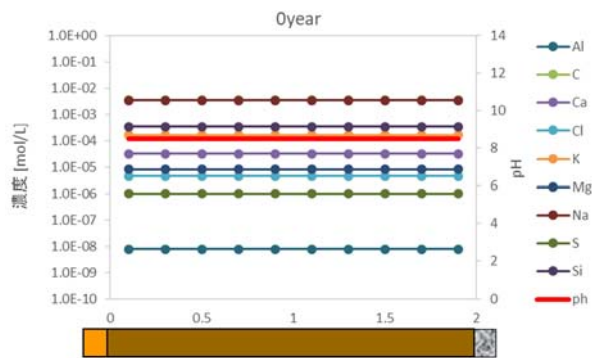


第 6 図 1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水性係数の時間変化の結果
 (ケース①：難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)

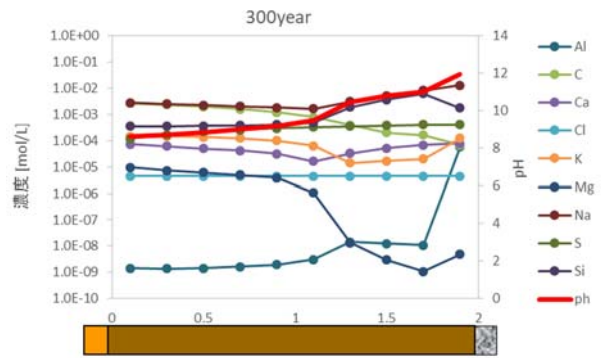


*1: Vc-rock: 化学反応に寄与しない固相

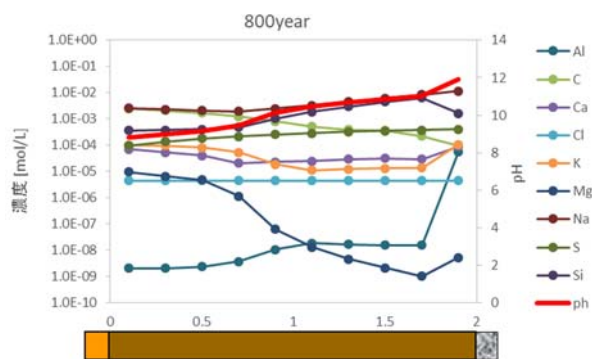
第7図 3号廃棄物埋設地の難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図
(ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



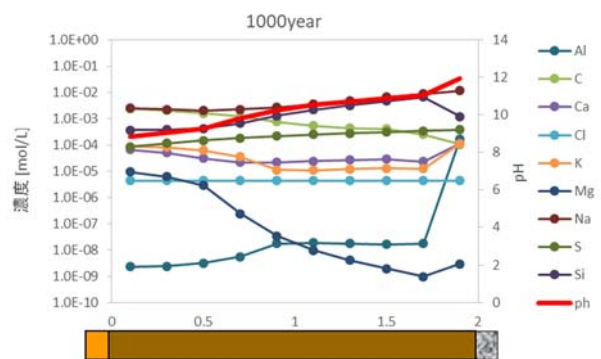
0 年



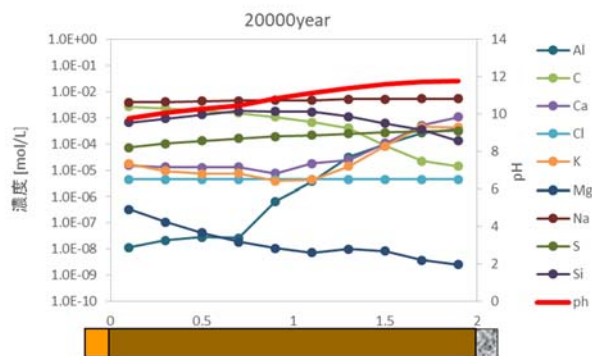
300 年後



800 年後

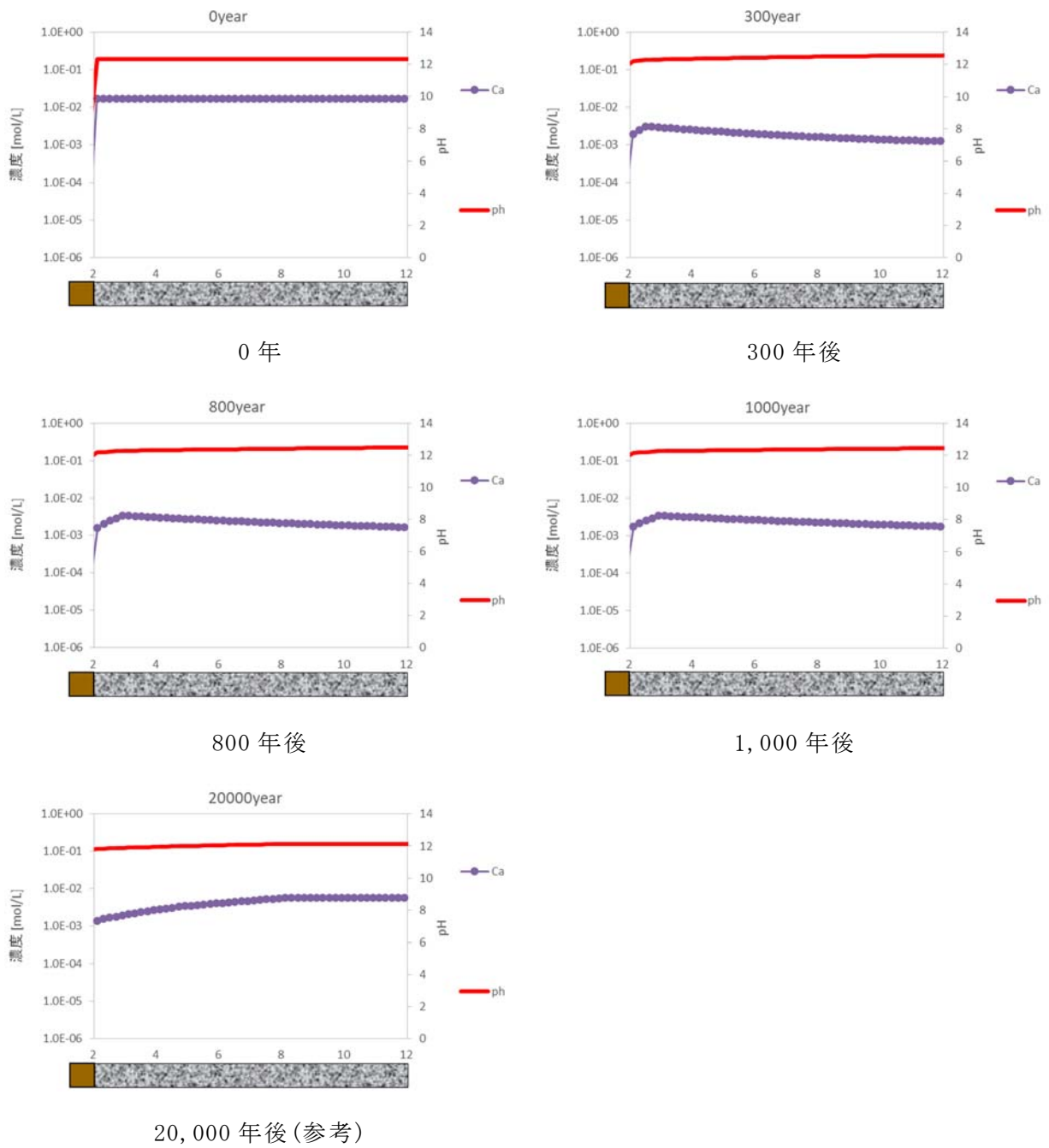


1,000 年後

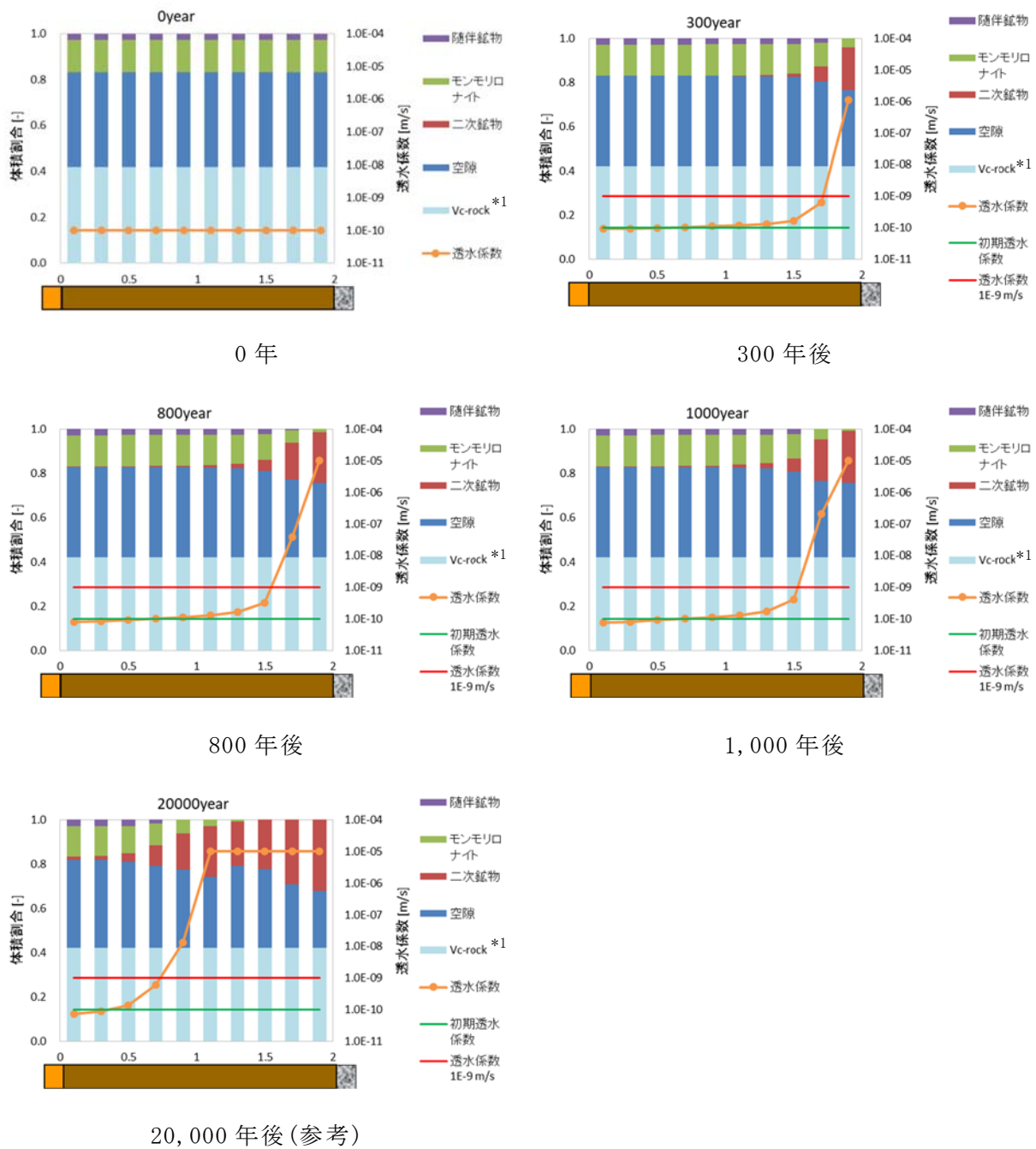


20,000 年後 (参考)

第 8 図 3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土内の液相組成の分布図
(ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)

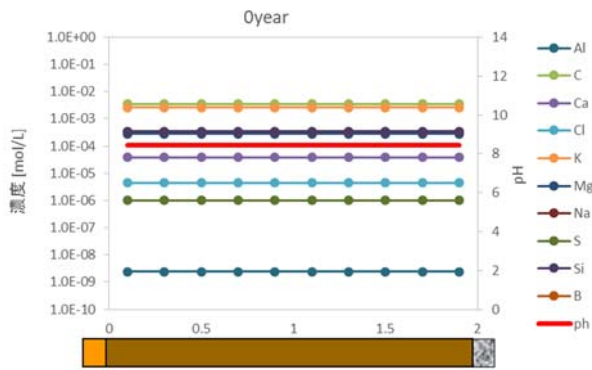


第 9 図 3 号廃棄物埋設地の埋設設備内の液相組成 (pH、Ca 濃度) の分布図
 (ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)

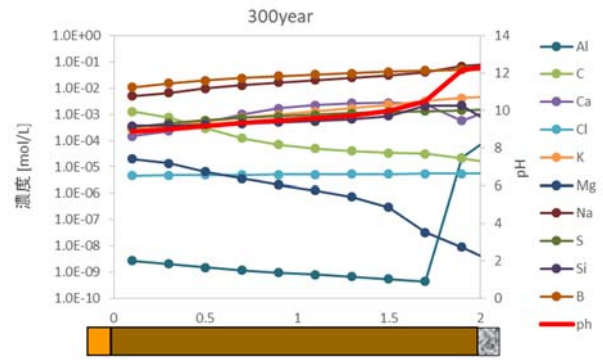


*1: Vc-rock: 化学反応に寄与しない固相

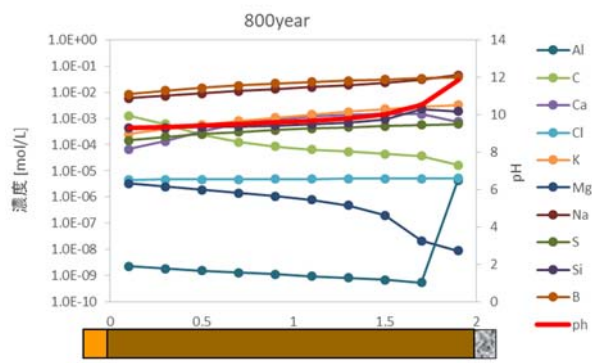
第 10 図 1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図
(ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



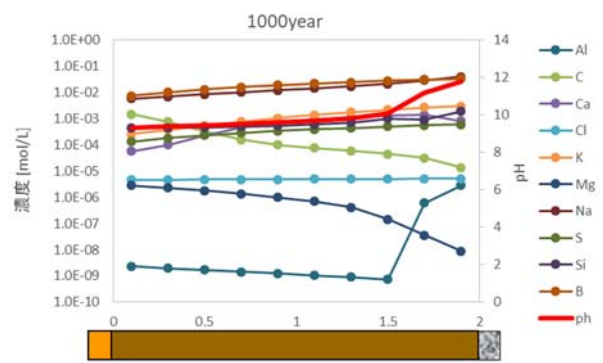
0年



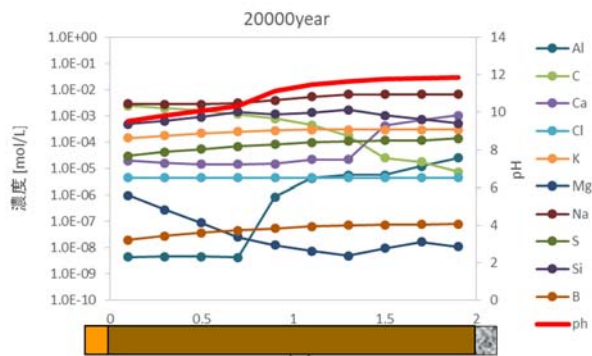
300年後



800年後

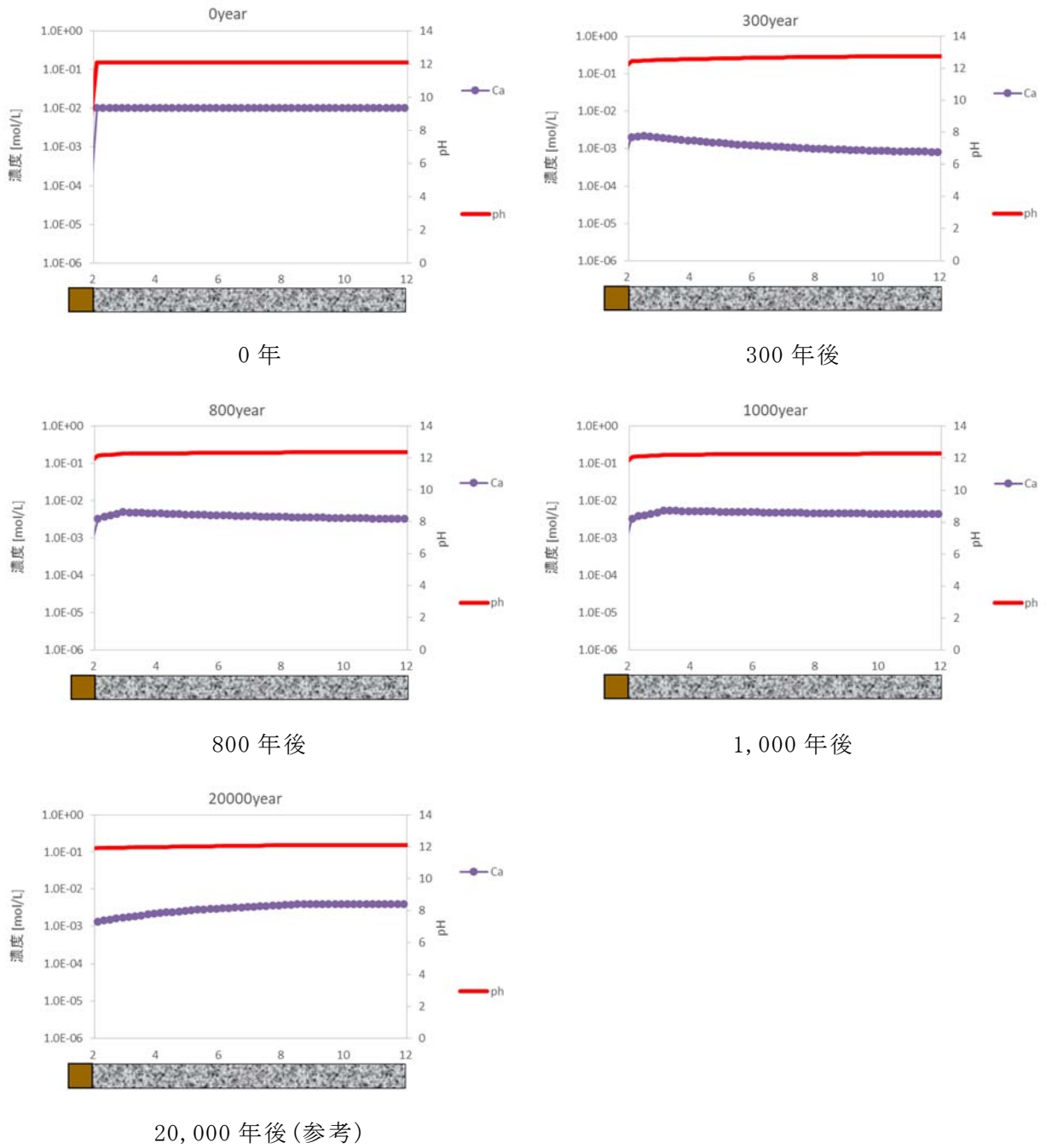


1,000年後



20,000年後(参考)

第 11 図 1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土内の液相組成の分布図
(ケース①：難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



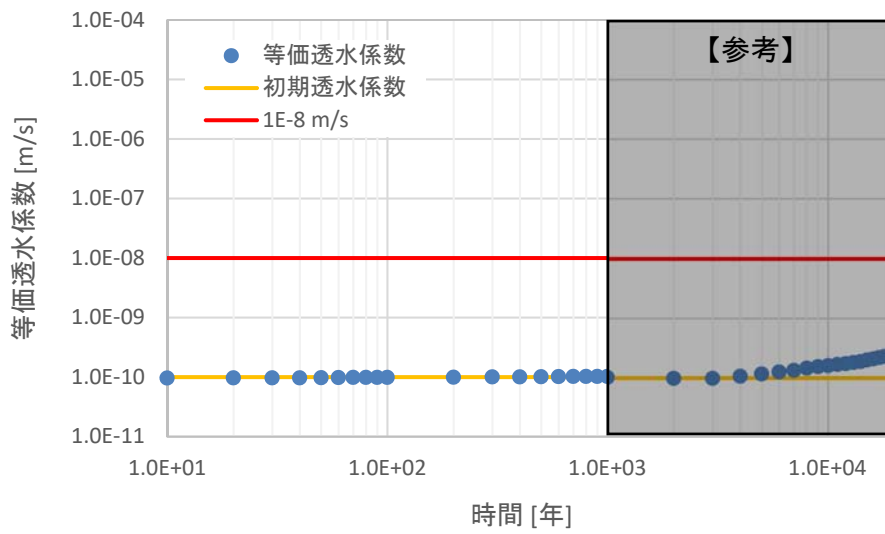
第 12 図 1 号廃棄物埋設地の埋設設備内の液相組成 (pH、Ca 濃度) の分布図
 (ケース①：難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)

(2) 難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合(ケース②)

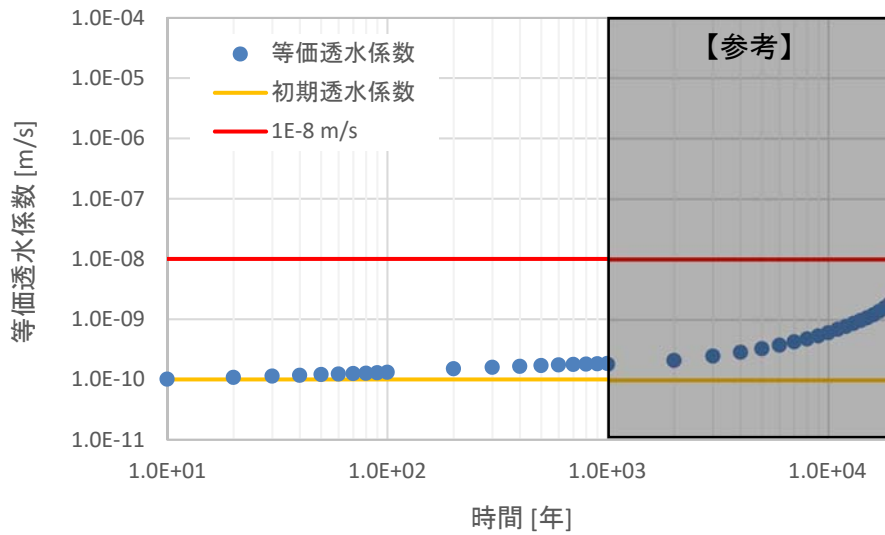
難透水性覆土中の拡散係数モデルについて、モンモリロナイトの割合を0とし、単純に空隙率に比例するとしたモデル(数式 4)で、難透水性覆土の等価透水係数の時間変化を解析的に評価した。3号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果を第13図に、1号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果を第14図に示す。また、3号廃棄物埋設地の難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図を第15図に、難透水性覆土内の液相組成分布図を第16図に、参考として覆土にアルカリ成分を共有する埋設設備内のpH、Ca濃度分布図を第17図に示す。1号廃棄物埋設地においても同様に、難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図を第18図に、難透水性覆土内の液相組成分布図を第19図に、参考として覆土にアルカリ成分を共有する埋設設備内のpH、Ca濃度分布図を第20図に示す。

3号廃棄物埋設地のベントナイトの変質については、1,000年後の段階では、「(1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)」と同様、セメント境界近傍ではわずかに変質が見られる程度であった。

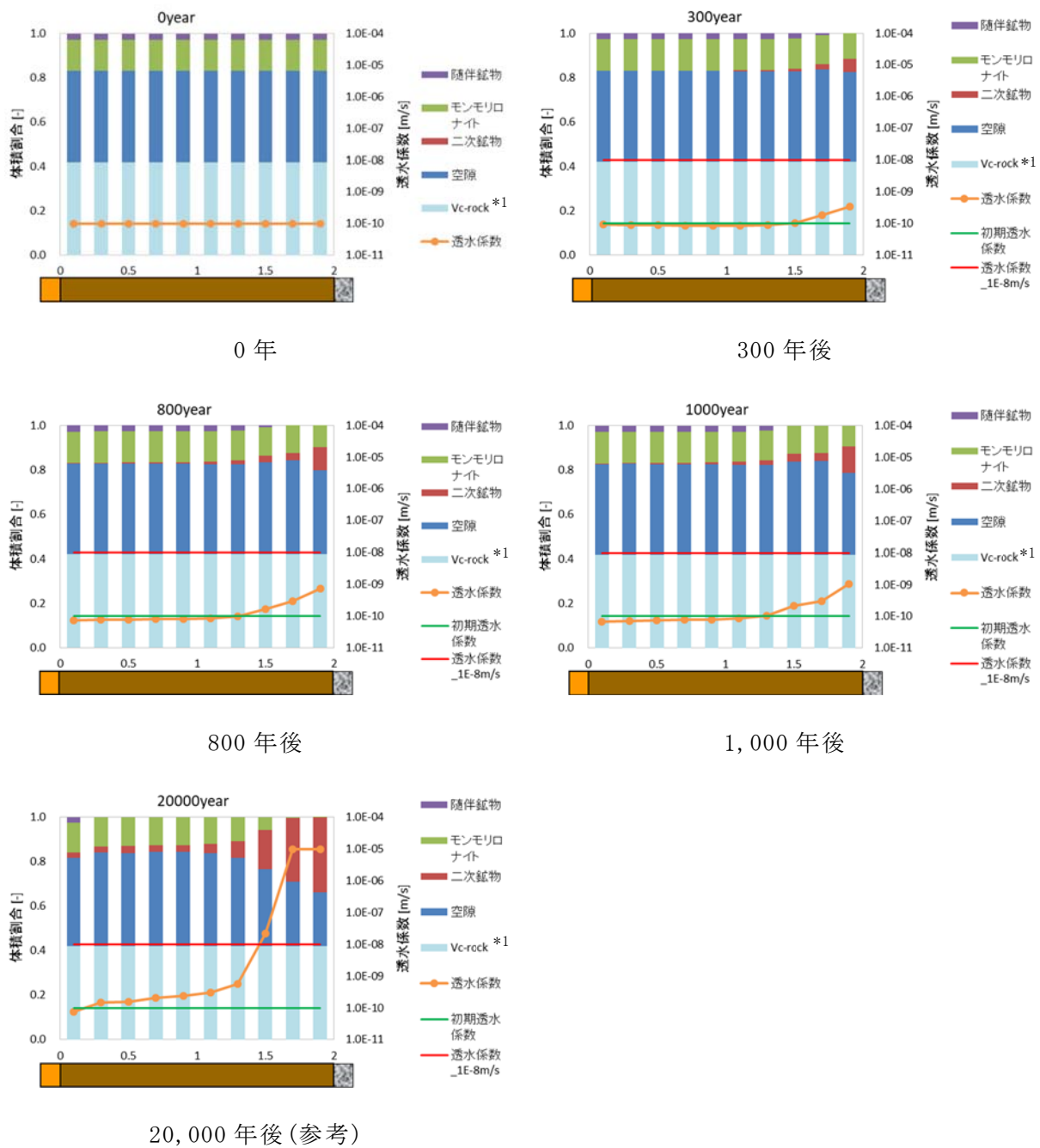
1号廃棄物埋設地の難透水性覆土の等価透水係数は、1,000年後の段階で初期の透水係数値よりもわずかに高い値となった。



第 13 図 3号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果
(ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)

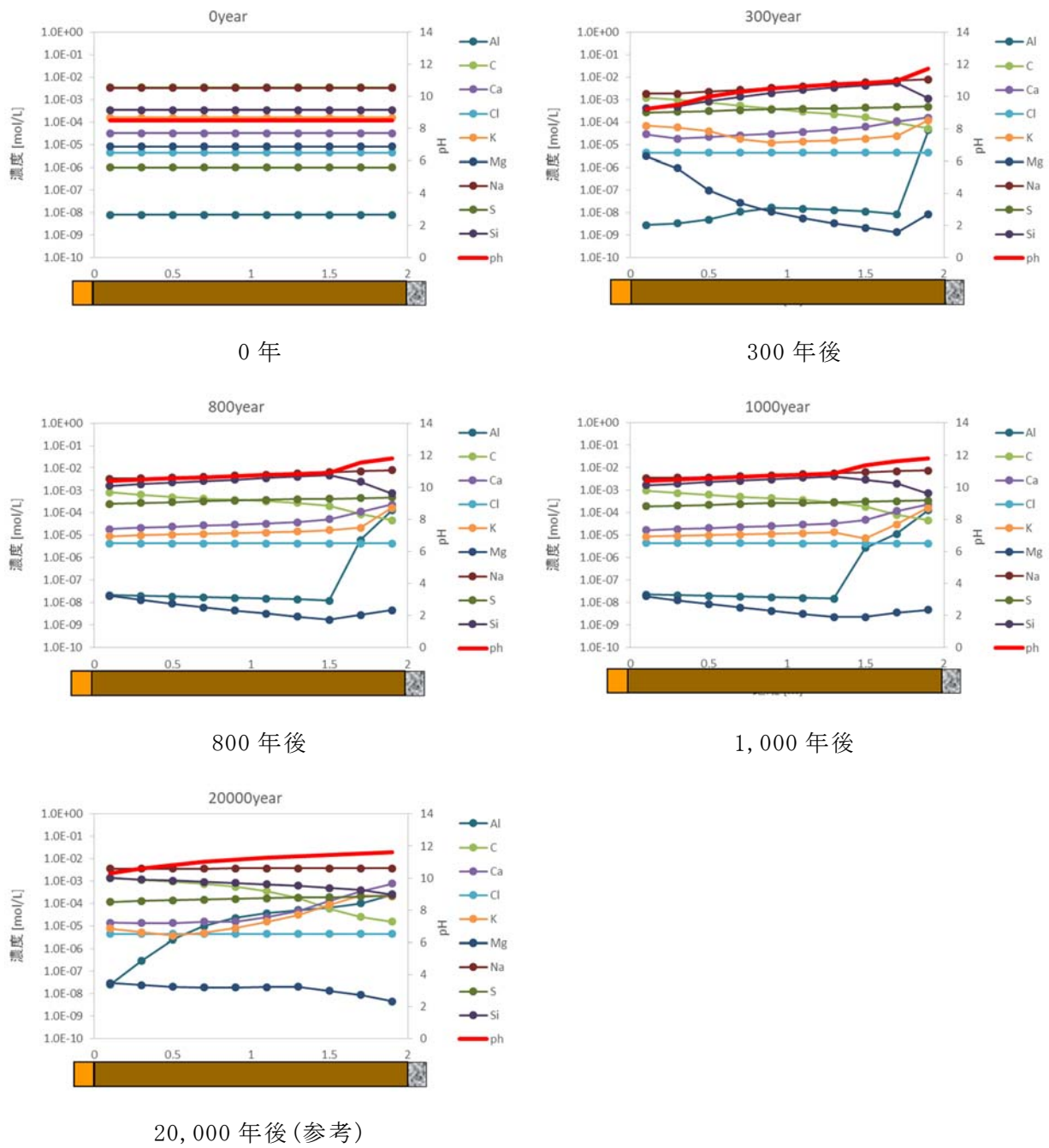


第 14 図 1号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果
(ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)

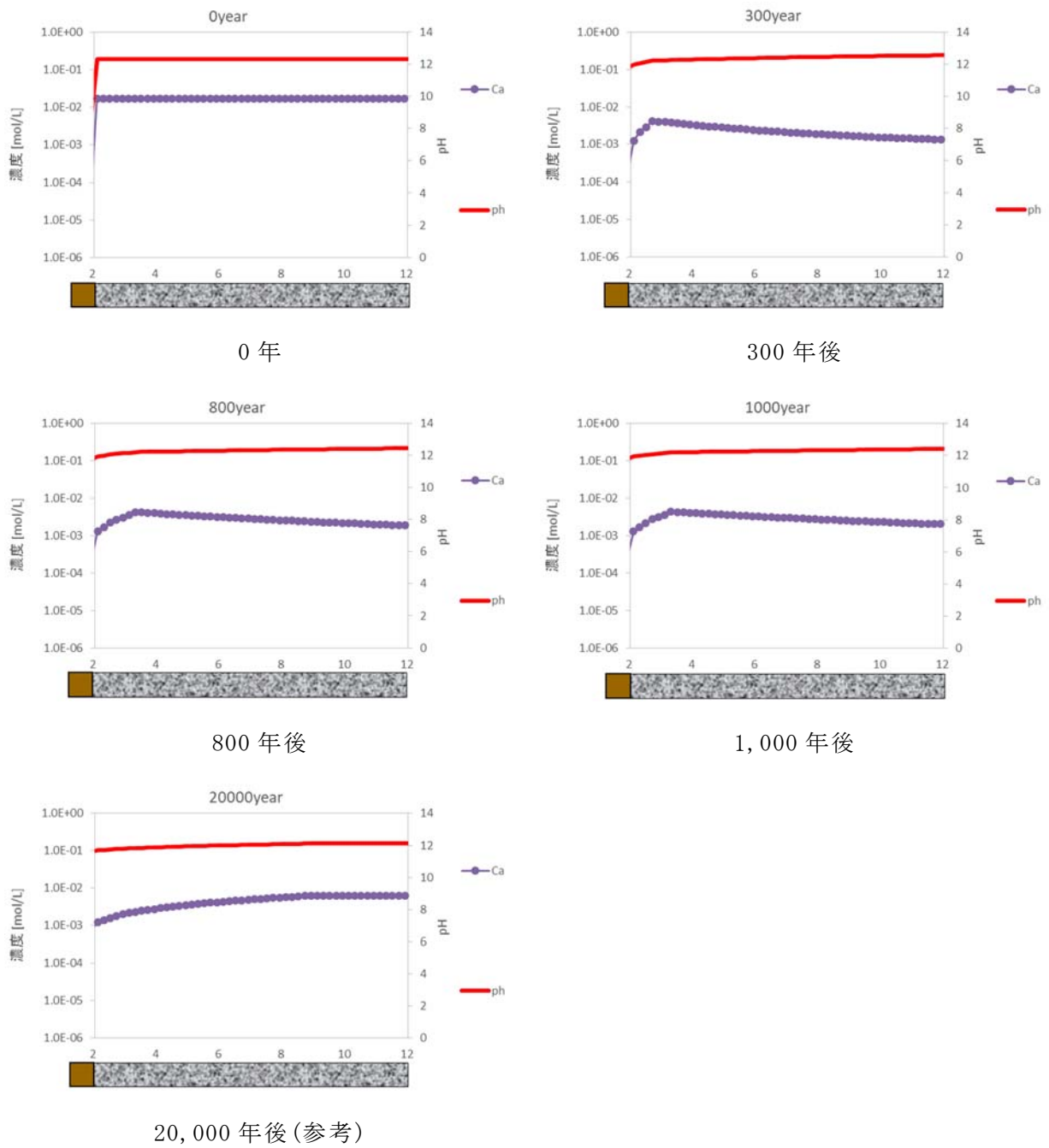


*1: Vc-rock: 化学反応に寄与しない固相

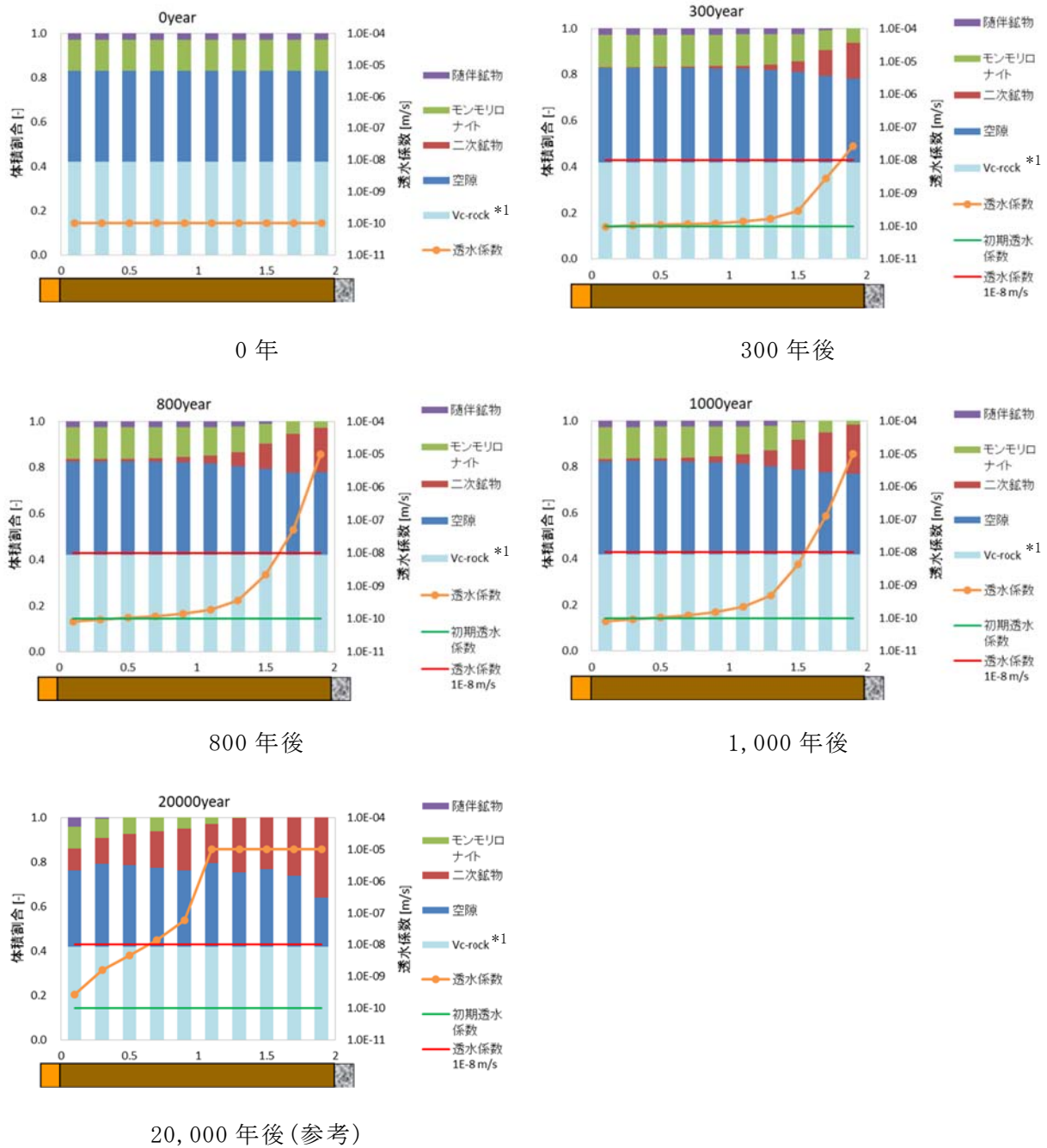
第 15 図 3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図
(ケース②: 難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



第 16 図 3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における液相組成の分布図
 (ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)

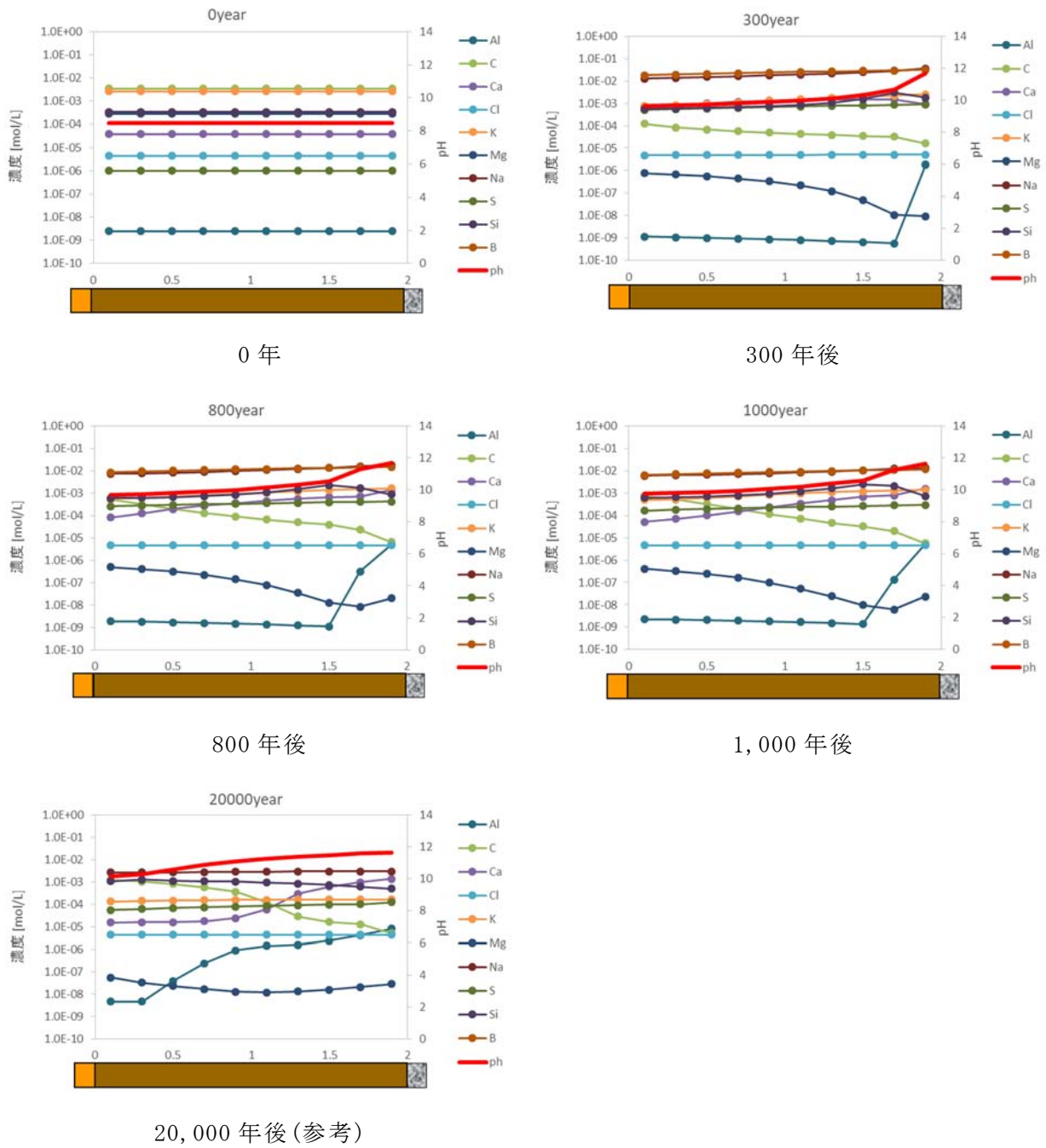


第 17 図 3 号廃棄物埋設地の埋設設備内の液相組成 (pH、Ca 濃度) の分布図
 (ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)

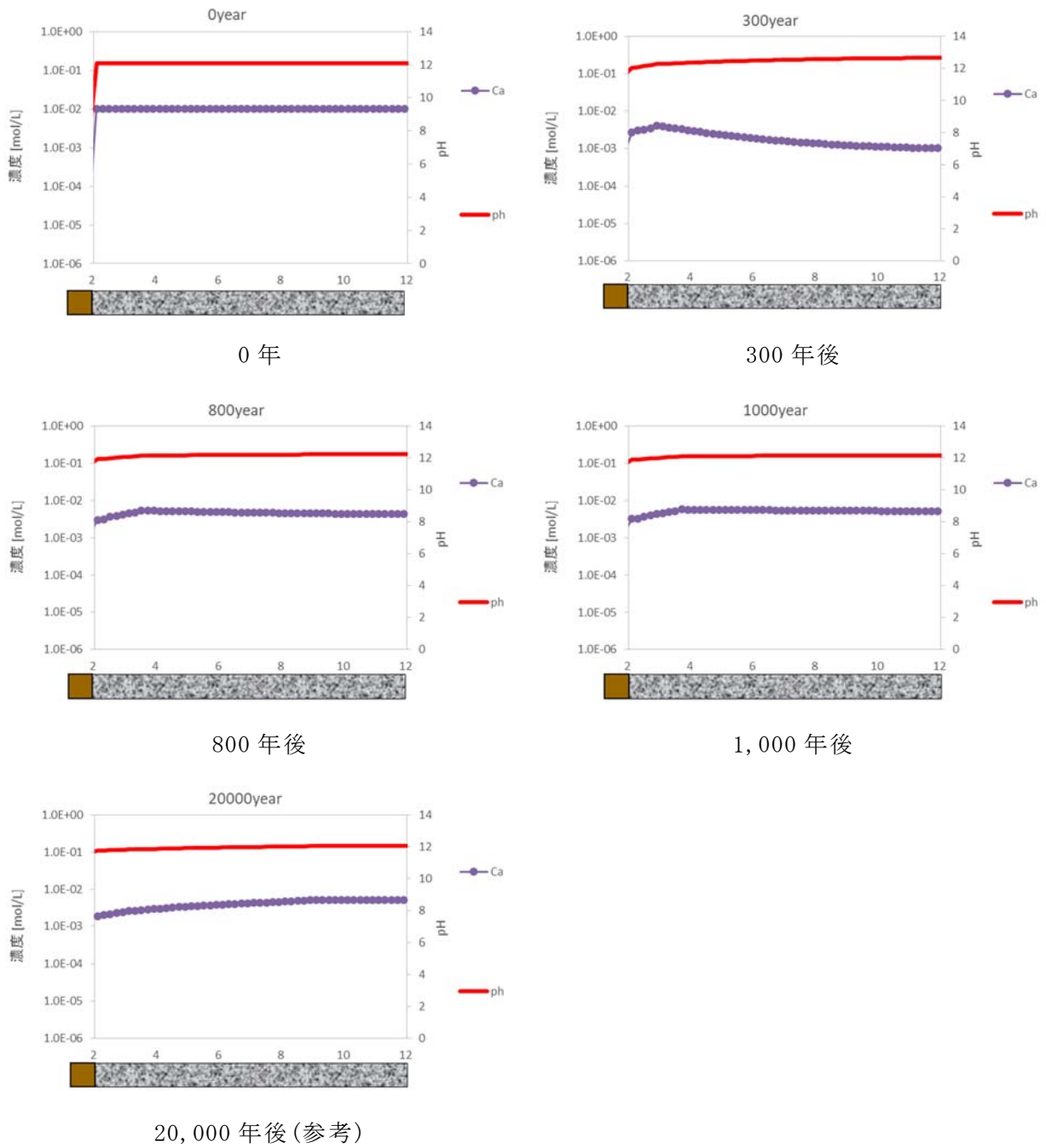


*1 : Vc-rock : 化学反応に寄与しない固相

第 18 図 1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図
(ケース② : 難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



第 19 図 1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における液相組成の分布図
(ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



第 20 図 1 号廃棄物埋設地の埋設設備内の液相組成 (pH、Ca 濃度) の分布図
 (ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)

以上より、長期的な化学的影響を考慮した難透水性覆土の線量評価上の透水係数は1,000年後において下記の値に基づき設定する(第8表)。

また、化学的影響を受けた場合においても難透水性覆土中のモンモリロナイトが残存することから、難透水性覆土の周囲に設置する下部覆土は、化学的な影響による透水係数の変化は生じないものとする。

なお、下部覆土相当の材料で施工する1号廃棄物埋設地の南北方向の埋設設備間の狭隘部については、両側から化学的変質が生じることに加え、移流による化学物質の移行が生じることから、第10図及び第18図に示す難透水性覆土の透水係数の分布図に基づくと、ケース①及びケース②ともに1,000年後において砂程度の透水係数($1 \times 10^{-5} \text{m/s}$)になることが想定されるが、補足説明資料7「埋設設備からの流出水量」添付資料9「1号埋設設備狭隘部の充填材が劣化した場合の埋設設備からの流出水量について」に示すように、埋設設備からの流出水量は、狭隘部の透水係数による影響を受けない。

第8表 化学的影響の評価結果

	3号廃棄物埋設地[m/s]		1号廃棄物埋設地[m/s]	
	ケース①*1	ケース②*2	ケース①*1	ケース②*2
0年	1.00×10^{-10}	1.00×10^{-10}	1.00×10^{-10}	1.00×10^{-10}
1,000年後	1.01×10^{-10}	1.02×10^{-10}	1.42×10^{-10}	1.84×10^{-10}

*1：難透水性覆土中の拡散係数モデルを空隙率とモンモリロナイトの含有割合を関数とする経験式(数式3)とする現実的な設定とした場合

*2：難透水性覆土中の拡散係数モデルを、モンモリロナイトの割合を0とし単純に空隙率に比例するという単純な設定(数式4)とした場合

4. 参考文献

- (1) 伊藤弘之、三原守弘(2005)：ベントナイト系材料の飽和透水係数の変遷評価式、JNC TN8400 2005-029
- (2) Parkhurst, D. L. and Appelo, C. A. J.(1999): User's guide to PHREEQC (ver.2)-a computer program for speciation, batch-reaction, one-dimensional transport, and inverse geochemical calculations, U.S. Geological Survey, Water-resources investigations report 99-4259
- (3) Parkhurst, D. L. and Appelo, C. A. J.(2013): Description of input and examples for PHREEQC version 3 - A computer program for speciation, batch-reaction, one-dimensional transport, and inverse geochemical calculations, US Geological Survey, Denver, USA
- (4) Diederik JACQUES, Lian WANG, Evelien MARTENS and Dirk MALLANTS(2012):Benchmarking the cemdata07 database to model chemical degradation of concrete using GEMS and PHREEQC, NEN/RWM/R
- (5) Mikazu Yui, Hiroshi Sasamoto, Randolph C Arthur(1999):Groundwater Evolution Modeling for the Second Progress Performance Assessment(PA) Report, JNC TN8400 99-030
- (6) 電気事業連合会、核燃料サイクル開発機構(2005)、TRU 廃棄物処分技術検討書－第2次 TRU 廃棄物処分研究開発取りまとめ－JNC TY1400 2005-013、FEPC TRU-TR2-2005-02
- (7) Sato, T., Kuroda, M., Yokoyama, S., Tsutsui, M., Fukushi, K., Tanaka, T. and Nakayama, S. (2004): Dissolution mechanism and kinetics of smectite under alkaline conditions, NUMO-TR-04-05
- (8) Cama, J., Ganor, J., Ayora, C. and Lasaga, C.A. (2000): Smectite dissolution kinetics at 80°C and pH8.8, *Geochimica et Cosmochimica Acta*, Vol.64, No.15, pp.2701-2717
- (9) (独)日本原子力研究開発機構(2009)：TRU 廃棄物の処理・処分技術に関する研究開発 平成20年度報告－JAEA-Research 2009-046
- (10) Yokoyama, S. et al. (2005): Atomic force microscopy study of


- montmorillonite dissolution under highly alkaline conditions. Clays and Clay Minerals 53(2), 147-154
- (11) 原子力発電環境整備機構(2007)：処分システムに求められる閉鎖性能の考え方－処分場パネル規模の水理に関する試解析－、NUMO-TR-06-01
- (12) Morihito MIHARA, Ryouichi SASAKI(2005):Radio-nuclides Migration DATasets(RAMDA) on cement, bentonite and rock for the performance assessment of TRU waste repository in Japan, JNC TN8400 2005-027
- (13) (独)日本原子力研究開発機構(2015)：平成26年度地層処分技術調査等事業セメント材料影響評価技術高度化開発報告書
- (14) 日本化学会(2004)：化学便覧 基礎編 改定5版、丸善、東京、p-II.64
- (15) 小田治恵、佐々木良一、David Savage、Randolph C. Arthur、本田明(2005)：緩衝材の鉱物学的長期変遷シナリオ、JNC TN8400 2005-020
- (16) Randolph C. Arthur et al. (2005): Development of Thermodynamic Databases for Hyperalkaline, Argillaceous Systems. JNC, TN8400 2005-010
- (17) A. Atkinson et al. (1991): Aqueous chemistry and thermodynamic modelling of CaO-SiO₂-H₂O gels at 80 °C, DoE, DoE-HMIP-RR-91-045

パラメータ設定根拠集

目 次

1. 解析のモデル形状(3号及び2号廃棄物埋設地)	1
2. 解析のモデル形状(1号廃棄物埋設地)	2
3. 地下水組成	3
4. 難透水性覆土の初期鉱物組成	5
5. 難透水性覆土の初期空隙率	6
6. セメント系材料の初期鉱物組成(3号廃棄物埋設地)	7
7. セメント系材料の初期鉱物組成(1号廃棄物埋設地)	9
8. 廃棄体の塩量	10
9. セメント系材料の初期空隙率	11
10. 難透水性覆土の透水係数	12
11. 難透水性覆土の拡散係数	13
12. セメント系材料の拡散係数	14
13. モンモリロナイトの溶解速度	15
14. 二次鉱物	16
15. 塩影響を考慮した二次鉱物(1号廃棄物埋設地)	17

パラメータ	1. 解析のモデル形状(3号及び2号廃棄物埋設地)
設定値	難透水性覆土のモデル長さ 2m セメント系材料のモデル長さ 32m
設定根拠	<p>難透水性覆土のモデル長さは難透水性覆土の設計に基づき設定した。</p> <p>セメント系材料のモデル長さについて、3号廃棄物埋設地の形状を想定し、埋設設備の一基当たりの外形寸法の幅(64m)の半分の長さを設定した。なお、2号廃棄物埋設地は、3号廃棄物埋設地と同種の廃棄体及び類似施設であり埋設設備の一基当たりの外形寸法の長さの観点*1で3号廃棄物埋設地の解析結果で代表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 3号廃棄物埋設地 埋設設備の一基当たりの外形寸法 64m×37m×7m (2号廃棄物埋設地 埋設設備の一基当たりの外形寸法 37m×36m×7m) <p>*1：セメント系材料のモデル長さを埋設設備の一基当たりの外形寸法の最大幅の半分の長さ設定したことについて補足する。3号及び2号廃棄物埋設地の鉛直断面概念図を下図に示す。中心のセメント系材料のアルカリ成分が、周囲の難透水性覆土(A、C、D)及び岩盤(B)へ移動していく現象に対して、難透水性覆土へのアルカリ成分の影響を大きく見積もるため、上面Aと側面Cのみにアルカリ成分が全て移動し側面(D)及び岩盤(B)への移行はないとしたケースについて考える。難透水性覆土の体積を1としたときのセメント系材料の体積比は、2号廃棄物埋設地で2.7、3号廃棄物埋設地では3.0である。これより、難透水性覆土2mに対するセメント系材料の長さは、2号廃棄物埋設地で5.4m、3号廃棄物埋設地では6.0mとなる。</p> <p>本解析では、32mを設定しており、覆土に対して十分な長さといえる。</p> <div data-bbox="485 1317 1315 1783" data-label="Diagram"> <p>鉛直断面図の構成要素と数値:</p> <ul style="list-style-type: none"> 最上層 (A): 難透水性覆土, 高さ 2m, 体積 (2号: 82m³, 3号: 136m³) 中間層 (C, D): 難透水性覆土, 高さ 7m (2,3号), 体積 (C: 14m³) 中心層 (セメント系材料): 高さ 32m, 体積 (2号: 259m³, 3号: 448m³) 最下層 (B): 岩盤, 高さ 2m 幅寸法: 2号: 37m, 3号: 64m (左右各 2m の余裕あり) </div> <p>3号及び2号廃棄物埋設地の鉛直断面図(紙面方向に単位長さ 1m とする)</p>
参考文献	

パラメータ	2. 解析のモデル形状(1号廃棄物埋設地)
設定値	難透水性覆土のモデル長さ 2m セメント系材料のモデル長さ 12.2m
設定根拠	<p>難透水性覆土のモデル長さは難透水性覆土の設計に基づき設定した。 セメント系材料のモデル長さについて、1号廃棄物埋設地の形状を想定し、埋設設備の一基当たりの外形寸法の幅(24.4m)の半分の長さを設定した。</p> <p>・1号廃棄物埋設地 埋設設備の一基当たりの外形寸法 24.4m×24.4m×6.2m</p> <p>セメント系材料のモデル長さを埋設設備の一基当たりの外形寸法の最大幅の半分の長さに設定したことについて補足する。 1号廃棄物埋設地の鉛直断面概念図を下図に示す。「1. 解析のモデル形状(3号及び2号廃棄物埋設地)」と同様にして、難透水性覆土へのアルカリ成分の影響を大きく見積もるケースについて考える。 難透水性覆土の体積を1としたときのセメント系材料の体積比は、2.1である。これより、難透水性覆土2mに対するセメント系材料の長さは、4.2mとなる。本解析では、12.2mを設定しており、覆土に対して十分な長さといえる。</p>  <p>1号廃棄物埋設地の鉛直断面図(紙面方向に単位長さ1mとする)</p>
参考文献	

パラメータ	3. 地下水組成
設定値	<p>pH 8.46</p> <p>Na $3.22 \times 10^{-3} \text{mol/L}^{*1}$</p> <p>K $5.79 \times 10^{-5} \text{mol/L}$</p> <p>Ca $1.01 \times 10^{-4} \text{mol/L}$</p> <p>Mg $6.50 \times 10^{-5} \text{mol/L}$</p> <p>C $3.54 \times 10^{-3} \text{mol/L}$</p> <p>S $1.00 \times 10^{-6} \text{mol/L}$</p> <p>Cl $4.40 \times 10^{-6} \text{mol/L}$</p> <p>Al $3.61 \times 10^{-7} \text{mol/L}$</p> <p>Si $3.40 \times 10^{-4} \text{mol/L}$</p> <p> *1 : PHREEQCにてチャージバランスを保つように計算して設定</p>
設定根拠	<p>文献⁽¹⁾で検討されているモデル地下水のうち、酸化性淡水の地下水(FOHP)を設定した。</p> <p>セメント系材料と難透水性覆土の化学反応に関する重要な成分(pH、Na、K、Ca、Mg、C、S、Cl、Al、Si)に着目し、それ以外の元素については考慮しないこととした。上記の成分を抽出し、Naでチャージバランスをとった値を用いることとした。</p> <p>地下水組成が解析に与える影響</p> <p>廃棄物埋設地周辺の淡水地下水は、廃棄物埋設地で用いられるセメント系材料と反応すると、セメント系材料中の成分が溶脱し、イオン強度が高く、高アルカリ性の組成になると考えられる。4種類の地下水組成を対象にセメント系材料との平衡計算を行い、各地下水組成の変化を比較した。セメント系材料の組成は「6. セメント系材料の初期鉱物組成(3号廃棄物埋設地)」を参照した。</p>

検討した地下水の組成

	六ヶ所水質結果_最小	六ヶ所水質結果_中間の値	六ヶ所水質結果_最大	FOHP
pH	5.30	6.80	8.30	8.46
Na	3.60×10^{-4} *1	6.40×10^{-4} *1	1.10×10^{-3} *1	3.22×10^{-3} *1
K	1.30×10^{-5}	7.80×10^{-5}	1.40×10^{-4}	5.79×10^{-5}
Ca	2.50×10^{-6}	9.10×10^{-5}	1.80×10^{-4}	1.01×10^{-4}
Mg	4.10×10^{-6}	8.00×10^{-5}	1.60×10^{-4}	6.50×10^{-5}
C	9.20×10^{-5}	4.70×10^{-4}	8.50×10^{-4}	3.54×10^{-3}
S	1.00×10^{-5}	1.20×10^{-4}	2.30×10^{-4}	1.00×10^{-6}
Cl	3.60×10^{-4}	4.70×10^{-4}	5.70×10^{-4}	4.40×10^{-6}
Al	—	—	—	3.61×10^{-7}
Si	—	—	—	3.40×10^{-4}

(濃度の単位は mol/L)

*1 : Na 濃度をチャージバランスにて設定

結果を以下に示す。地下水の組成が変化しても、セメント系材料と反応した地下水の組成に大きな違いは見られなかった。したがって、淡水系の地下水組成の変化は、本解析の結果に大きな影響を及ぼさないと考えられる。

セメント系材料と反応した地下水の組成

	六ヶ所水質結果_最小	六ヶ所水質結果_中間の値	六ヶ所水質結果_最大	FOHP
pH	12.70	12.69	12.69	12.69
Na	3.46×10^{-2}	3.49×10^{-2}	3.53×10^{-2}	3.74×10^{-2}
K	2.62×10^{-2}	2.63×10^{-2}	2.64×10^{-2}	2.63×10^{-2}
Ca	3.78×10^{-3}	3.95×10^{-3}	4.10×10^{-3}	5.22×10^{-3}
Mg	1.83×10^{-10}	1.86×10^{-10}	1.87×10^{-10}	1.99×10^{-10}
C	9.21×10^{-5}	4.70×10^{-4}	8.50×10^{-4}	3.34×10^{-3}
S	2.28×10^{-5}	2.27×10^{-5}	2.27×10^{-5}	2.25×10^{-5}
Cl	3.60×10^{-4}	4.70×10^{-4}	5.70×10^{-4}	4.40×10^{-6}
Al	3.52×10^{-3}	3.51×10^{-3}	3.51×10^{-3}	3.47×10^{-3}
Si	3.51×10^{-6}	3.50×10^{-6}	3.50×10^{-6}	3.46×10^{-6}

(濃度の単位は mol/L)

参考文献

- (1) Mikazu Yui, Hiroshi Sasamoto, Randolph C Arthur(1999):Groundwater Evolution Modeling for the Second Progress Performance Assessment(PA) Report, JNC TN8400 99-030

パラメータ	4. 難透水性覆土の初期鉱物組成
設定値	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベントナイト(クニボンド) Na 型モンモリロナイト 0.33mol/L_{water} Ca 型モンモリロナイト 1.94mol/L_{water} K 型モンモリロナイト 0.06mol/L_{water} Mg 型モンモリロナイト 0.23mol/L_{water} カルセドニ 2.94mol/L_{water}
設定根拠	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベントナイト(クニボンド)の配合率:30wt% ・ ベントナイト(クニボンド)の鉱物組成⁽¹⁾ <ul style="list-style-type: none"> モンモリロナイト 80% 石英 5% クリストバライト 15% <p>(解析の都合上、クリストバライトと比べ石英は安定な鉱物のため、解析では反応しない鉱物として設定した。また、クリストバライトは熱力学データベースに存在しないため、カルセドニとして設定した。)</p> ・ 乾燥密度: 1.61Mg/m³(室内試験結果) ・ 初期空隙率: 「5. 難透水性覆土の初期空隙率」を参照 ・ 混合砂は反応しないものとした。(シリカ成分は、高アルカリ側の溶存化学種の加水分解により pH 緩衝性を有する。混合砂には多くのシリカ成分が含まれるが、本解析では緩衝性を無視するため反応しないものとした。) ・ クニボンドの陽イオン組成⁽²⁾ <ul style="list-style-type: none"> NaZ 10.3meq/100g^{*1} CaZ₂ 60.1meq/100g^{*1} KZ 1.9meq/100g MgZ₂ 7.2meq/100g <p>*1: 初期透水係数が 1.0×10^{-10} m/s となるように調整した。</p>
参考文献	<p>(1) 前田宗宏、棚井憲治、伊藤勝、三原守弘、田中益弘(1998): カルシウム型化及びカルシウム型ベントナイトの基本特性—膨潤圧、透水係数、—軸圧縮強度及び弾性係数—, PNC TN8410 98-021</p> <p>(2) 直井優、小峰秀雄、安原一哉、村上哲、百瀬和夫、坂上武晴(2005): 各種ベントナイト系緩衝材の膨潤特性に及ぼす人工海水の影響、土木学会論文集 No. 785/III-70, 39-49</p>

パラメータ	5. 難透水性覆土の初期空隙率
設定値	0.41
設定根拠	空隙率の設定値 40.6%(乾燥密度 1.61Mg/m ³ より算出される値)を丸めて 0.41 と設定した。
参考文献	

パラメータ	6. セメント系材料の初期鉱物組成 (3号廃棄物埋設地)																																																			
設定値	C-S-H ゲル	9.51mol/L_water																																																		
	ハイドロタルサイト	0.33mol/L_water																																																		
	エトリンサイト	0.04mol/L_water																																																		
	ギブサイト	0.94mol/L_water																																																		
	NaOH	0.03mol/L_water																																																		
	KOH	0.03mol/L_water																																																		
設定根拠	<p>3号廃棄物埋設地の充填モルタルの候補配合を参照した。参照したセメントの配合では、高炉スラグ微粉末が多く配合されていることから普通ポルトランドセメントと比べSi成分が多い。そこで、初期鉱物組成の算定方法は、文献⁽¹⁾に記載されているフライアッシュ高含有シリカフェームセメント (HFSC) の初期鉱物組成の算定方法を参照した。</p> <p>なお、骨材 (砕砂、陸砂) は反応しないものとした。</p> <p style="text-align: center;">3号廃棄物埋設地の充填モルタルの候補配合</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th colspan="4">単位量 [kg/m³]</th> </tr> <tr> <th colspan="2">結合材 (C)</th> <th colspan="2">細骨材 (S)</th> </tr> <tr> <th>中庸熱ポルトランドセメント</th> <th>高炉スラグ微粉末</th> <th>砕砂</th> <th>陸砂</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>127</td> <td>295</td> <td>440</td> <td>1026</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">中庸熱ポルトランドセメントの化学組成⁽¹⁾</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>SiO₂</th> <th>Al₂O₃</th> <th>Fe₂O₃</th> <th>CaO</th> <th>MgO</th> <th>SO₃</th> <th>Na₂O</th> <th>K₂O</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>23.3</td> <td>3.80</td> <td>3.90</td> <td>63.3</td> <td>0.90</td> <td>2.40</td> <td>0.30</td> <td>0.35</td> </tr> </tbody> </table> <p>(単位は wt%)</p> <p style="text-align: center;">高炉スラグ微粉末の化学組成</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>SiO₂</th> <th>Al₂O₃</th> <th>Fe₂O₃</th> <th>CaO</th> <th>MgO</th> <th>SO₃</th> <th>Na₂O</th> <th>K₂O</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>34.2</td> <td>14.9</td> <td>0.84</td> <td>42.0</td> <td>6.09</td> <td>0.02</td> <td>0.00</td> <td>0.00</td> </tr> </tbody> </table> <p>(単位は wt%)</p>				単位量 [kg/m ³]				結合材 (C)		細骨材 (S)		中庸熱ポルトランドセメント	高炉スラグ微粉末	砕砂	陸砂	127	295	440	1026	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	SO ₃	Na ₂ O	K ₂ O	23.3	3.80	3.90	63.3	0.90	2.40	0.30	0.35	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	SO ₃	Na ₂ O	K ₂ O	34.2	14.9	0.84	42.0	6.09	0.02	0.00	0.00
単位量 [kg/m ³]																																																				
結合材 (C)		細骨材 (S)																																																		
中庸熱ポルトランドセメント	高炉スラグ微粉末	砕砂	陸砂																																																	
127	295	440	1026																																																	
SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	SO ₃	Na ₂ O	K ₂ O																																													
23.3	3.80	3.90	63.3	0.90	2.40	0.30	0.35																																													
SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	SO ₃	Na ₂ O	K ₂ O																																													
34.2	14.9	0.84	42.0	6.09	0.02	0.00	0.00																																													

	<p>・水和鉱物量の算定方法⁽²⁾</p> <p>(1) SO₃の全量をエトリンサイトとして配分する。</p> <p>(2) Fe₂O₃の全量を C₃FH₆として配分する。(ただし、C₃FH₆は反応しないものとした。)</p> <p>(3) MgOの全量をハイドロタルサイトとして配分する。</p> <p>(4) SiO₂量及び残りの CaO 量に対し、これらの両成分が完全に消費されるような 2 種類の連続した Ca/Si 比を持つ C-S-H ゲルを設定する。</p> <p>残りの Al₂O₃ 量から C-S-H ゲルに取り込まれる Al₂O₃ 量を下式に従って差し引く。その後、Al₂O₃ が更に余剰するようであれば残りの Al₂O₃ をギブサイトとして配分する。</p> <p>C-S-H ゲルに取り込まれる Al 量の算定式</p> $[Al/Ca \text{ モル比}] = 0.2723 \times [Si/Ca \text{ モル比}] - 0.0692$ <p>(5) Na₂O、K₂O はそれぞれ NaOH、KOH として配分する。</p> <p>・初期空隙率：「9. セメント系材料の初期空隙率」参照</p>
参考文献	<p>(1) 五十嵐豪、寺本篤史、丸山一平(2012)：各種ポルトランドセメントおよび高炉スラグ微粉末を用いたセメント硬化体の結合水量と水蒸気 BET 比表面積の関係、日本建築学会構造系論文集、Vol. 77、No. 682、pp. 1819-1828</p> <p>(2) (独)日本原子力研究開発機構(2015)：平成 26 年度 地層処分技術調査等事業 セメント材料影響評価技術高度化開発 報告書</p>

パラメータ	7. セメント系材料の初期鉱物組成(1号廃棄物埋設地)																			
設定値	C-S-H ゲル	6.46mol/L_water																		
	ハイドロタルサイト	0.41mol/L_water																		
	エトリンサイト	0.01mol/L_water																		
	ギブサイト	1.19mol/L_water																		
	NaOH	0.01mol/L_water																		
	KOH	0.01mol/L_water																		
設定根拠	<p>1号廃棄物埋設地で実際に使用されている配合を参照した。各水和鉱物量の算定方法は、「6. セメント系材料の初期鉱物組成(3号廃棄物埋設地)」と同様、文献⁽¹⁾のHFSCの算定方法を参照した。 なお、骨材(砕砂、陸砂)は反応しないものとした。</p> <p style="text-align: center;">1号廃棄物埋設地の充填モルタルの配合</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th colspan="4" style="text-align: center;">単位量 [kg/m³]</th> </tr> <tr> <th colspan="2" style="text-align: center;">結合材(C)</th> <th colspan="2" style="text-align: center;">細骨材(S)</th> </tr> <tr> <th style="text-align: center;">中庸熱ポルトランドセメント</th> <th style="text-align: center;">高炉スラグ微粉末</th> <th style="text-align: center;">砕砂</th> <th style="text-align: center;">陸砂</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">42</td> <td style="text-align: center;">380</td> <td style="text-align: center;">877</td> <td style="text-align: center;">585</td> </tr> </tbody> </table> <p>・中庸熱ポルトランドセメントの化学組成：「6. セメント系材料の初期鉱物組成(3号廃棄物埋設地)」参照 ・高炉スラグ微粉末の化学組成：「6. セメント系材料の初期鉱物組成(3号廃棄物埋設地)」参照 ・水和鉱物量の算定方法：「6. セメント系材料の初期鉱物組成(3号廃棄物埋設地)」参照 ・初期空隙率：「9. セメント系材料の初期空隙率」参照</p>				単位量 [kg/m ³]				結合材(C)		細骨材(S)		中庸熱ポルトランドセメント	高炉スラグ微粉末	砕砂	陸砂	42	380	877	585
単位量 [kg/m ³]																				
結合材(C)		細骨材(S)																		
中庸熱ポルトランドセメント	高炉スラグ微粉末	砕砂	陸砂																	
42	380	877	585																	
参考文献	(1) (独)日本原子力研究開発機構(2015)：平成26年度 地層処分技術調査等事業 セメント材料影響評価技術高度化開発 報告書																			

パラメータ	8. 廃棄体の塩量
設定値	$\text{Na}_2\text{B}_4\text{O}_7 \cdot 10\text{H}_2\text{O}$ 0.01mol/L_water Na_2SO_4 0.07mol/L_water
設定根拠	<p>廃棄体 1 本あたりに含まれる塩量の平均値から 1 号廃棄物埋設地の埋設設備の一基当たりの外形寸法の間隙に均一に分布していると仮定して設定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 廃棄体(ドラム缶 1 本あたり)に含まれる塩量の平均値 ほう酸塩 13kg/ドラム缶 1 本、 硫酸塩 25.6kg/ドラム缶 1 本 ・ 塩濃度の算出 <ol style="list-style-type: none"> (1) 一基に埋設されるドラム缶の本数(5, 120 本)より、一基に埋設された塩量を算出 ほう酸塩 68t/基 硫酸塩 131t/基 (2) 廃棄体に含まれる塩量のうち、1/10 が岩盤側に流出したと仮定*1し、塩量を算出 ほう酸塩 6.80t/基 硫酸塩 13.10t/基 (3) 廃棄体中の塩が埋設設備の一基当たりの外形寸法全体に均質に分布していると仮定し、1 号廃棄物埋設地の埋設設備の一基当たりの外形寸法(24m×24m×6m)で上記の塩量を割って、1m³当たりの塩量を算出 ほう酸塩 1.98kg/m³ 硫酸塩 3.79kg/m³ (4) 単位換算(kg/m³→mol/L) ほう酸塩 0.01mol/L 硫酸塩 0.03mol/L (5) 空隙水 1L に対する塩濃度を算出(空隙率で割る) ほう酸塩 0.01mol/L_water 硫酸塩 0.07mol/L_water ・ 初期空隙率：「9. セメント系材料の初期空隙率」参照 <p>*1: 廃棄体に含まれる塩量のうち岩盤側へ流出する割合については、地下水流動解析の結果より設定した。</p>
参考文献	

パラメータ	9. セメント系材料の初期空隙率
設定値	0.36
設定根拠	<p>空隙率の設定値 35.7%(空隙率と透水係数の推定式より換算した値)を丸めて 0.36 と設定した。</p> <p>3号廃棄物埋設地の解析で設定している 3:7モルタルの空隙率は 26.2%であるが、水セメント比を考慮して 1:9モルタルの値(空隙率 35.7%を丸めて 0.36)を参照した。</p>
参考文献	

パラメータ	10. 難透水性覆土の透水係数
設定値	$K = 10^{1.30 \cdot C_i} \cdot e_{sme}^{3.48 \cdot C_i} \cdot K_0$ <p>ただし、$C_i > 10^{1.49 \cdot ESP - 1.0}$ のとき、$C_i = 10^{1.49 \cdot ESP - 1.0}$</p> $K > 10^{1.63 \cdot e_{sme} - 0.24} \cdot K_0$ のとき、 $K = 10^{1.63 \cdot e_{sme} - 0.24} \cdot K_0$ $K > 1.0 \cdot 10^{-5}$ のとき、 $K = 1.0 \cdot 10^{-5}$ $K_0 = \begin{cases} (0.91 - 1.57 \cdot ESP + 2.00 \cdot ESP^2) \times 10^{-13} \times e_{sme}^{7.44 - 5.69 \cdot ESP} & e_{sme} \leq 7.0 \\ (0.91 - 1.57 \cdot ESP + 2.00 \cdot ESP^2) \times 10^{-13} \times 7.0^{7.44 - 5.69 \cdot ESP} \left(\frac{e_{sme}}{7.0}\right)^{11.4} & 7.0 < e_{sme} \end{cases}$ <p>ただし、$K_0 < K_0 _{ESP=1}$ のとき、$K_0 = K_0 _{ESP=1}$</p> <p>C_i: 空隙水の当量イオン濃度 [eq/L] ESP: ベントナイトの交換性ナトリウム割合 [-] e_{sme}: スメクタイト間隙比 [-] K: 透水係数 [m/s]</p>
設定根拠	透水試験結果を参照して取りまとめられている文献(1)の式を使用する。
参考文献	(1) 伊藤弘之、三原守弘(2005): ベントナイト系材料の飽和透水係数の変遷評価式、JNC TN8400 2005-029

パラメータ	11. 難透水性覆土の拡散係数																								
設定値	$D_e = 2.27 \times 10^{-9} \varepsilon^n$ $n = 2.22 f_s^{0.13} + 1$ $f_s = a \times f_b$ D_e : 実効拡散係数[m ² /s] ε : 空隙率[-] a : ベントナイト中のモンモリロナイト割合[-] f_b : ベントナイトの配合割合[-]																								
設定根拠	<p>空隙率と実効拡散係数の実測値にフィッティングした式⁽¹⁾を用いて、実効拡散係数を設定した。Na型ベントナイトをCa型化して取得した実効拡散係数を既存のNa型ベントナイトの値と比較し、ほぼ同程度の値であると推定されている⁽²⁾。</p> <div data-bbox="635 1041 1136 1411" data-label="Figure"> <table border="1"> <caption>Approximate data points from Figure 4</caption> <thead> <tr> <th>Porosity</th> <th>Effective diffusion coefficient (m²/s)</th> <th>Source</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0.25</td> <td>~5.0E-11</td> <td>PNC, 1994</td> </tr> <tr> <td>0.35</td> <td>~1.0E-10</td> <td>Shimura et al., 1995</td> </tr> <tr> <td>0.45</td> <td>~2.0E-10</td> <td>Sato, 2002/perpendicular</td> </tr> <tr> <td>0.55</td> <td>~4.0E-10</td> <td>Sato, 2002/perpendicular</td> </tr> <tr> <td>0.65</td> <td>~8.0E-10</td> <td>Sato, 2002/perpendicular</td> </tr> <tr> <td>0.75</td> <td>~1.5E-09</td> <td>Sato, 2002/perpendicular</td> </tr> <tr> <td>0.85</td> <td>~3.0E-09</td> <td>Kato et al., 1995</td> </tr> </tbody> </table> </div> <p>Figure 4 Relationship between porosity and effective diffusion coefficients of HTO in Kunigel V1</p> <p>(1) より引用</p>	Porosity	Effective diffusion coefficient (m ² /s)	Source	0.25	~5.0E-11	PNC, 1994	0.35	~1.0E-10	Shimura et al., 1995	0.45	~2.0E-10	Sato, 2002/perpendicular	0.55	~4.0E-10	Sato, 2002/perpendicular	0.65	~8.0E-10	Sato, 2002/perpendicular	0.75	~1.5E-09	Sato, 2002/perpendicular	0.85	~3.0E-09	Kato et al., 1995
Porosity	Effective diffusion coefficient (m ² /s)	Source																							
0.25	~5.0E-11	PNC, 1994																							
0.35	~1.0E-10	Shimura et al., 1995																							
0.45	~2.0E-10	Sato, 2002/perpendicular																							
0.55	~4.0E-10	Sato, 2002/perpendicular																							
0.65	~8.0E-10	Sato, 2002/perpendicular																							
0.75	~1.5E-09	Sato, 2002/perpendicular																							
0.85	~3.0E-09	Kato et al., 1995																							
参考文献	<p>(1) Mihara, M. and Sasaki, R. (2005): RAMDA; Radio-nuclides Migration Datasets (RAMDA) on cement, bentonite and rock for TRU waste repository in Japan, JNC TN8400 2005-027.</p> <p>(2) 三原守弘、伊藤勝、加藤博康、上田真三(1999) : カルシウム型ベントナイトのトリチウム、セシウム、ヨウ素及び炭素の実効拡散係数の取得(試験報告)、JNC TN8430 99-011.</p>																								

パラメータ	12. セメント系材料の拡散係数
設定値	$2.27 \times 10^{-9} \text{m}^2/\text{s}$
設定根拠	セメント系材料は長期的に化学劣化以外の幾何学的劣化(ひび割れ)が想定されるため、物質移動が速い状態となることを想定し、拡散係数として自由水中のトリチウム水の拡散係数 ⁽¹⁾ を設定する。
参考文献	(1) 日本化学会(2004): 化学便覧 基礎編 改定5版、丸善、東京、p-II.64

パラメータ	13. モンモリロナイトの溶解速度
設定値	$Rate = \left(4.74 \cdot 10^{-6} \cdot e^{-39.57/RT} \cdot \frac{177 \cdot e^{20.37/RT} \cdot a_{OH^-}}{1 + 177 \cdot e^{20.37/RT} \cdot a_{OH^-}} + 1.70 \cdot e^{69.67/RT} \right. \\ \left. \cdot \frac{0.0297 \cdot e^{23.53/RT} \cdot a_{OH^-}}{1 + 0.0297 \cdot e^{23.53/RT} \cdot a_{OH^-}} \right) \cdot A_{min} \\ \cdot \{1 - \exp(6 \cdot 10^{-10} \cdot (2 \cdot \Delta Gr/RT)^6)\}$ <p> <i>Rate</i> : モンモリロナイト溶解速度 [mol/s] <i>R</i> : 気体定数 [kJ/(K・mol)] <i>T</i> : 絶対温度 [K] <i>a_{OH⁻}</i> : OH⁻イオンの活量 <i>A_{min}</i> : 鉱物の反応表面積 [m²] <i>ΔGr</i> : 反応のギブス自由エネルギー変化 [kJ/mol] </p>
設定根拠	<p>TRU2 次レポート⁽¹⁾の地化学解析で使用されている式を使用する。 モンモリロナイトが液相と平衡に近い状態になったときの溶解速度を表現可能な飽和濃度依存性⁽²⁾と、高 pH の液相中の溶解速度へ適用するための pH 依存性⁽³⁾を含んでいる。</p>
参考文献	<p>(1) 電気事業連合会 核燃料サイクル開発機構(2005) : TRU 廃棄物分技術検討書－第 2 次 TRU 廃棄物処分研究開発取りまとめ－ JNC TY1400 2005-013 FEPC TR2-2005-02</p> <p>(2) Cama, J., Ganor, J., Ayora, C. and Lasaga, C.A. (2000): Smectite dissolution kinetics at 80°C and pH8.8, <i>Geochimica et Cosmochimica Acta</i>, Vol.64, No.15, pp.2701-2717.</p> <p>(3) Sato, T., Kuroda, M., Yokoyama, S., Tsutsui, M., Fukushi, K., Tanaka, T. and Nakayama, S. (2004): Dissolution mechanism and kinetics of smectite under alkaline conditions, NUMO-TR-04-05.</p>

パラメータ	14. 二次鉱物		
設定値	フィリップサイト クリノプチロライト ヒューランダイト C-S-H ゲル エトリングイト モノサルフェート ハイドロタルサイト セピオライト ポルトランダイト	ブルーサイト カルサイト ドロマイト カルセドニ カリ長石 アナルサイム ローモンタイト イライト	C_3ASH_4 C_4AH_{13} C_4AH_{19} ゲーレンナイト水和物 カオリナイト パイロフィライト フリーデル氏塩 モノサルフェート 2 水石膏
設定根拠	TRU2 次レポート ⁽¹⁾ の地化学解析で考慮されている鉱物を設定した。また文献 ⁽²⁾ では、TRU2 次レポート ⁽¹⁾ でセメント系材料の二次鉱物として考慮されているものに加え 2 水石膏を追加していたことから、本解析でも 2 水石膏を考慮することとした。		
参考文献	(1) 電気事業連合会 核燃料サイクル開発機構(2005)：TRU 廃棄物分技術検討書－第 2 次 TRU 廃棄物処分研究開発取りまとめ－ JNC TY1400 2005-013 FEPC TR2-2005-02 (2) (独)日本原子力研究開発機構(2013)：平成 24 年度 地層処分技術調査等事業 セメント材料影響評価技術高度化開発 報告書		

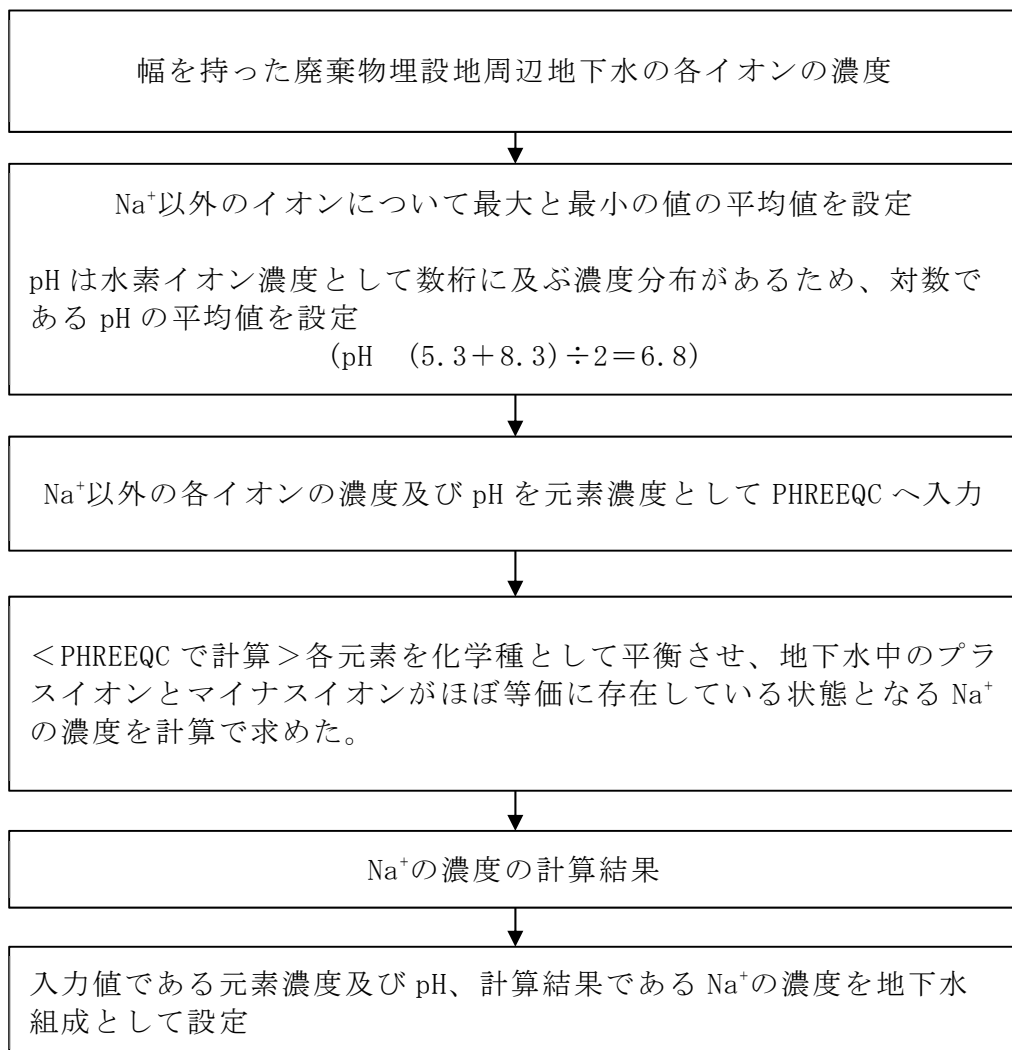
地下水組成のチャージバランス計算

地球化学解析において地下水組成を設定する場合、チャージのバランスがとれた状態(陽イオン、陰イオン、pHの電荷の合計が±0になっている状態)となるようにイオンあるいはpHで、電荷の合計を±0に調整して地球化学解析に与える。チャージバランスの計算はPHREEQCを用いた平衡計算となる。

六ヶ所水質試験結果(第1表)に基づいた地下水組成を設定する場合の流れを第1図に示す。ここでのチャージバランスは、元素濃度が他の元素モル濃度と比較して高く、チャージバランスの調整のため濃度が変動しても元の値から大きく外れないと考えて、Na⁺でチャージバランスをとることとした。例えば、FOHP(Fresh-Oxidizing-High-pH)地下水においても、Na⁺にてチャージバランスを計算している⁽⁵⁾。Na以外のイオンについては、最大と最小の値の平均値を設定した。

Na⁺の平均値の $8.4 \times 10^{-4} \text{mol/L}$ (第2表参照)に対して、チャージバランス計算後のNa⁺濃度は $6.4 \times 10^{-4} \text{mol/L}$ (第3表参照)であり、1/4程度の低下率となるが、桁が変わるほどの変化ではないことが確認された。

参考として、Na⁺ではなくpHでチャージバランスをとったケースを第4表に示す。pHは9.8となった。



第 1 図 地下水組成設定計算フロー

第1表 六ヶ所サイトの水質試験結果(3号廃棄物埋設地の水質試験結果)

Na ⁺	7.2~31.5mg/L
K ⁺	0.5~5.6mg/L
Ca ²⁺	0.1~7.2mg/L
Mg ²⁺	0.1~3.8mg/L
HCO ₃ ⁻	5.6~51.9mg/L
SO ₄ ²⁻	1.0~21.7mg/L
Cl ⁻	12.9~20.3mg/L
pH	5.3~8.3

第2表 六ヶ所サイトの水質試験結果の平均値

Na ⁺	19.35mg/L	8.4×10^{-4} mol/L
K ⁺	3.05mg/L	7.8×10^{-5} mol/L
Ca ²⁺	3.65mg/L	9.1×10^{-5} mol/L
Mg ²⁺	1.95mg/L	8.0×10^{-5} mol/L
HCO ₃ ⁻	28.75mg/L	4.7×10^{-4} mol/L
SO ₄ ²⁻	11.35mg/L	1.2×10^{-4} mol/L
Cl ⁻	16.6mg/L	4.7×10^{-4} mol/L
pH	6.8	6.8

第3表 Na でチャージバランスを計算した後の地下水組成

Na ⁺	$6.4 \times 10^{-4} \text{mol/L}^{*1}$
K ⁺	$7.8 \times 10^{-5} \text{mol/L}$
Ca ²⁺	$9.1 \times 10^{-5} \text{mol/L}$
Mg ²⁺	$8.0 \times 10^{-5} \text{mol/L}$
HCO ₃ ⁻	$4.7 \times 10^{-4} \text{mol/L}$
SO ₄ ²⁻	$1.2 \times 10^{-4} \text{mol/L}$
Cl ⁻	$4.7 \times 10^{-4} \text{mol/L}$
pH	6.8
*1 : PHREEQC にてチャージバランスを保つように計算して設定	

(参考) 第4表 pH でチャージバランスを調整した場合

Na ⁺	$8.4 \times 10^{-4} \text{mol/L}$
K ⁺	$7.8 \times 10^{-5} \text{mol/L}$
Ca ²⁺	$9.1 \times 10^{-5} \text{mol/L}$
Mg ²⁺	$8.0 \times 10^{-5} \text{mol/L}$
HCO ₃ ⁻	$4.7 \times 10^{-4} \text{mol/L}$
SO ₄ ²⁻	$1.2 \times 10^{-4} \text{mol/L}$
Cl ⁻	$4.7 \times 10^{-4} \text{mol/L}$
pH	9.8 ^{*1}
*1 : PHREEQC にてチャージバランスを保つように計算して設定	

覆土が長期間にわたり低透水性を
維持することができる要因

目 次

1. はじめに	1
2. 難透水性覆土の透水係数に影響を与える因子分析	1
3. 難透水性覆土の低透水性が維持されることの妥当性評価	4
(1) モンモリロナイトの溶解速度の影響	5
(2) 難透水性覆土の拡散係数(物質の移動速度)の影響	7
(3) ベントナイト中の随伴鉱物の反応の影響	9
(4) セメント系材料の配合(アルカリ成分の供給量)の影響	11
4. まとめ	14

1. はじめに

本資料は、補足説明資料 5(以下「補足 5 本文」という。)のうち「3. 解析結果」に示す地球化学解析結果(以下「解析結果」という。)について追加説明するものである。

解析結果では、1,000 年までの範囲において難透水性覆土の低透水性の全体的な性能は維持されていた。そこで、1,000 年間という長期間にわたり難透水性覆土が低透水性を維持したことに寄与した要因について分析し、補足 5 本文に示す解析条件や解析結果の妥当性・保守性・安定性について検討する。

2. 難透水性覆土の透水係数に影響を与える因子分析

難透水性覆土の透水係数の変化は、モンモリロナイトの交換性ナトリウム割合 (ESP)、モンモリロナイトと空隙の体積比 (e_{sme}) 及び空隙水の当量イオン濃度 (C_i) の関数として表現される(補足 5 本文「2. (4). (iii) 難透水性覆土の透水係数の変遷評価式」の数式 2)。透水係数に大きな影響を与えている因子を把握するため、各因子を変化させた場合に透水係数がどのような応答をするのか感度解析を行った。各因子の変化が透水係数に与える影響を第 1 図に示す。

$$K = 10^{1.30 \cdot C_i} \cdot e_{sme}^{3.48 \cdot C_i} \cdot K_0 \quad (\text{数式 2})$$

ただし、 $C_i > 10^{1.49 \cdot ESP - 1.0}$ のとき、 $C_i = 10^{1.49 \cdot ESP - 1.0}$

$$K > 10^{1.63 \cdot e_{sme} - 0.24} \cdot K_0 \text{ のとき、 } K = 10^{1.63 \cdot e_{sme} - 0.24} \cdot K_0$$

$$K > 1.0 \cdot 10^{-5} \text{ のとき、 } K = 1.0 \cdot 10^{-5}$$

K_0

$$= \begin{cases} (0.91 - 1.57 \cdot ESP + 2.00 \cdot ESP^2) \times 10^{-13} \times e_{sme}^{7.44 - 5.69 \cdot ESP} & e_{sme} \leq 7.0 \\ (0.91 - 1.57 \cdot ESP + 2.00 \cdot ESP^2) \times 10^{-13} \times 7.0^{7.44 - 5.69 \cdot ESP} \left(\frac{e_{sme}}{7.0}\right)^{11.4} & 7.0 < e_{sme} \end{cases}$$

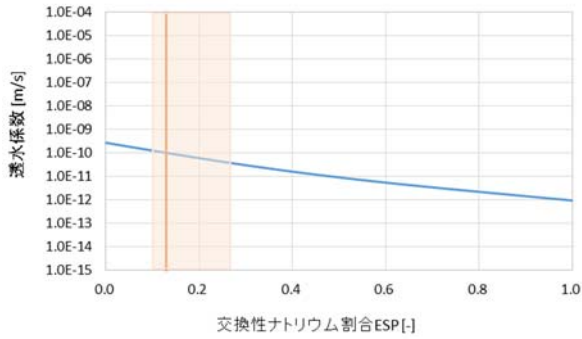
ただし、 $K_0 < K_0|_{ESP=1}$ のとき、 $K_0 = K_0|_{ESP=1}$

C_i : 空隙水の当量イオン濃度 [eq/L]

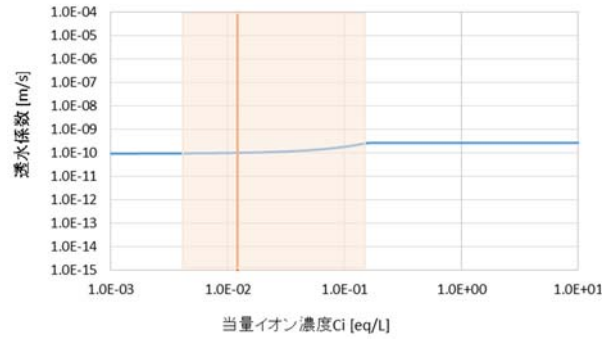
ESP : ベントナイトの交換性ナトリウム割合 [-]

e_{sme} : スメクタイト間隙比 [-]

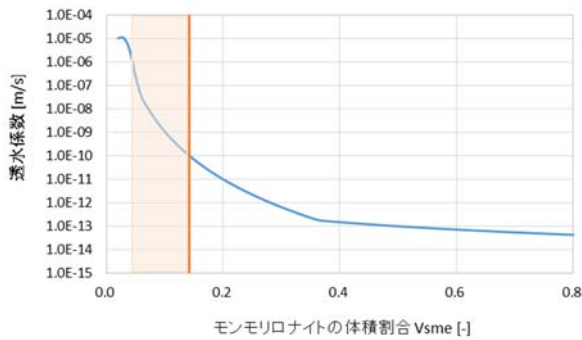
K : 透水係数 [m/s]



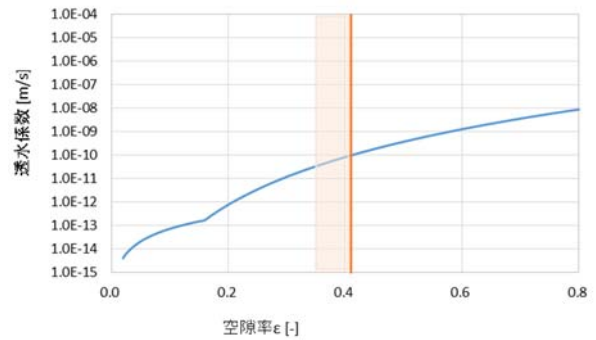
交換性ナトリウム割合ESP[-]
モンモリロナイトの交換性ナトリウム割合 (ESP)



当量イオン濃度 C_i [eq/L]
空隙水の当量イオン濃度 (C_i)



モンモリロナイトの体積割合 V_{sme} [-]
モンモリロナイト体積割合 (V_{sme})



空隙率 ϵ [-]
空隙率 (ϵ)

注 1 : 橙色の線は初期値を、枠で囲まれている部分は補足 5 本文での解析における 1,000 年間の変化幅を示す。

注 2 : 変化させた因子以外のパラメータは、初期値で固定した。

第 1 図 各因子の透水係数への影響

○交換性ナトリウム割合 (ESP)

第1図を見ると、 ESP が増加するに従い透水係数は緩やかに低下する傾向を示している。解析では、モンモリロナイトのイオン交換反応により ESP が変化することで、透水係数に影響を及ぼすことが考えられる。難透水性覆土はCa型ベントナイトを配合した材料仕様となっていることから、交換性陽イオンは主にCaである(初期 ESP は0.13程度)。また、セメント系材料の主要な化学成分はCaであり、NaやKに比べCaの供給量が多いことから、イオン交換反応は起こり難いと考えられる。そのため、本解析では ESP の影響はほとんどないものと思われる。

○当量イオン濃度 (C_i) (溶液濃度)

当量イオン濃度が透水係数に与える影響は、 ESP の増加とともに顕著になること、透水係数が濃度によらず一定となり始める濃度は ESP の増加とともに大きくなる傾向がある。難透水性覆土の材料仕様はCa型ベントナイトであり初期 ESP が小さいことから、当量イオン濃度が透水係数に及ぼす影響は小さいことが考えられ、第1図からも感度が小さいことがわかった。

○モンモリロナイトと空隙の体積比 (e_{sme}) (モンモリロナイト体積割合、空隙率)

モンモリロナイトと空隙の体積比 (e_{sme}) は、モンモリロナイトの体積割合 (V_{sme}) と空隙率 (ε) の比である。

モンモリロナイトの体積割合について、第1図を見ると、空隙率を初期値で固定した場合、体積割合が減少するに従い透水係数が大きくなる傾向があり、特に体積割合が小さい領域では透水係数に与える影響が顕著に表れている。難透水性覆土のベントナイト配合率は30wt%、初期のモンモリロナイトの体積割合は0.14程度であり、モンモリロナイトが溶解し体積割合が減少すると、透水係数は大きく上昇することがわかる。

また、空隙率についても、第1図を見ると、モンモリロナイトの体積割合を初期値で固定した場合、空隙率が大きくなるほど透水係数も上昇しており、空隙率が透水係数に与える影響は大きいことがわかる。解析では、モンモリロナイトが溶解することで空隙率が大きくなる一方、二次鉱物が生成されることにより空隙率が小さくなることが考えられる。

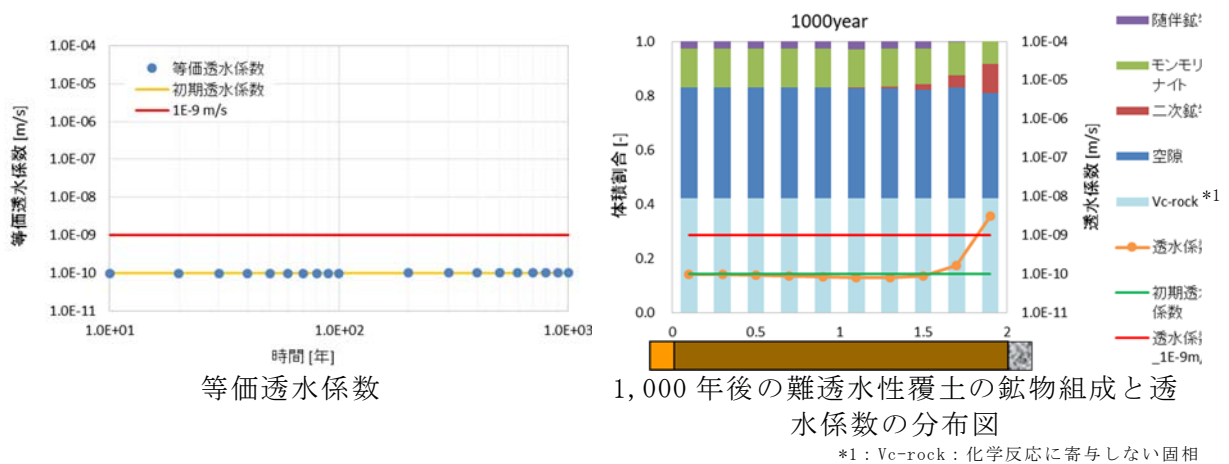
補足 5 本文「3. 解析結果」は、セメント境界面では、二次鉱物の生成により空隙率がわずかに減少している結果となっている一方で、透水係数は上昇している結果であった。これは、モンモリロナイトが溶解しモンモリロナイトの体積割合が減少する効果の方が大きいためであると考えられる。したがって、本解析では、透水係数に与える空隙率の影響はモンモリロナイトの体積割合に比べ小さいものと考えられる。

以上より、難透水性覆土の透水性に大きな影響を与える因子は「モンモリロナイトの体積割合」であると考えられる。すなわち、難透水性覆土が低透水性を維持するためにはセメント由来のアルカリ成分によるモンモリロナイトの溶解という化学劣化影響を加味しても十分なモンモリロナイトの体積が残存していることが重要な要因である。

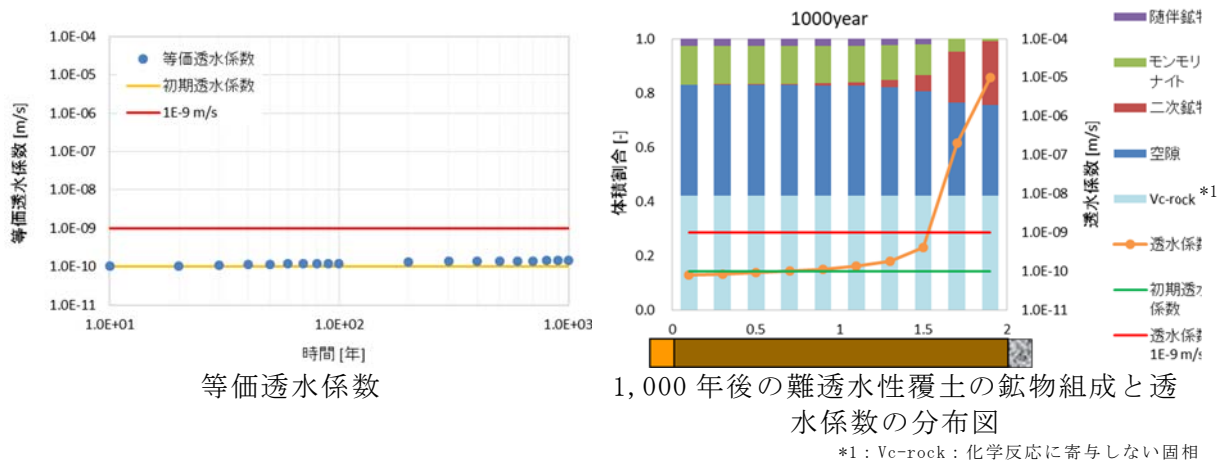
3. 難透水性覆土の低透水性が維持されることの妥当性評価

「2. 難透水性覆土の透水係数に影響を与える因子分析」では、難透水性覆土の透水性に大きな影響を与える因子はモンモリロナイトの体積割合であることを確認し、難透水性覆土の低透水性が維持される要因は、セメント由来のアルカリ成分による化学劣化影響を加味しても十分にモンモリロナイトが残存していることだと考えた。そこで難透水性覆土の化学変質解析において、モンモリロナイトの体積割合に影響を与え得る要因に着目した極端なケーススタディを実施し、モンモリロナイトの体積割合への影響を考慮したとしても、難透水性覆土の低透水性が維持されることの妥当性を評価した。

比較用のベースケースとして、補足 5 本文「3. (1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)」に記載されている条件(ケース①)の解析結果(難透水性覆土の等価透水係数の時間変化及び 1,000 年後の鉱物分布と透水係数の分布図)を、3号廃棄物埋設地については第 2 図に、1号廃棄物埋設地については第 3 図に再掲して示す。



第2図 補足5本文の第5図及び第7図における3号廃棄物埋設地の解析結果



第3図 補足5本文の第6図及び第10図における1号廃棄物埋設地の解析結果

(1) モンモリロナイトの溶解速度の影響

難透水性覆土の化学変質解析においてモンモリロナイトの体積割合に影響を与える要因のうち、モンモリロナイトの溶解速度を変化させて影響を評価した。

補足5本文の地球化学解析に用いたモンモリロナイトの溶解速度条件は、試験より得られた経験式を組み合わせさせた式(補足5本文「2.(4).(ii) モンモリロナイトの溶解速度」の数式1)とした。この式は、平衡に接近した場合の溶解速度の減少について考慮したものである。それに対してここでは、モンモリロナイトの溶解量を大きく見積もるため、モンモリロナイトの溶解が瞬時に平衡に達する(瞬時平衡)と仮定した解

析を実施し、モンモリロナイトの溶解速度がモンモリロナイトの溶解に与える影響について検討した。

なお、モンモリロナイトの溶解速度以外の解析条件は補足 5 本文「3. (1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)」に記載されている条件(ケース①)と同様とした。

3号廃棄物埋設地の解析結果(難透水性覆土の等価透水係数の時間変化及び1,000年後の鉱物分布と透水係数の分布図)を第4図に、1号廃棄物埋設地の解析結果を第5図に示す。モンモリロナイトの溶解速度を経験式(補足 5 本文「2. (4). (ii) モンモリロナイトの溶解速度」の数式 1)とした場合の解析結果と比べ、セメント系材料の境界面において、モンモリロナイトの溶解量は多くなり透水係数も上昇する結果となった。ただし、変質は部分的であり、等価透水係数もわずかに上昇するだけで、全体的には大きな影響はなかった。

モンモリロナイトの溶解速度はモンモリロナイトの体積割合に大きな影響を与えることがわかった。しかし、平衡に接近した場合の溶解速度の減少を考慮せず瞬時平衡とした場合でも、1,000年程度は低透水性を維持できるモンモリロナイト量は残存することを確認した。

$$Rate = \left(4.74 \cdot 10^{-6} \cdot e^{-39.57/RT} \cdot \frac{177 \cdot e^{20.37/RT} \cdot a_{OH^-}}{1 + 177 \cdot e^{20.37/RT} \cdot a_{OH^-}} + 1.70 \cdot e^{69.67/RT} \cdot \frac{0.0297 \cdot e^{23.53/RT} \cdot a_{OH^-}}{1 + 0.0297 \cdot e^{23.53/RT} \cdot a_{OH^-}} \right) \cdot A_{min} \cdot \{1 - \exp(6 \cdot 10^{-10} \cdot (2 \cdot \Delta Gr/RT)^6)\}$$

(数式 1)

Rate : モンモリロナイトの溶解速度 [mol/s]

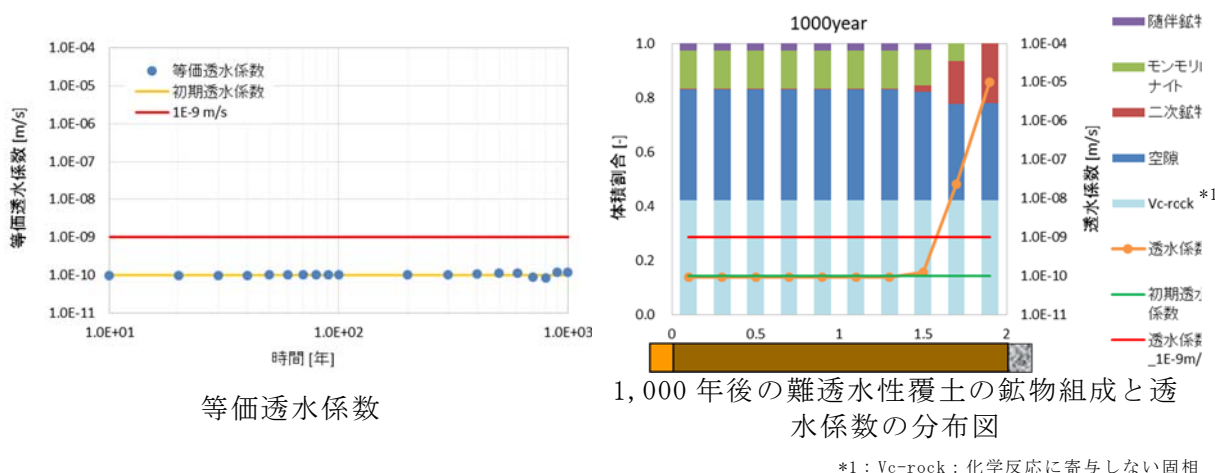
R : 気体定数 [kJ/(K·mol)]

T : 絶対温度 [K]

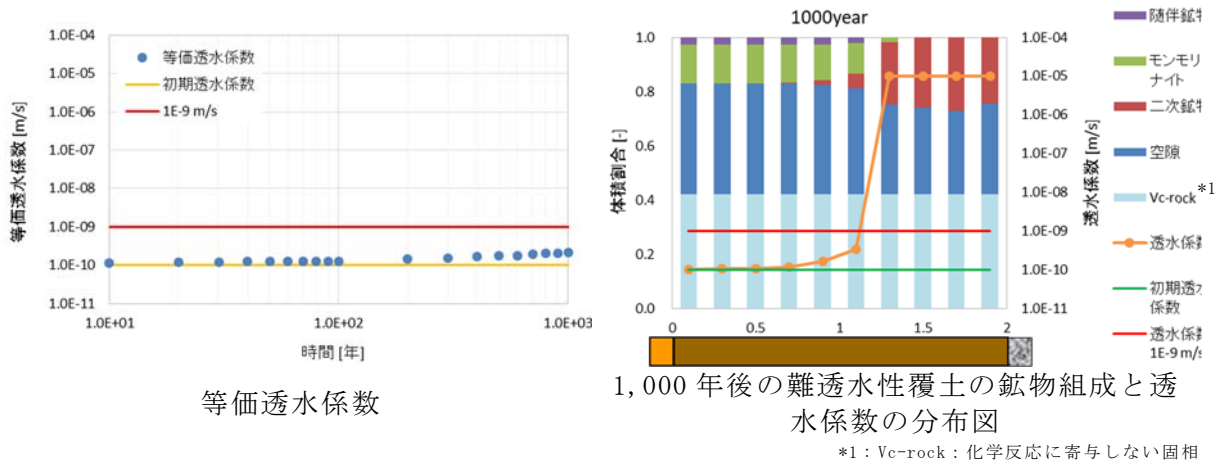
a_{OH⁻} : OH⁻イオンの活量

A_{min} : 鉱物の反応表面積 [m²]

ΔGr : 反応のギブス自由エネルギー変化(化学親和力) [kJ/mol]



第4図 3号廃棄物埋設地の解析結果(モンモリロナイトの溶解速度: 瞬時平衡)



第5図 1号廃棄物埋設地の解析結果(モンモリロナイトの溶解速度: 瞬時平衡)

(2) 難透水性覆土の拡散係数(物質の移動速度)の影響

難透水性覆土の変質解析においてモンモリロナイトの体積割合に影響を与える要因のうち、難透水性覆土の拡散係数(物質の移動速度)を変化させて影響を評価した。補足5本文の地球化学解析に用いた難透水性覆土の拡散係数条件は、ベントナイト系材料中のトリチウムの実効拡散係数測定結果より得られた経験式(補足5本文「2.(4).(iv) 難透水性覆土の拡散係数」の数式3)とした。それに対してここでは、モンモリロナイトの溶解量を大きく見積もるため、物質移動が速い状態の拡散係数として自由

水中のトリチウム水の拡散係数 ($2.27 \times 10^{-9} \text{m}^2/\text{s}$) を設定し解析を実施し、物質の移動速度がモンモリロナイトの溶解に与える影響について検討した。

なお、難透水性覆土中の拡散係数以外の解析条件は、補足 5 本文に記載されている条件と同様とした。

3号廃棄物埋設地の解析結果(難透水性覆土の等価透水係数の時間変化及び1,000年後の鉱物分布と透水係数の分布図)を第6図に、1号廃棄物埋設地の解析結果を第7図に示す。経験式(補足5本文「2.(4).(iv) 難透水性覆土の拡散係数」の数式3)ではモンモリロナイトが溶解した範囲はセメント系材料の境界面近傍のみであったが、拡散係数が大きい設定では溶解する範囲は広がる結果となった。しかし、3号廃棄物埋設地の解析結果については、全体的なモンモリロナイトの体積割合に大きな差は見られなかったため、等価透水係数にもほとんど影響は見られなかった。一方、1号廃棄物埋設地の解析結果については、全体的なモンモリロナイトの体積割合が減少しており、等価透水係数もわずかに上昇する結果となった。

難透水性覆土の拡散係数について、モンモリロナイトが溶解する領域に多少影響を与えることがわかった。しかしながら、十分な量のモンモリロナイトが残存するため、1,000年程度の期間は難透水性覆土の低透水性は維持されることを確認した。

$$D_e = 2.27 \times 10^{-9} \times \varepsilon^n \quad (\text{数式 3})$$

$$n = 2.22 f_s^{0.13} + 1$$

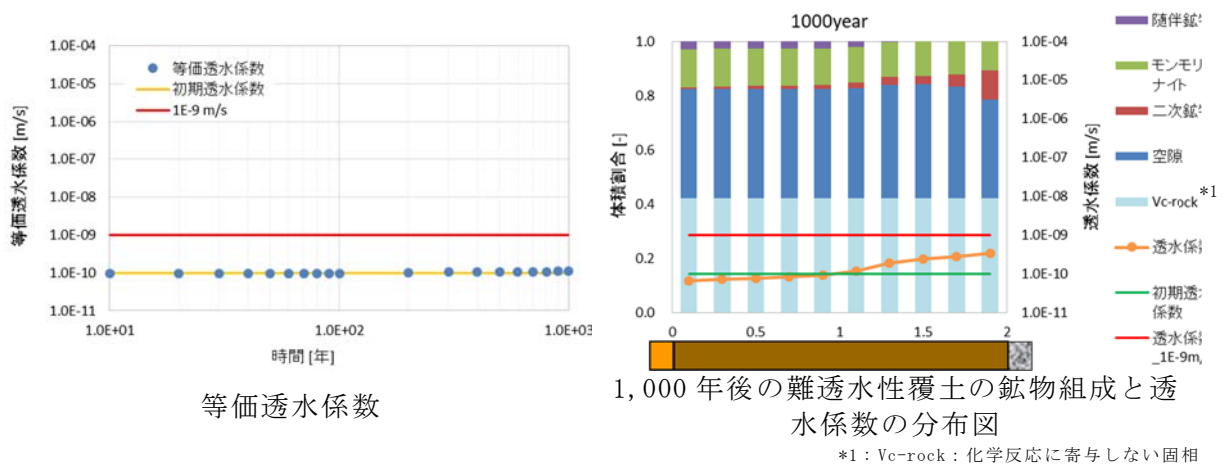
$$f_s = a \times f_b$$

D_e : 実効拡散係数 [m^2/s]

ε : 空隙率 [-]

a : ベントナイト中のモンモリロナイト割合 [-]

f_b : ベントナイトの配合割合 [-]

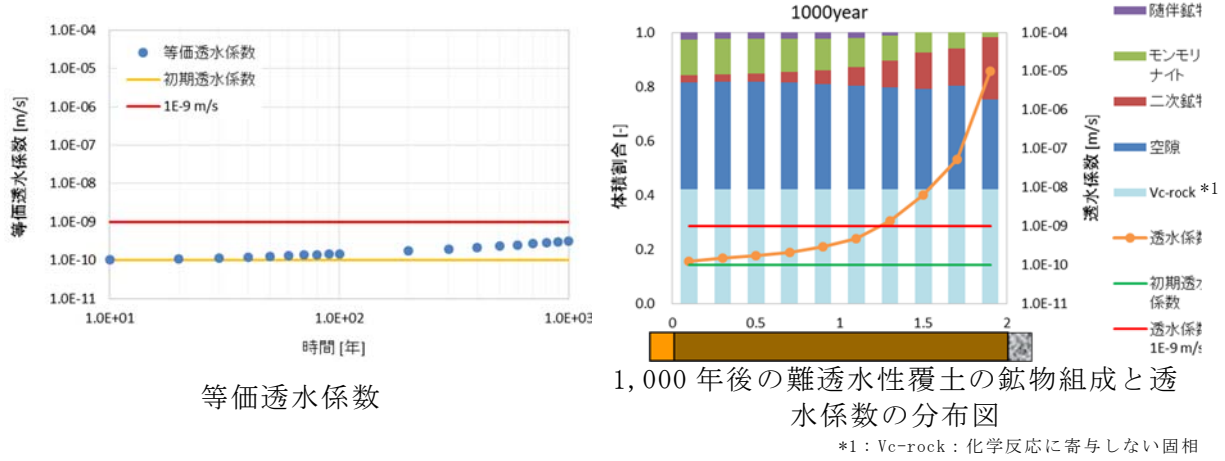


等価透水係数

1,000年後の難透水性覆土の鉱物組成と透水係数の分布図

*1: Vc-rock: 化学反応に寄与しない固相

第6図 3号廃棄物埋設地の解析結果
(覆土の拡散係数: 自由水中のトリチウム水の拡散係数)



等価透水係数

1,000年後の難透水性覆土の鉱物組成と透水係数の分布図

*1: Vc-rock: 化学反応に寄与しない固相

第7図 1号廃棄物埋設地の解析結果
(覆土の拡散係数: 自由水中のトリチウム水の拡散係数)

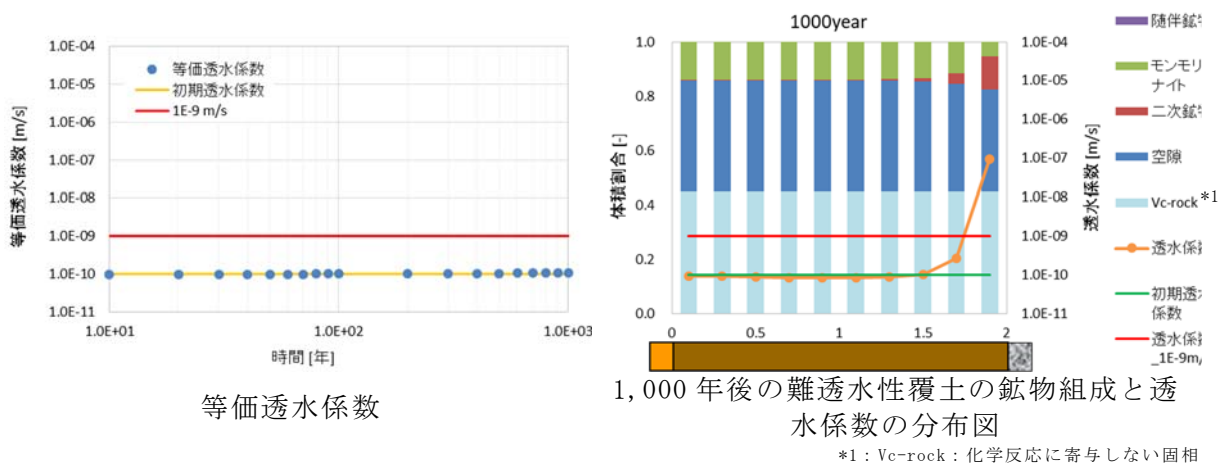
(3) ベントナイト中の随伴鉱物の反応の影響

難透水性覆土の変質解析においてモンモリロナイトの体積割合に影響を与える要因のうち、ベントナイト中の随伴鉱物の反応の有無を変化させて影響を評価した。

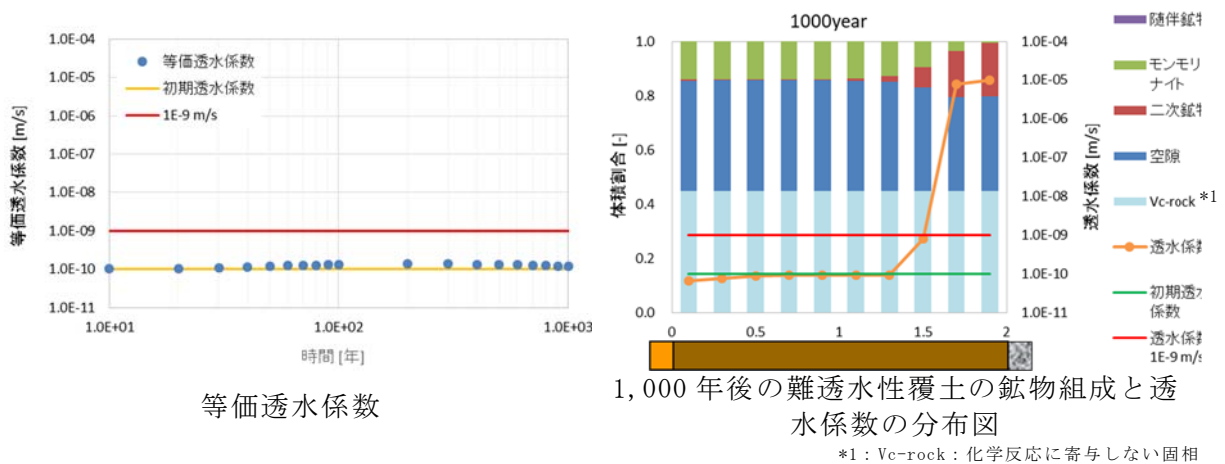
難透水性覆土中の初期鉱物組成として、ベントナイト中に含まれるモンモリロナイトの他、ベントナイト中の随伴鉱物を設定し、補足5本文における解析では随伴鉱物の反応(緩衝作用)を考慮している。これらの随伴鉱物の溶解反応によって放出される Si がモンモリロナイトの溶解反応や二次鉱物の沈殿反応に寄与する溶存 Si

濃度に直接影響することから、これらの反応の有無は解析結果に影響を与える可能性がある。そこで、ここでは随伴鉱物の反応を考慮しない解析を行い、随伴鉱物の反応によるアルカリ緩衝性の有無がモンモリロナイトの溶解に与える影響について検討した。なお、その他の解析条件は補足5本文「3. (1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)」に記載されている条件(ケース①)と同様とした。

3号廃棄物埋設地の解析結果(難透水性覆土の等価透水係数の時間変化及び1,000年後の鉱物分布と透水係数の分布図)を第8図に、1号廃棄物埋設地の解析結果を第9図に示す。解析結果から、ベントナイトに含まれる随伴鉱物を地球化学反応において考慮しなかった場合でも解析結果に与える影響が小さいことが確認された。



第8図 3号廃棄物埋設地の解析結果(随伴鉱物の反応：反応を考慮しない)



第 9 図 1 号廃棄物埋設地の解析結果(随伴鉱物の反応：反応を考慮しない)

(4) セメント系材料の配合(アルカリ成分の供給量)の影響

難透水性覆土の変質解析においてモンモリロナイトの体積割合に影響を与える要因のうち、セメント系材料の配合(アルカリ成分の供給量)を変化させて影響を評価した。

モンモリロナイトの溶解量はセメント系材料由来のアルカリ成分量にも影響される。セメント系材料のアルカリ量は、セメント系材料の種類や配合、体積により決定される。補足 5 本文における解析に用いたセメント系材料の種類・配合は、実際の埋設設備に用いられる条件に基づき設定している。それに対してここでは、モンモリロナイトの溶解量を大きく見積もるため、セメント系材料の種類・配合として多量のアルカリ成分を含む普通ポルトランドセメントが主に配合された仕様を設定した。設定したセメント系材料の配合及び化学組成を第 1 表と第 2 表に、設定したセメント系材料の初期鉱物組成を第 3 表及び第 4 表に示す。なお、その他の解析条件は補足 5 本文「3. (1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)」に記載されている条件(ケース①)と同様とした。

3 号廃棄物埋設地の解析結果(難透水性覆土の等価透水係数の時間変化及び 1,000 年後の鉱物分布と透水係数の分布図)を第 10 図に、1 号廃棄物埋設地の解析結果を第 11 図に示す。セメント系材料の仕様を OPC に変更するとモンモリロナイトの溶解量が多くなる結果となった。しかし、セメント境界面ではモンモリロナイトの溶解が促進されるものの局所的であり、難透水性覆土全体としてはほとんど変化しな

かった。

第 1 表 コンクリート (OPC) の配合

単位量 [kg/m ³]			
結合材 (C)	粗骨材 (G)	細骨材 (S)	
普通ポルトランドセメント		砕砂	陸砂
296	1,023	218	654

第 2 表 普通ポルトランドセメント (OPC) の化学組成

SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	MgO	SO ₃	Na ₂ O	K ₂ O
21.8	4.49	2.9	63.9	1.84	2.26	0.2	0.38

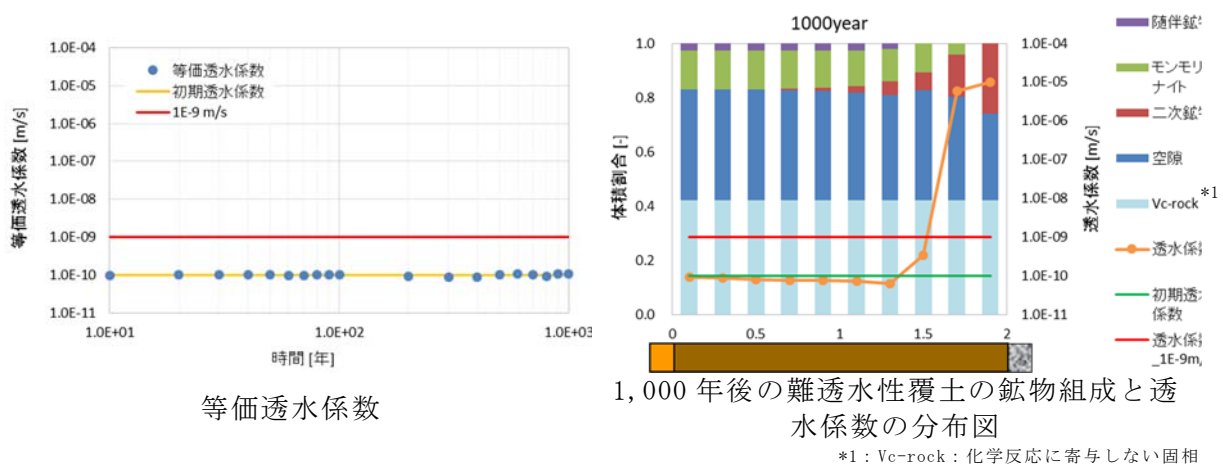
(単位は wt%)

第 3 表 セメント系材料の初期鉱物組成 (アルカリ成分の供給が多い条件)
(3 号廃棄物埋設地)

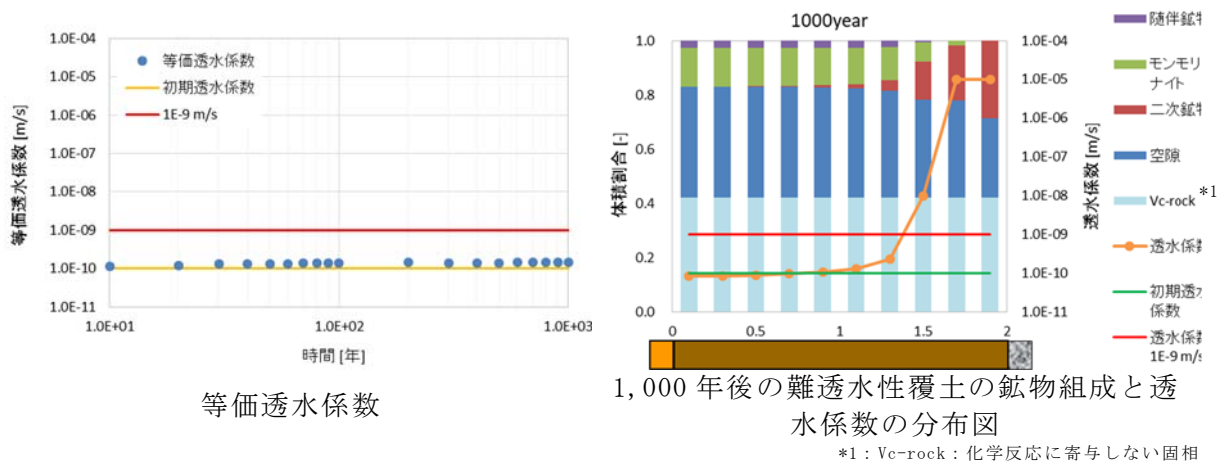
	結合材 (c)					
	C-S-H ゲル	ハイドロタルサイト	エトリンガイト	ポルトランドダイト	NaOH	KOH
mol/L _{water} *1	12.1	0.21	0.17	6.95	0.12	0.15
*1: 空隙水 1L に対する鉱物の物質量						

第 4 表 セメント系材料の初期鉱物組成 (アルカリ成分の供給が多い条件)
(1 号廃棄物埋設地)

	結合材 (c)					
	C-S-H ゲル	ハイドロタルサイト	エトリンガイト	ポルトランドダイト	NaOH	KOH
mol/L _{water} *1	6.71	0.21	0.17	8.29	0.12	0.15
*1: 空隙水 1L に対する鉱物の物質量						



第 10 図 3号廃棄物埋設地の解析結果(セメント系材料の仕様: OPC)



第 11 図 1号廃棄物埋設地の解析結果(セメント系材料の仕様: OPC)

4. まとめ

1,000年間にわたり難透水性覆土の低透水性が維持できる要因は、透水係数に影響を与える因子(当量イオン濃度、ベントナイトの交換性ナトリウム割合、空隙率、モンモリロナイトの体積割合)のうち、モンモリロナイトの体積割合の影響が大きく、セメント系材料から供給されるアルカリ成分によるモンモリロナイトの溶解が進んでも十分な量のモンモリロナイトが残存していることが必要である。

そのためモンモリロナイトの溶解量に影響を与え得る複数の項目(モンモリロナイトの溶解速度、難透水性覆土の拡散係数、ベントナイト中の随伴鉱物の反応、セメント系材料の配合)について、解析上極端な条件設定で感度解析を行ったが、難透水性覆土には十分な量のモンモリロナイトが残存した。これにより、補足5本文における地球化学解析結果より得られた「化学影響を踏まえても難透水性覆土が1,000年間にわたり低透水性を維持する」との結論が妥当であることを確認した。

【参考】要因分析に資する参考データについて

添付資料 3 の要因分析の参考とするため、モンモリロナイトのイオン型の時間変化及び二次鉱物の生成種類について参考データとして記載する。

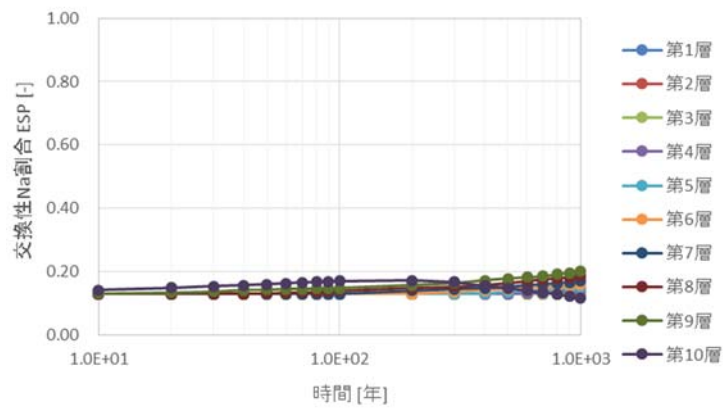
1. モンモリロナイトのイオン型が透水係数に与える影響について

難透水性覆土は Ca 型ベントナイトを配合した材料仕様となっている。そこへ、セメント系材料から供給される Na により、モンモリロナイトの一部が Ca 型から Na 型化され交換性ナトリウム割合 (*ESP*) が上昇することにより、難透水性覆土の止水性能が上昇する可能性が考えられる。上昇の程度は、添付資料 3 「第 1 図 各因子の透水係数への影響」に示したとおり小さいものと考えられるが、モンモリロナイトのイオン型の時間変化図と合わせて、難透水性覆土中のモンモリロナイトのイオン型が透水係数に与える影響について詳細を改めて再確認する。

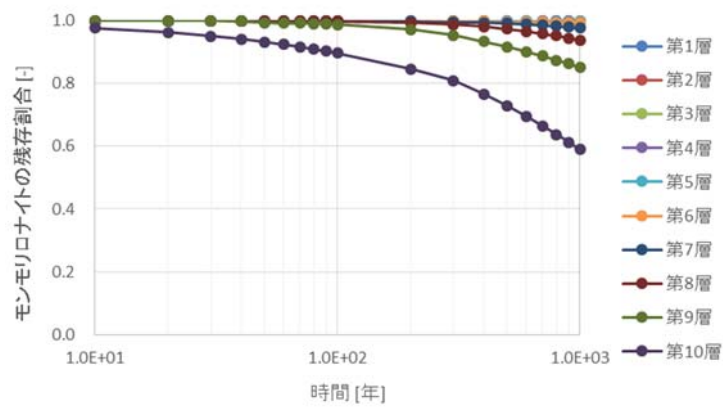
補足 5 本文「3. (1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)」に記載されている条件(ケース①)の解析結果(モンモリロナイトの交換性ナトリウム割合、モンモリロナイトの残存割合、難透水性覆土の透水係数)について、3号廃棄物埋設地は第 12 図に、1号廃棄物埋設地は第 13 図に示す。難透水性覆土について等間隔に十層に分割し、岩盤・下部覆土側の難透水性覆土から第 1 層とし、セメント系材料に接する難透水性覆土を第 10 層とした(第 14 図)。

セメント系材料に接する第 9 層及び第 10 層では、交換性ナトリウム割合がごくわずかに上昇しており、特に 1号廃棄物埋設地では、固化体に含まれる Na 塩の影響によりモンモリロナイトの Na 型割合がわずかに多い結果であった。それでも、難透水性覆土の止水性を大きく向上させるほどの Na 型化は見られなかった。また、Na 型化が見られた第 9 層～第 10 層では、モンモリロナイトが溶解し体積割合が大きく減少しており、そのため透水係数は初期値よりもわずかに上昇している結果であった。

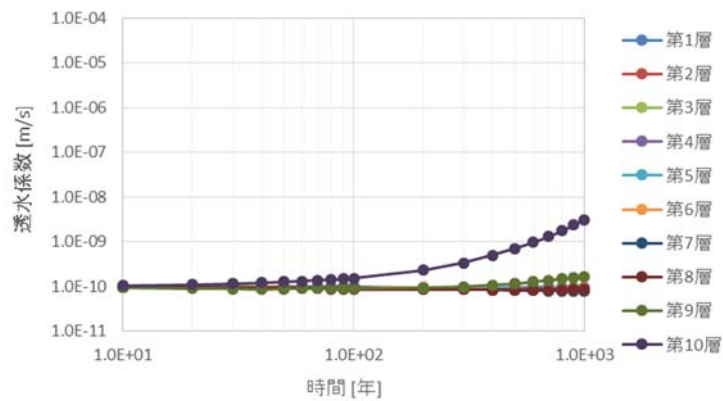
したがって、モンモリロナイトのイオン型が透水係数に与える影響について、セメント系材料から Na の供給による難透水性覆土中のモンモリロナイトの Na 型化はごくわずかであり、Na 型化による止水性能の上昇よりも、モンモリロナイトの溶解に伴う止水性能の低下の影響の方が大きいことが確認された。



モンモリロナイトの交換性ナトリウム割合

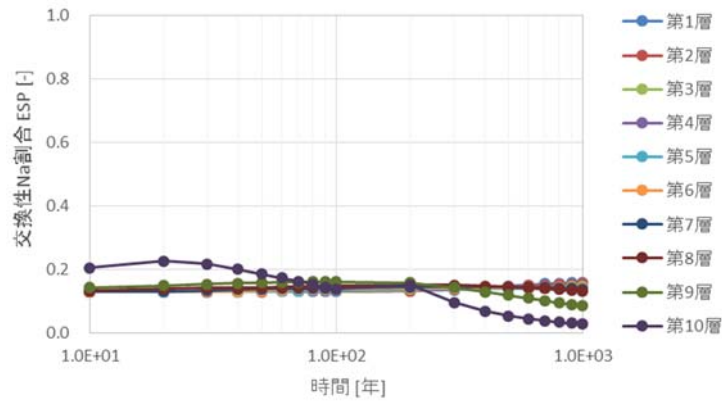


モンモリロナイトの残存割合

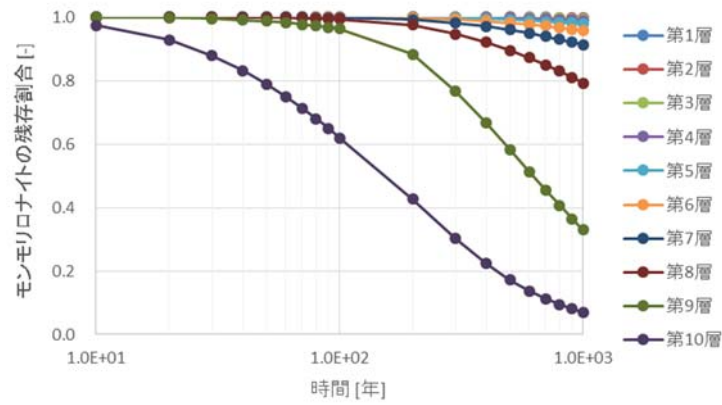


難透水性覆土の透水係数

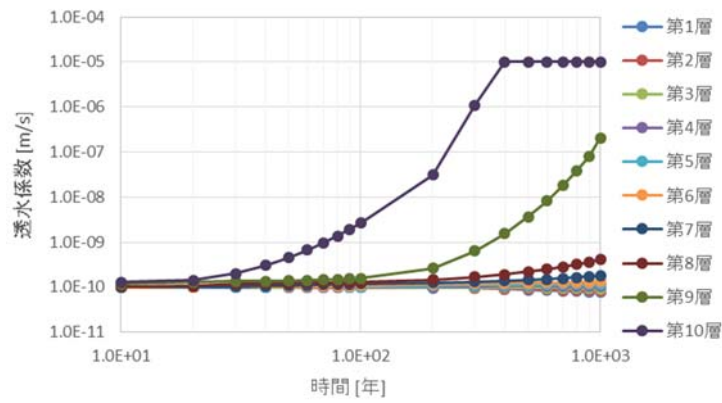
第 12 図 3 号廃棄物埋設地の解析結果
(交換性ナトリウム割合、モンモリロナイトの残存割合、透水係数)



モンモリロナイトの交換性ナトリウム割合



モンモリロナイトの残存割合



難透水性覆土の透水係数

第 13 図 1 号廃棄物埋設地の解析結果
(交換性ナトリウム割合、モンモリロナイトの残存割合、透水係数)



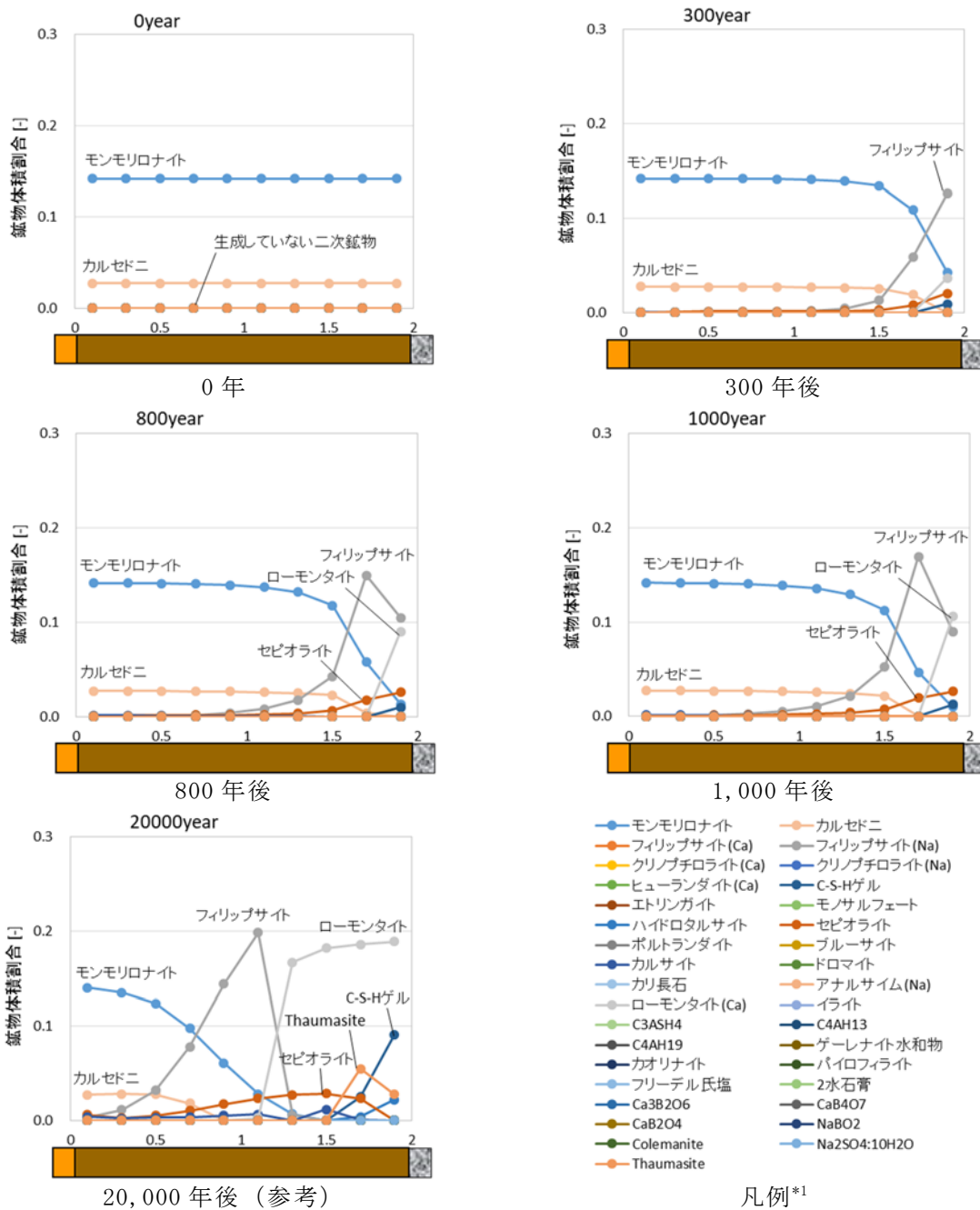
第 14 図 難透水性覆土の層の定義

2. 難透水性覆土中に生成した二次鉱物の種類について

セメント系材料から供給されたアルカリ成分 (Na、K、Ca) によりモンモリロナイトの溶解が生じると、モンモリロナイトを構成する主要元素である Al、Mg、Si の液相濃度が上昇するため、過飽和となり二次鉱物が生成する可能性がある。本解析においても、補足 5 本文「難透水性覆土の鉱物組成と透水係数の分布図」(第 7 図及び第 10 図) に示すとおり、難透水性覆土中のモンモリロナイトが溶解すると同時に、二次鉱物が生成することが確認された。

そこで、難透水性覆土中に生成した二次鉱物の種類(鉱物体積割合)について、モンモリロナイトを構成する代表的な成分 (Al、Mg、Si) 及びセメント系材料から供給されたアルカリ成分 (Na、K、Ca) に着目しながら確認することで、覆土が長期間にわたり低透水性を維持することができる要因分析の参考とした。

補足 5 本文「3. (1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)」に記載されている条件(ケース①)の解析結果(難透水性覆土中の鉱物体積割合)について、3号廃棄物埋設地は第 15 図に、1号廃棄物埋設地は第 16 図に示す。二次鉱物として、カリ長石、ゼオライト(ヒューランダイト、フィリップサイト、ローモンタイト)が支配的であり、その他セピオライトや C-S-H ゲルも生成していることを確認した。セメント系材料から供給されるアルカリ成分について、Na はフィリップサイト ($\text{NaAlSi}_3\text{O}_8 \cdot 3\text{H}_2\text{O}$)、K はカリ長石 (KAlSi_3O_8)、Ca は主に C-S-H ゲル、ローモンタイト ($\text{CaAl}_2\text{Si}_4\text{O}_{12} \cdot 4\text{H}_2\text{O}$) 及びヒューランダイト ($\text{Na}_{0.167}\text{K}_{0.066}\text{Ca}_{0.55}\text{Al}_{1.333}\text{Si}_{4.667}\text{H}_{8.67}\text{O}_{16.335}$) により消費されているものと考えられる。一方、モンモリロナイトの溶解で生じた Al、Mg 及び Si について、Al は主にカリ長石とゼオライトに、Mg は主にセピオライト ($\text{Mg}_4\text{Si}_6\text{O}_{15}(\text{OH})_2(\text{OH}_2)_2 \cdot 4\text{H}_2\text{O}$) に、Si は生成した二次鉱物全般により消費されているものと考えられる。



*1：鉱物名に記した()内は、ゼオライトのアルカリ、アルカリ土類元素の組成を表す。

第 16 図 1 号廃棄物埋設地の解析結果(難透水性覆土中の鉱物体積割合)

以上

ペクレ数分布

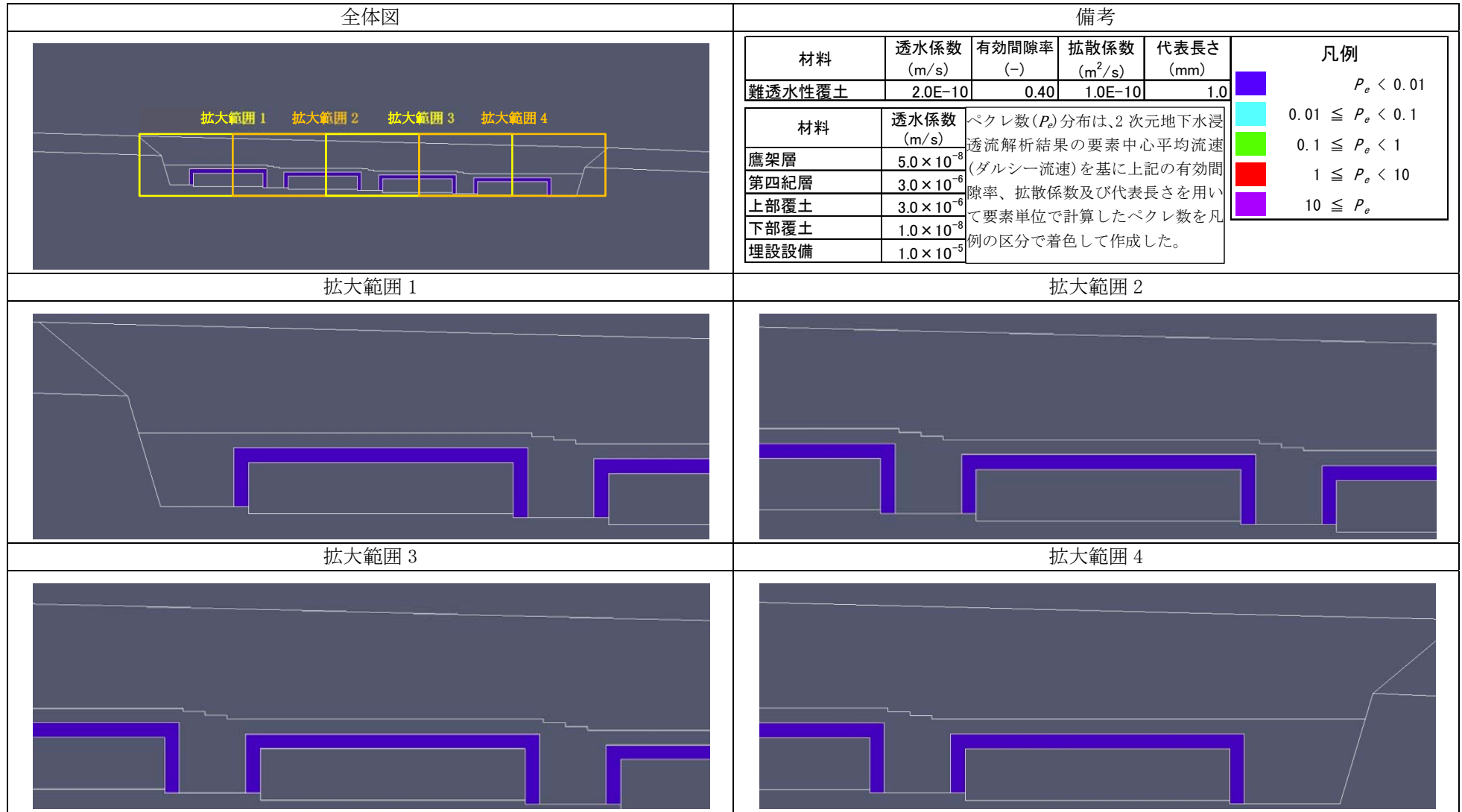


図 難透水性覆土内のペクレ数(P_e)分布(1/6)【3号廃棄物埋設地】(確からしい設定 1,000年後)

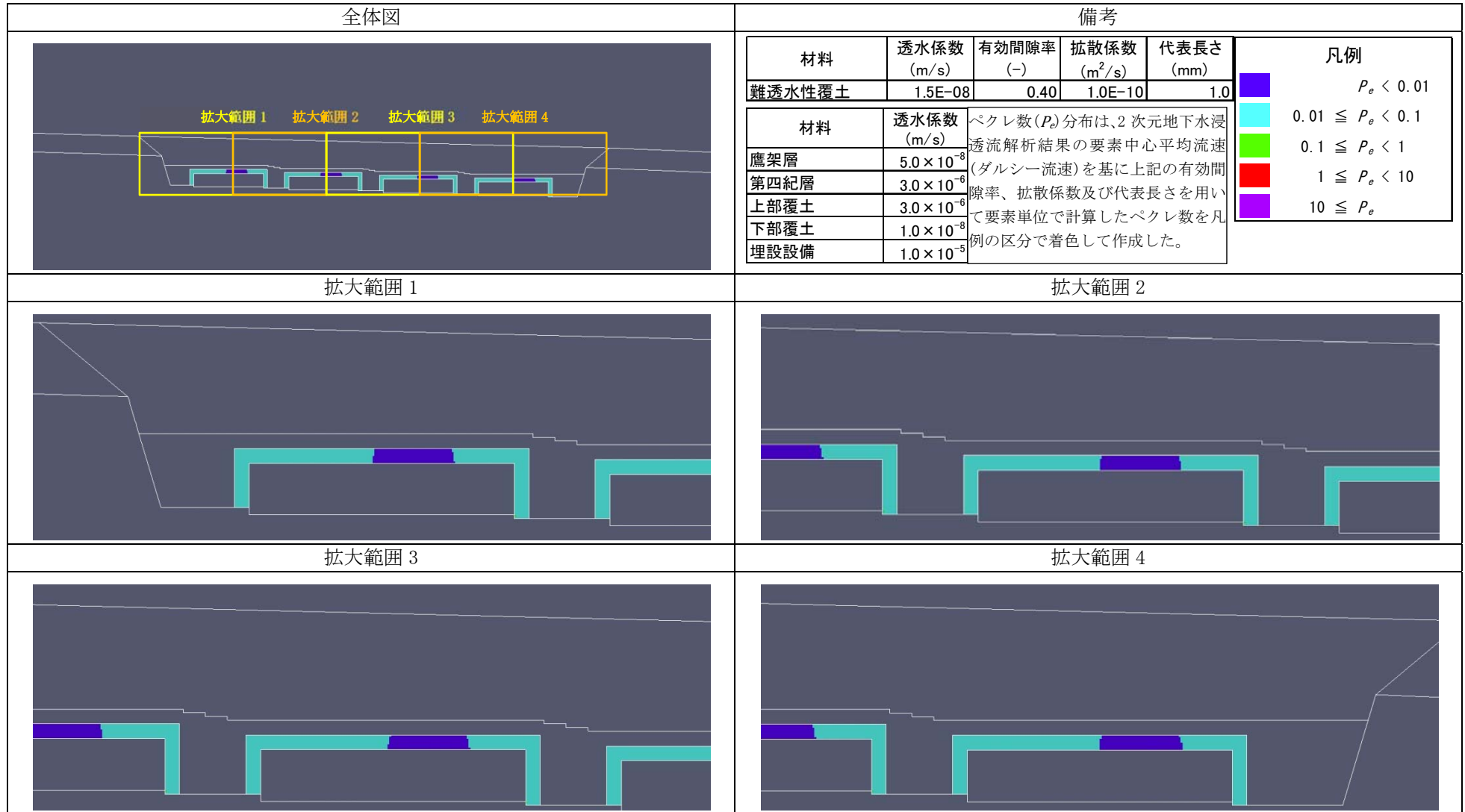


図 難透水性覆土内のペクレ数(P_e)分布(2/6)【3号廃棄物埋設地】(厳しい設定 1,000年後)

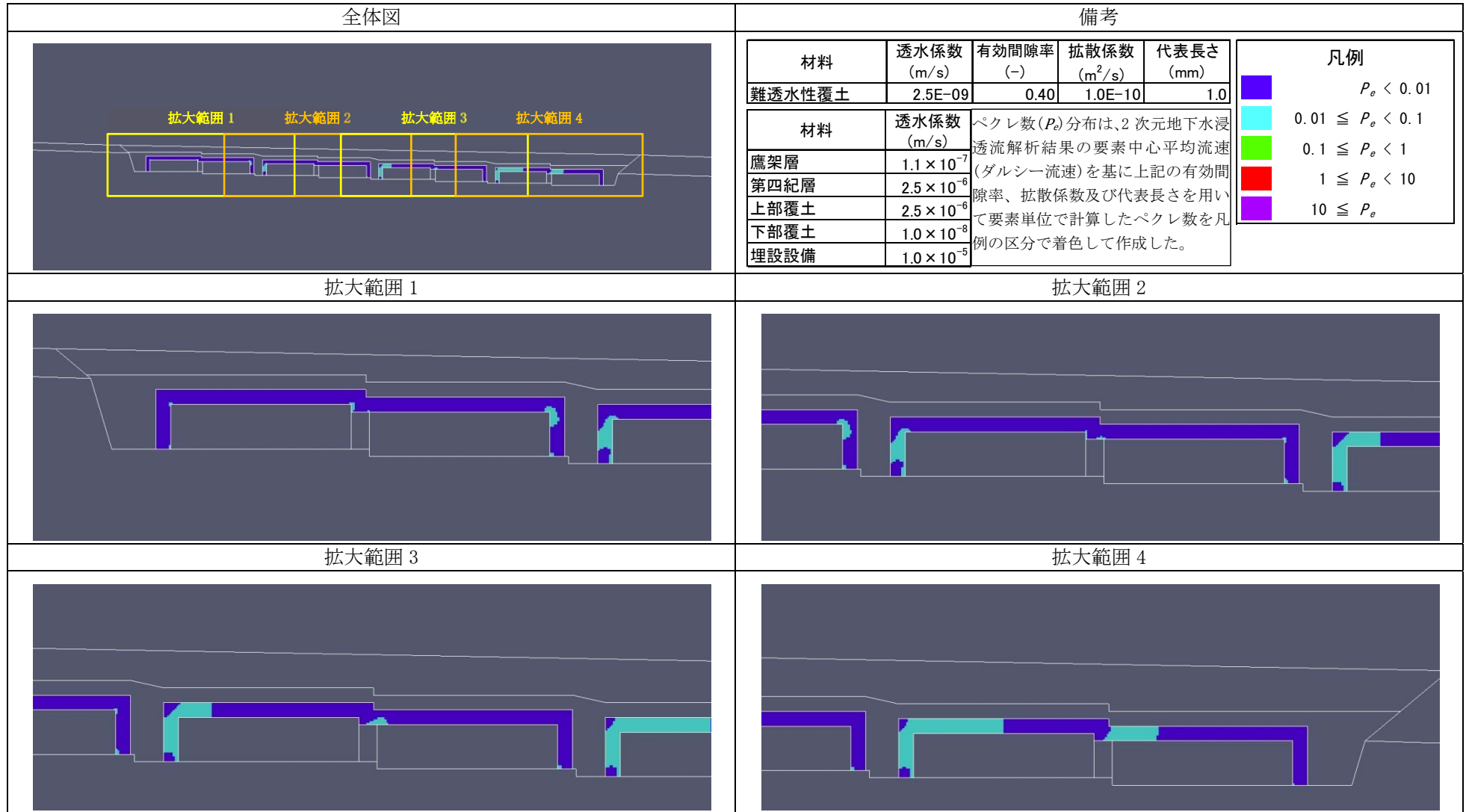


図 難透水性覆土内のベクレ数(P_e)分布(3/6) 【1号廃棄物埋設地】(確からしい設定 1,000年後)

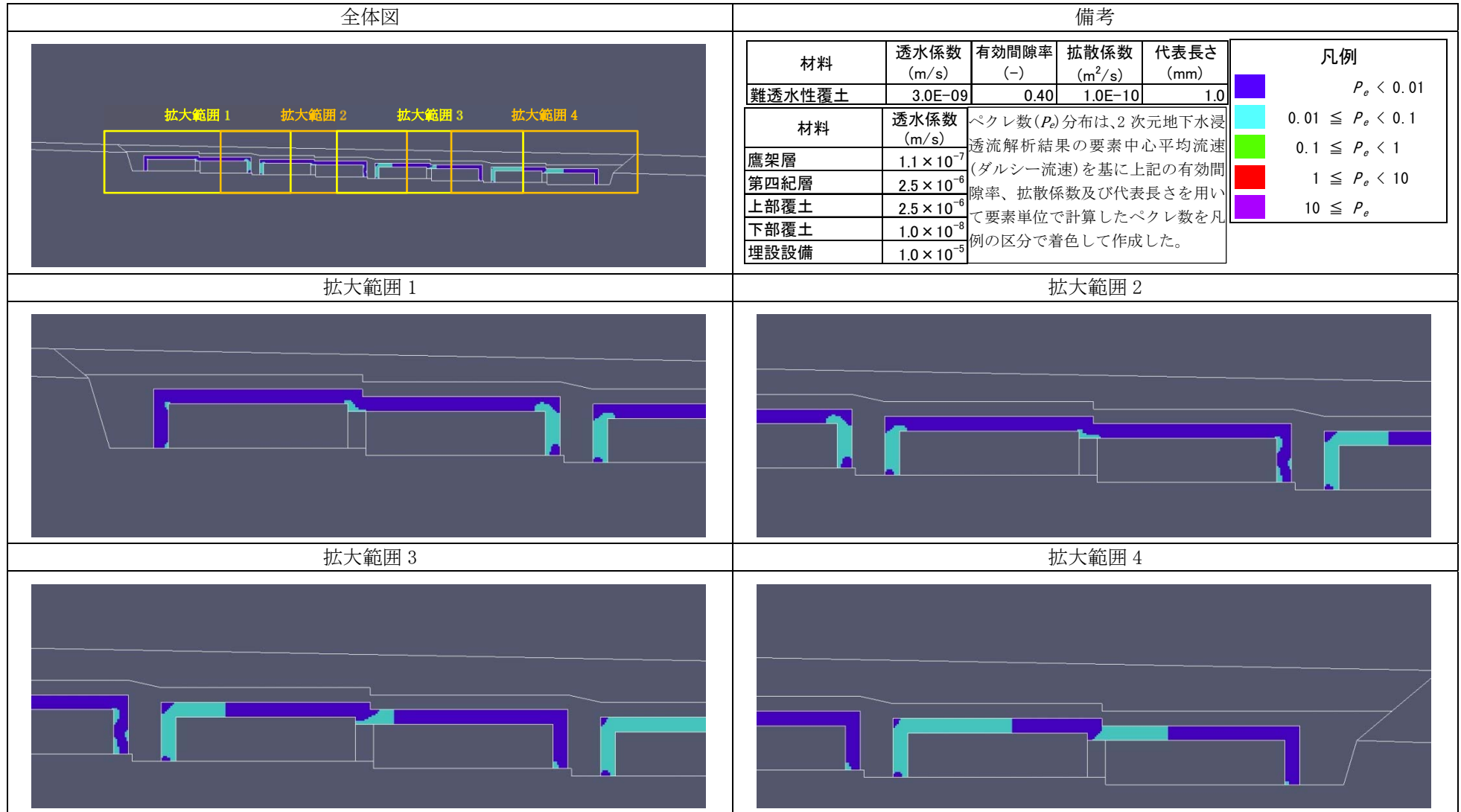


図 難透水性覆土内のペクレ数(P_e)分布(4/6)【1号廃棄物埋設地】(厳しい設定 1,000年後)

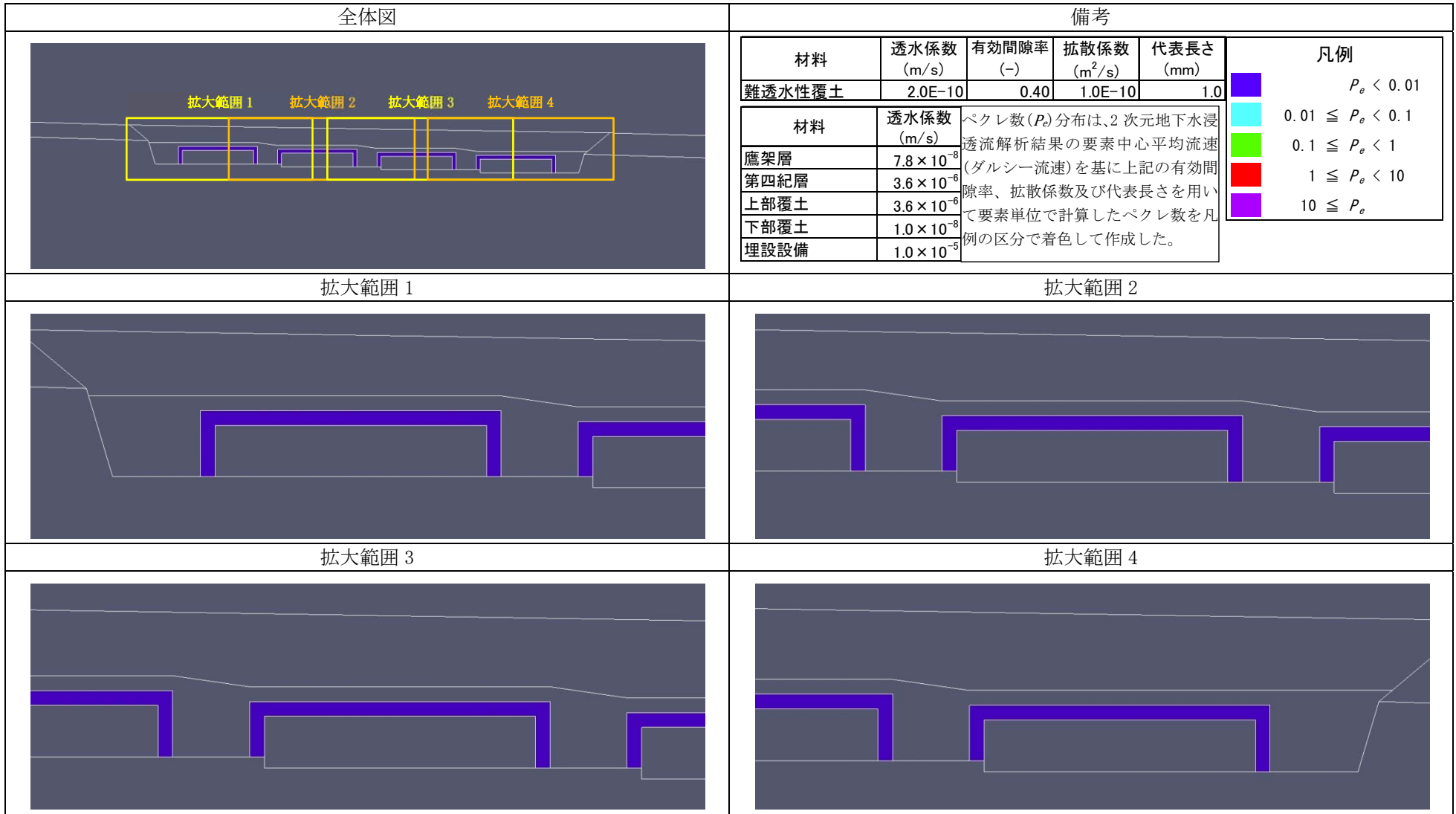


図 難透水性覆土内のペクレ数 (P_e) 分布 (5/6) 【2号廃棄物埋設地】(確からしい設定 1,000年後)

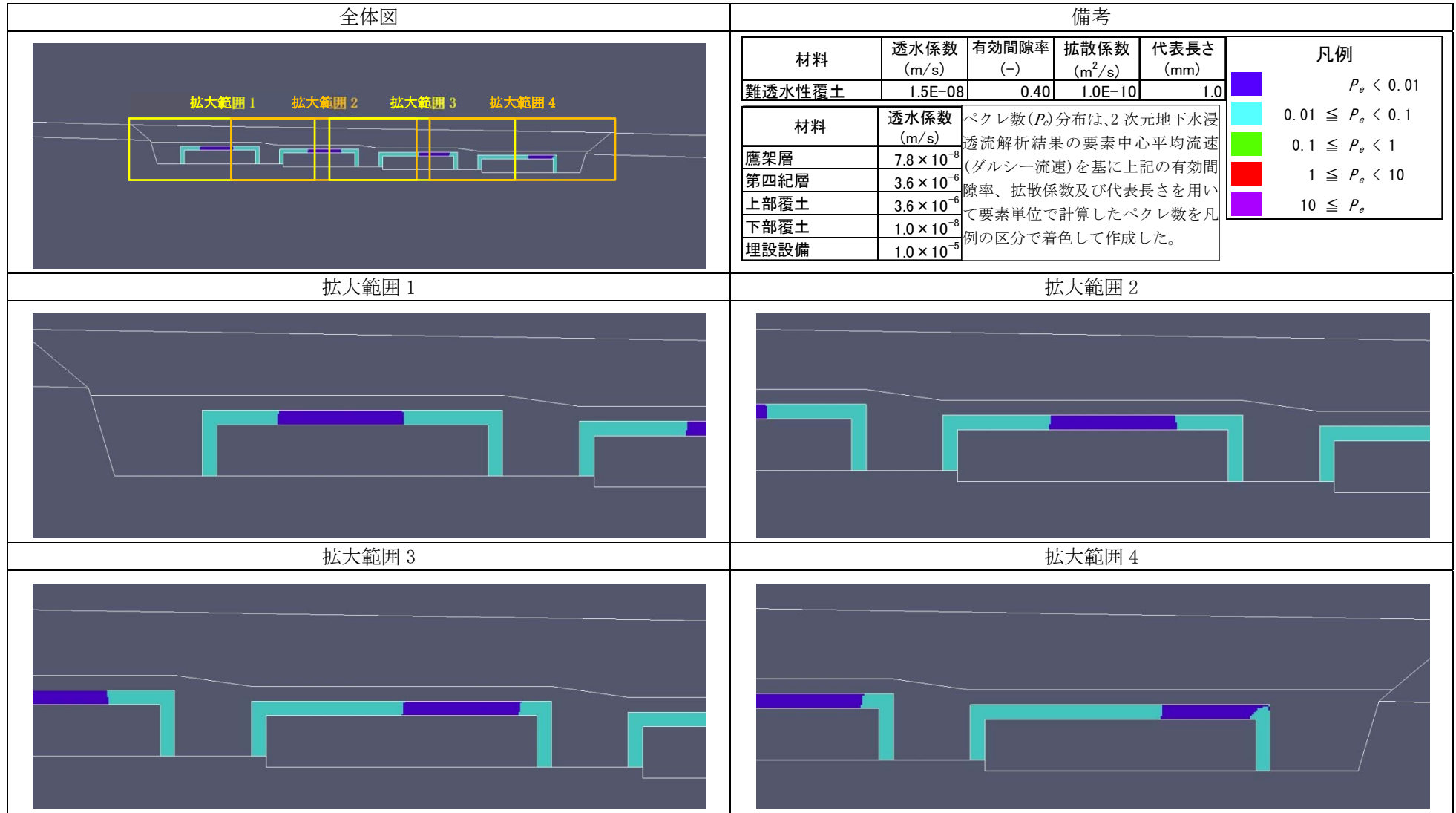


図 難透水性覆土内のペクレ数(P_e)分布(6/6)【2号廃棄物埋設地】(厳しい設定 1,000年後)

難透水性覆土の材料仕様を Na 型ベントナイトとした場合

1. はじめに

本資料は、補足説明資料 5(以下「補足 5」という。)のうち、難透水性覆土の材料仕様を変更した場合について追加説明するものである。

難透水性覆土の材料仕様について、補足 5 では Ca 型ベントナイト(クニボンド)を 3 割配合した材料仕様(以下、「Ca 型難透水性覆土」とする)とした。しかし、難透水性覆土として Na 型ベントナイトを用いることも考えられる。Na 型ベントナイトは、Ca 型ベントナイトと比べ、優れた膨潤性により高い止水性が期待される。一方、セメント系材料から供給される Ca により、ベントナイトの主成分のモンモリロナイトの交換性陽イオンが Na から Ca に置き換わった場合、モンモリロナイトの膨潤特性を低下させ、難透水性覆土の止水性に悪影響を及ぼす可能性がある。そこで、難透水性覆土の材料仕様を Na 型ベントナイトに変更した場合における、難透水性覆土中の等価透水係数の変遷を評価した。

2. 解析条件

(1) 難透水性覆土の鉱物組成

ここでは、Na 型ベントナイト(クニゲル V1)を 2 割配合した材料仕様(以下、「難透水性覆土(Na 型)」とする)とした。難透水性覆土の乾燥密度は 1.95Mg/m^3 と設定した。難透水性覆土の初期鉱物組成を第 1 表に示す。

第 1 表 難透水性覆土の初期鉱物組成

	Na 型ベントナイト(クニゲル V1)					
	モンモリロナイト				随伴鉱物	
	Na-Mont	Ca-Mont	K-Mont	Mg-Mont	カルセドニ	カルサイト
mol/L _{water} *1	1.25	0.31	0.02	0.02	8.22	0.31
*1: 空隙水 1L に対する鉱物の物質質量						

なお、その他の条件は補足 5 と同様とした。

3. 解析結果

(1) 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合(ケース①)

難透水性覆土中の拡散係数モデルを空隙率とモンモリロナイトの含有割合を関数とする経験式とした現実的なモデル(補足 5 数式 3)で、難透水性覆土の等価透水係数の時間変化を解析的に評価した。3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果を第 1 図に、1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果を第 2 図に示す。また、3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図を第 3 図に、難透水性覆土内の液相組成分布図を第 4 図に、参考として覆土にアルカリ成分を供給する埋設設備内の pH、Ca 濃度分布図を第 5 図に示す。1 号廃棄物埋設地においても同様に、難透水性覆土における鉱物組成と透水係数の分布図を第 6 図に、難透水性覆土内の液相組成分布図を第 7 図に、参

考として覆土にアルカリ成分を供給する埋設設備内の pH、Ca 濃度分布図を第 8 図に示す。

難透水性覆土の材料仕様を、Ca 型ベントナイト(クニボンド)を 3 割配合した材料仕様から Na 型ベントナイト(クニゲル V1)を 2 割配合した材料仕様に変更した場合、Na 型ベントナイトの主成分である Na 型モンモリロナイトの膨潤性により、初期の透水係数値は難透水性覆土(Ca 型)よりも低い値であった。

3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na 型)の等価透水係数は、難透水性覆土(Ca 型)と同様、1,000 年後においても初期の透水係数値を維持していた。

一方、1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na 型)の等価透水係数は、1,000 年後の段階で初期の透水係数値よりもわずかに高い値となった。難透水性覆土(Na 型)は、ベントナイトの配合率の減少及びベントナイト中のモンモリロナイトの割合の減少により、難透水性覆土中のモンモリロナイトの体積割合が大きく減少している。そのため、モンモリロナイトが溶解すると透水係数は大きく上昇する結果となった。それでも、高い止水性は維持されていることが確認された。

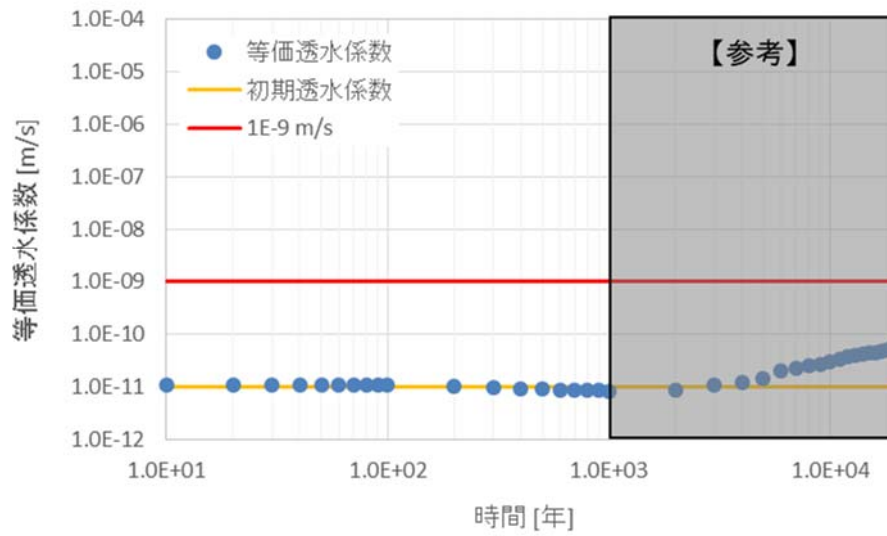
(2) 難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合(ケース②)

難透水性覆土中の拡散係数モデルを、モンモリロナイトの割合を 0 とし、単純に空隙率に比例するとしたモデル(補足 5 数式 4)で、難透水性覆土の等価透水係数の時間変化を解析的に評価した。

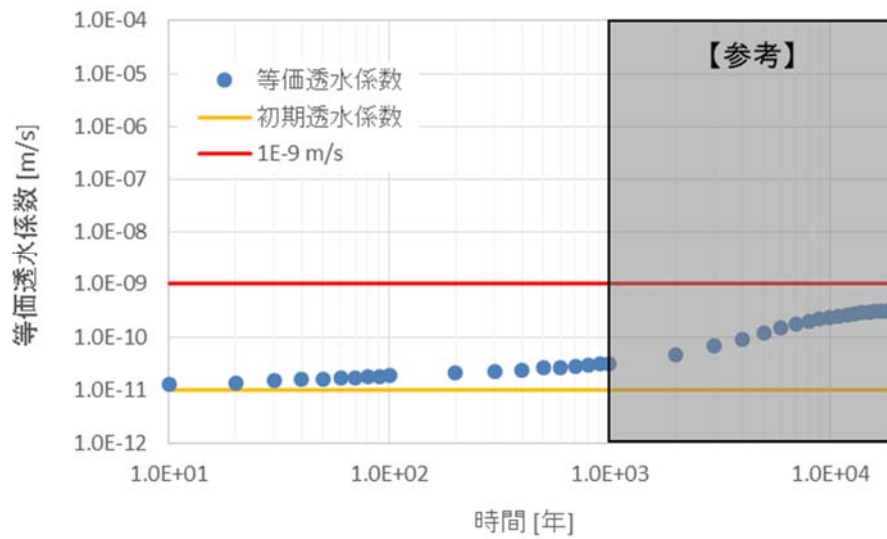
3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果を第 9 図に、1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土における等価透水係数の時間変化の結果を第 10 図に示す。また、3 号廃棄物埋設地の鉱物組成と透水係数の分布図を第 11 図に、難透水性覆土内の液相組成分布図を第 12 図に、参考として覆土にアルカリ成分を供給する埋設設備内の pH、Ca 濃度分布図を第 13 図に示す。1 号廃棄物埋設地においても同様に、鉱物組成と透水係数の分布図を第 14 図に、難透水性覆土内の液相組成分布図を第 15 図に、参考として覆土にアルカリ成分を供給する埋設設備内の pH、Ca 濃度分布図を第 16 図に示す。

3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na 型)の等価透水係数は、(a)と同様、1,000 年後においても初期値を維持していた。

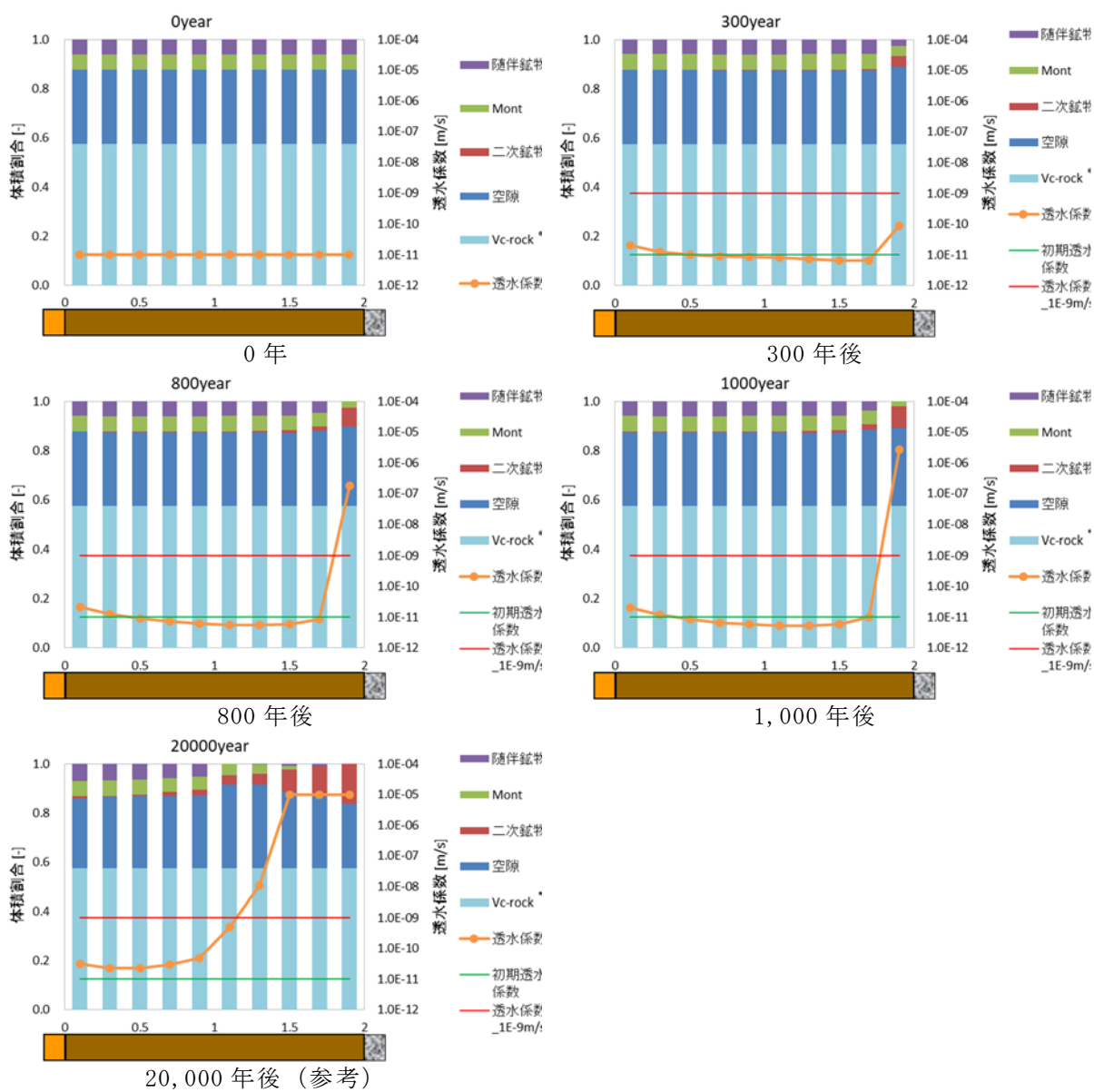
1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na 型)の等価透水係数は、(a)と同様、1,000 年後の段階で初期の透水係数値よりも上昇した。それでも、低透水性が維持できる結果となった。



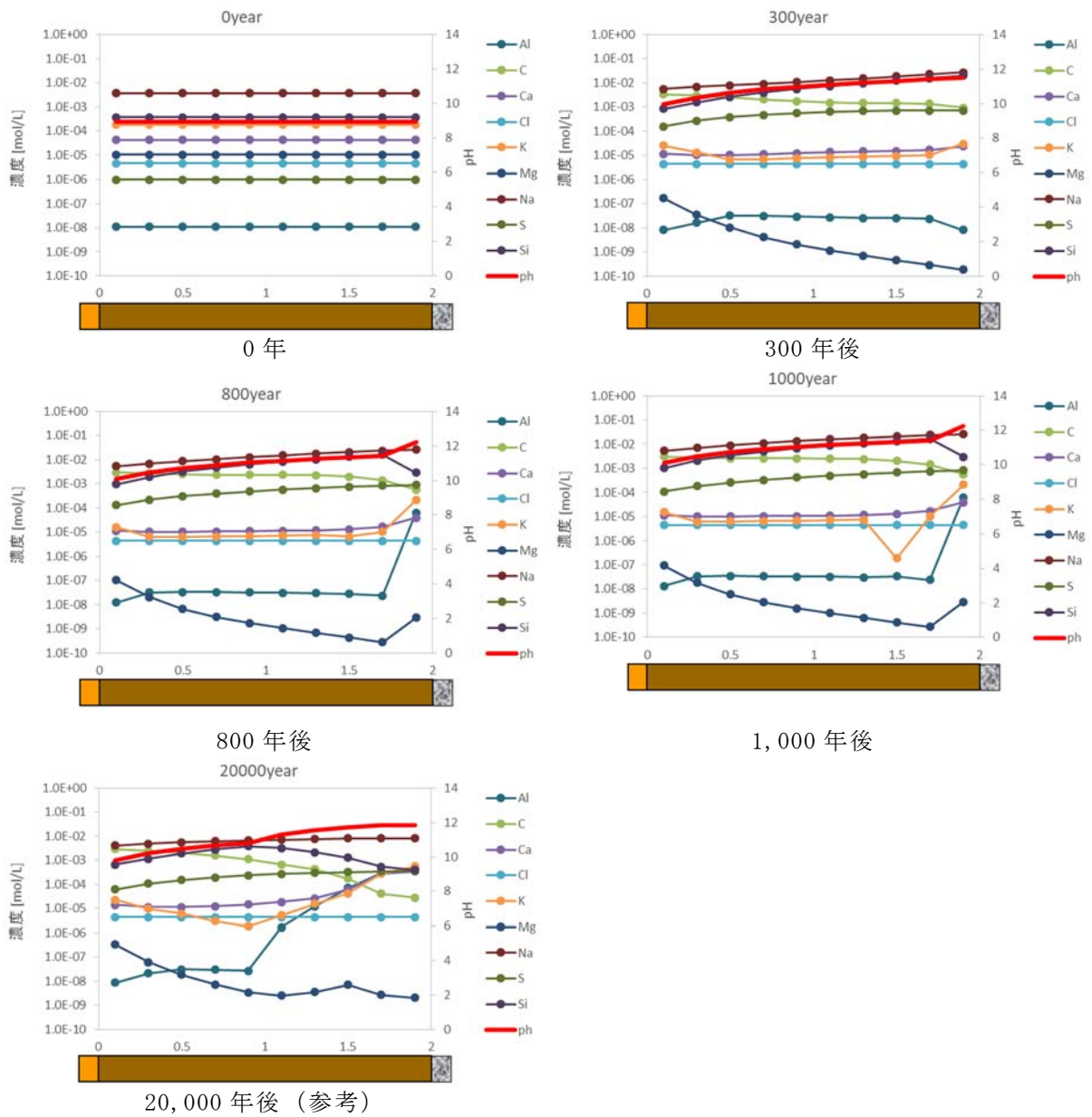
第 1 図 3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土 (Na 型) における等価透水係数の時間変化の結果
 (ケース①：難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



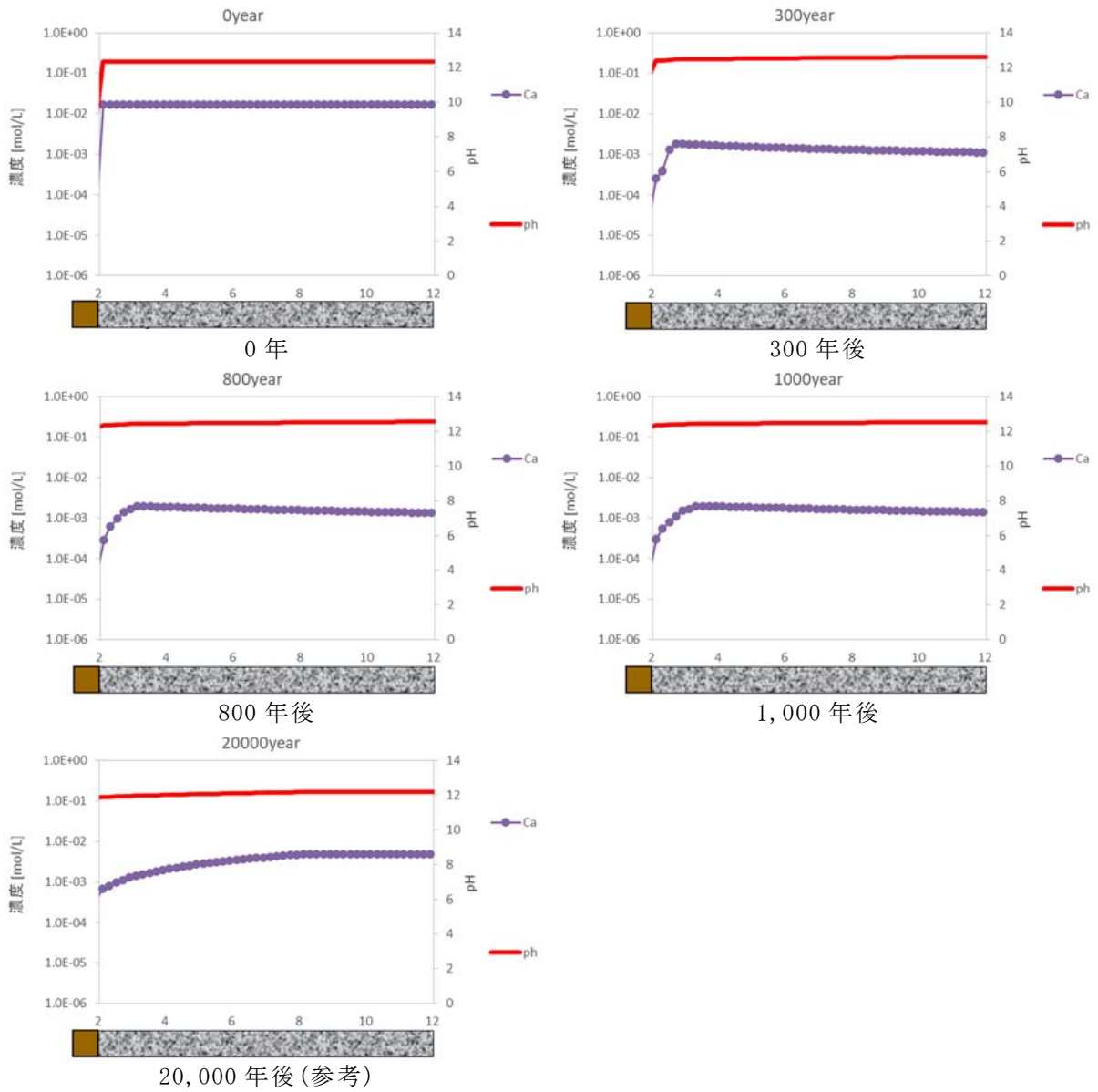
第 2 図 1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土 (Na 型) における等価透水係数の時間変化の結果
 (ケース①：難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



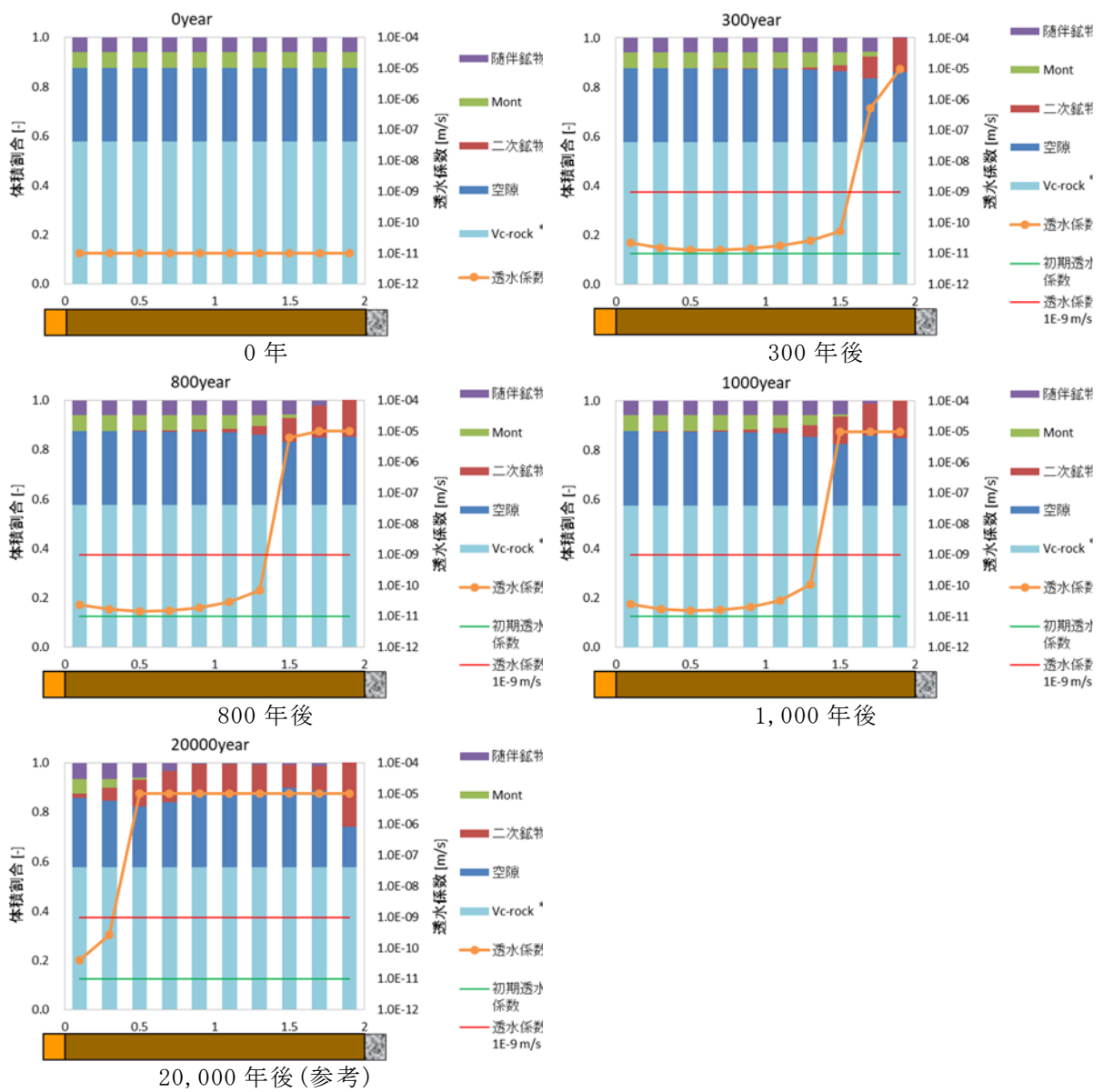
第3図 3号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na型)における鉱物組成と透水係数の分布図
(ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



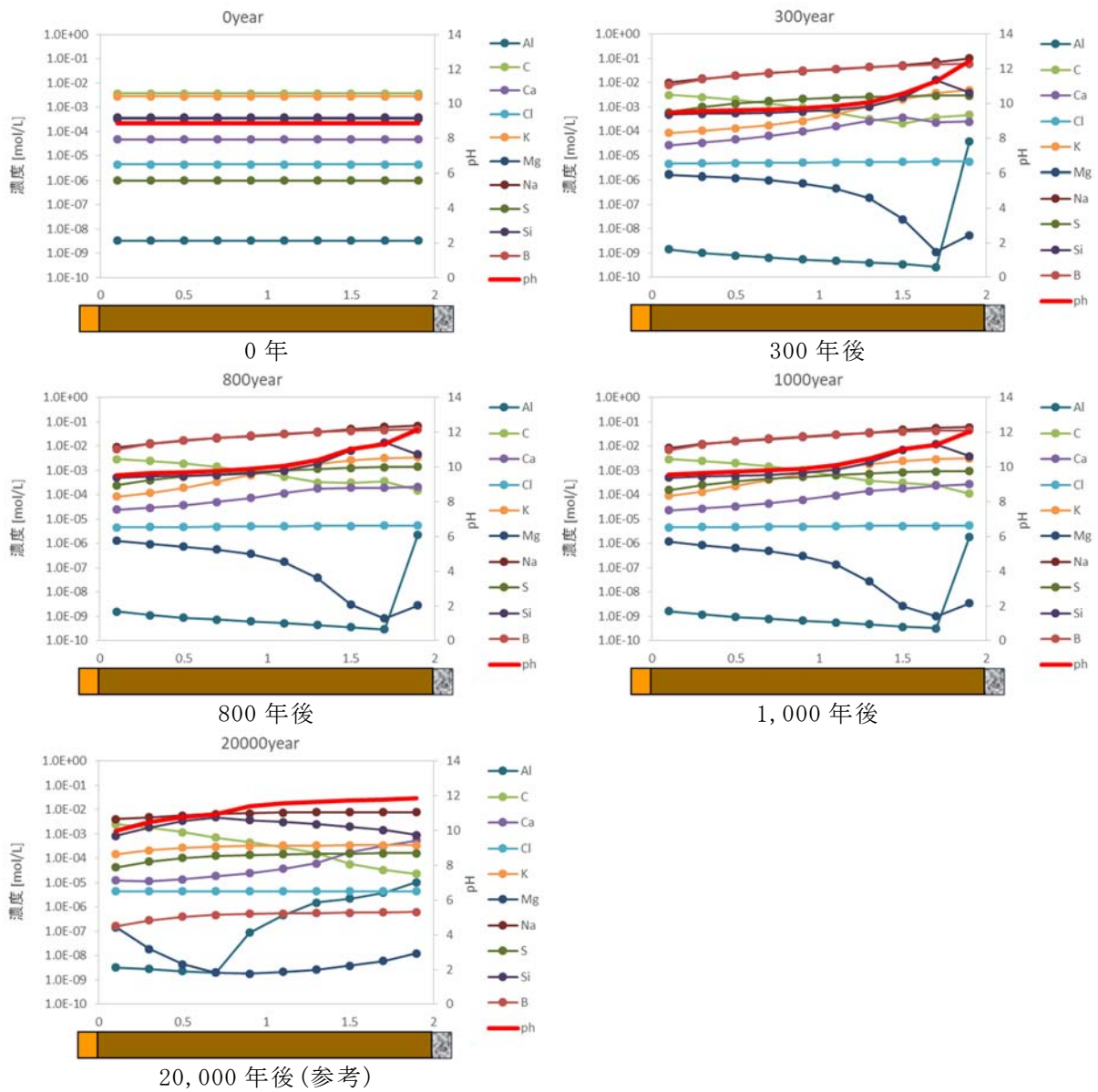
第4図 3号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na型)内の液相組成の分布図
 (ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



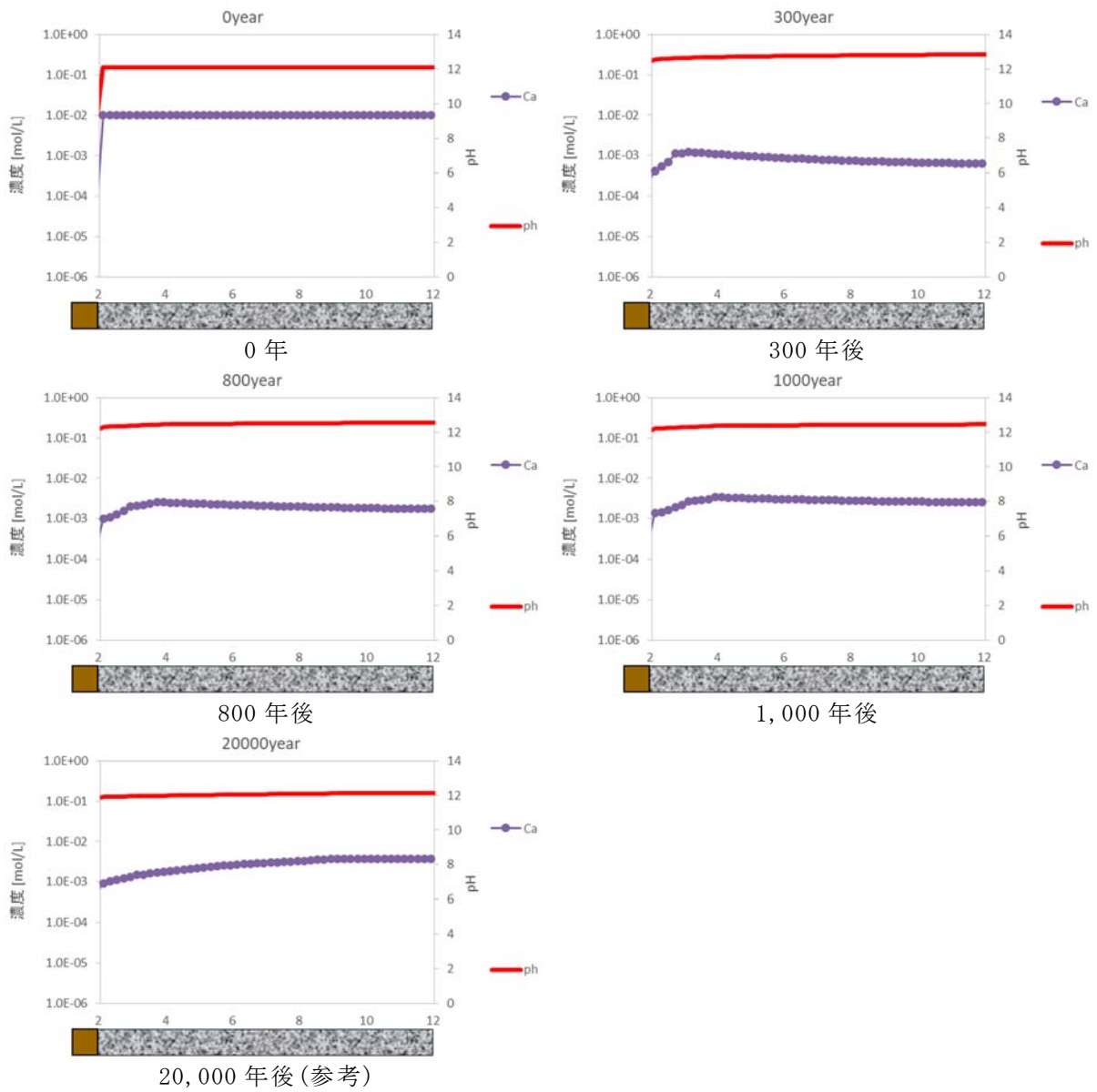
第5図 3号廃棄物埋設地の埋設設備内の液相組成(pH、Ca濃度)の分布図
 (ケース①：難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



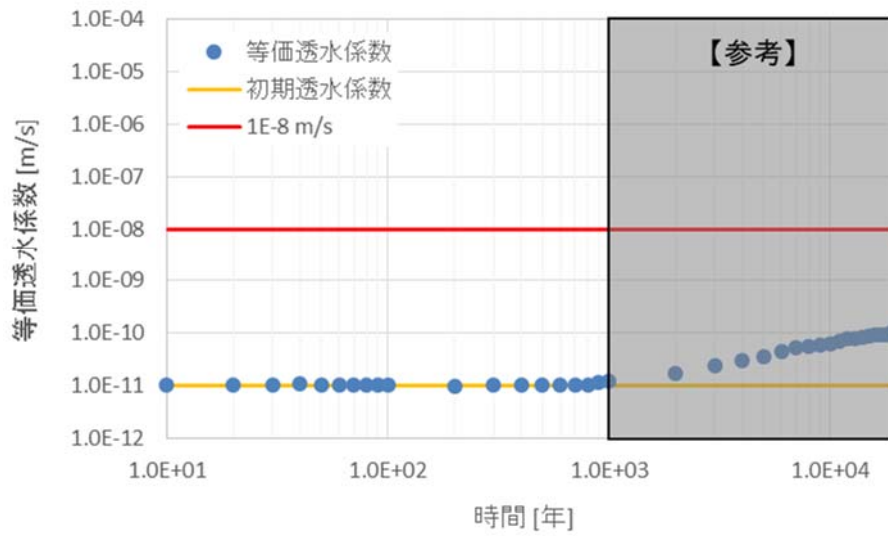
第6図 1号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na型)における鉱物組成と透水係数の分布図
(ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



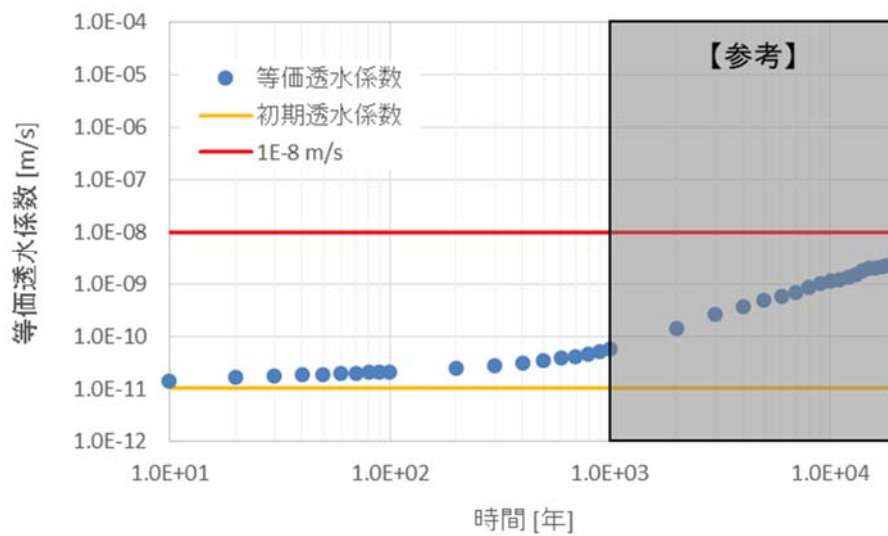
第7図 1号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na型)内の液相組成の分布図
(ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



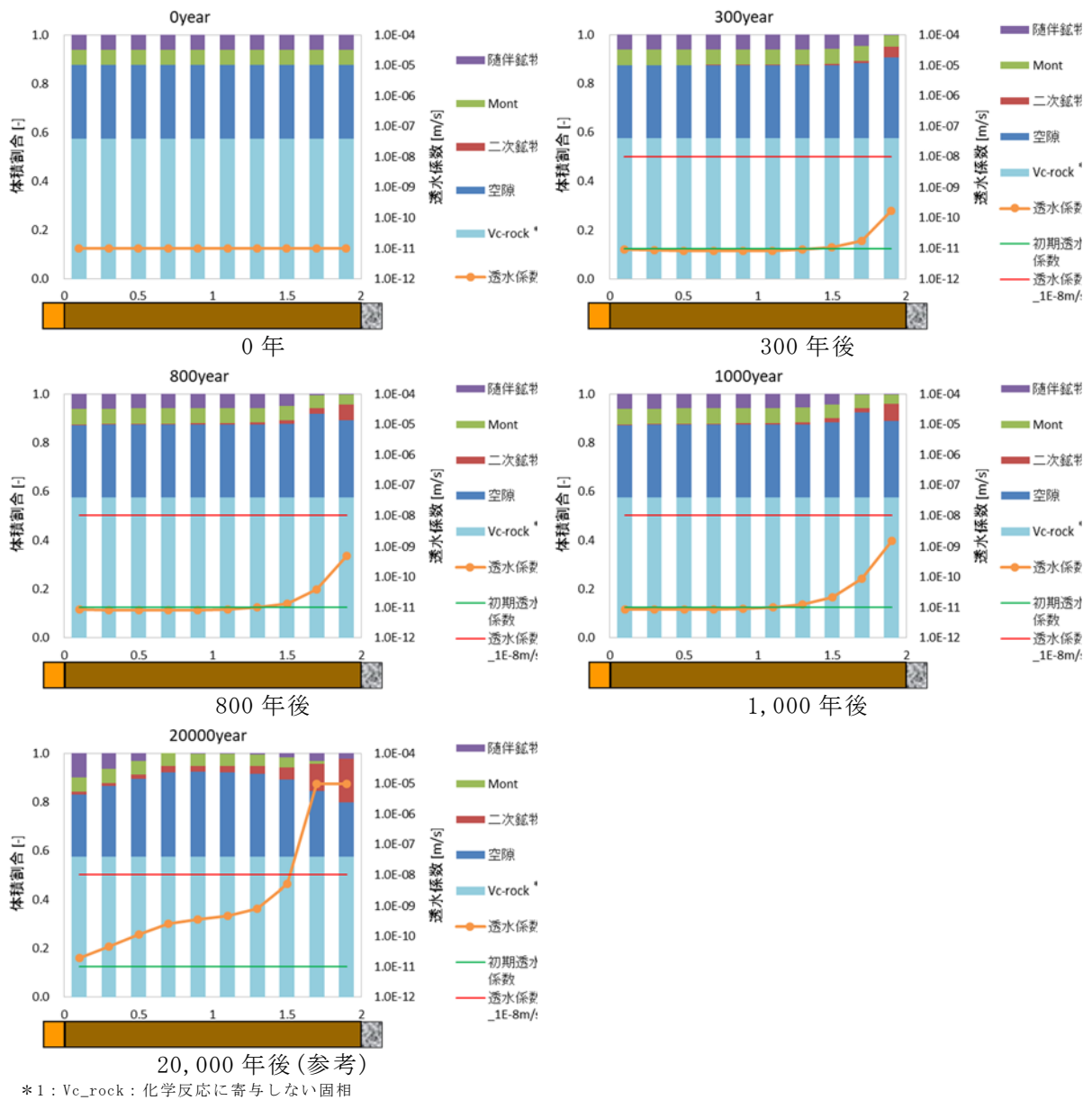
第 8 図 1 号廃棄物埋設地の埋設設備内の液相組成 (pH、Ca 濃度) の分布図
 (ケース①: 難透水性覆土中の拡散挙動を現実的なモデルとした場合)



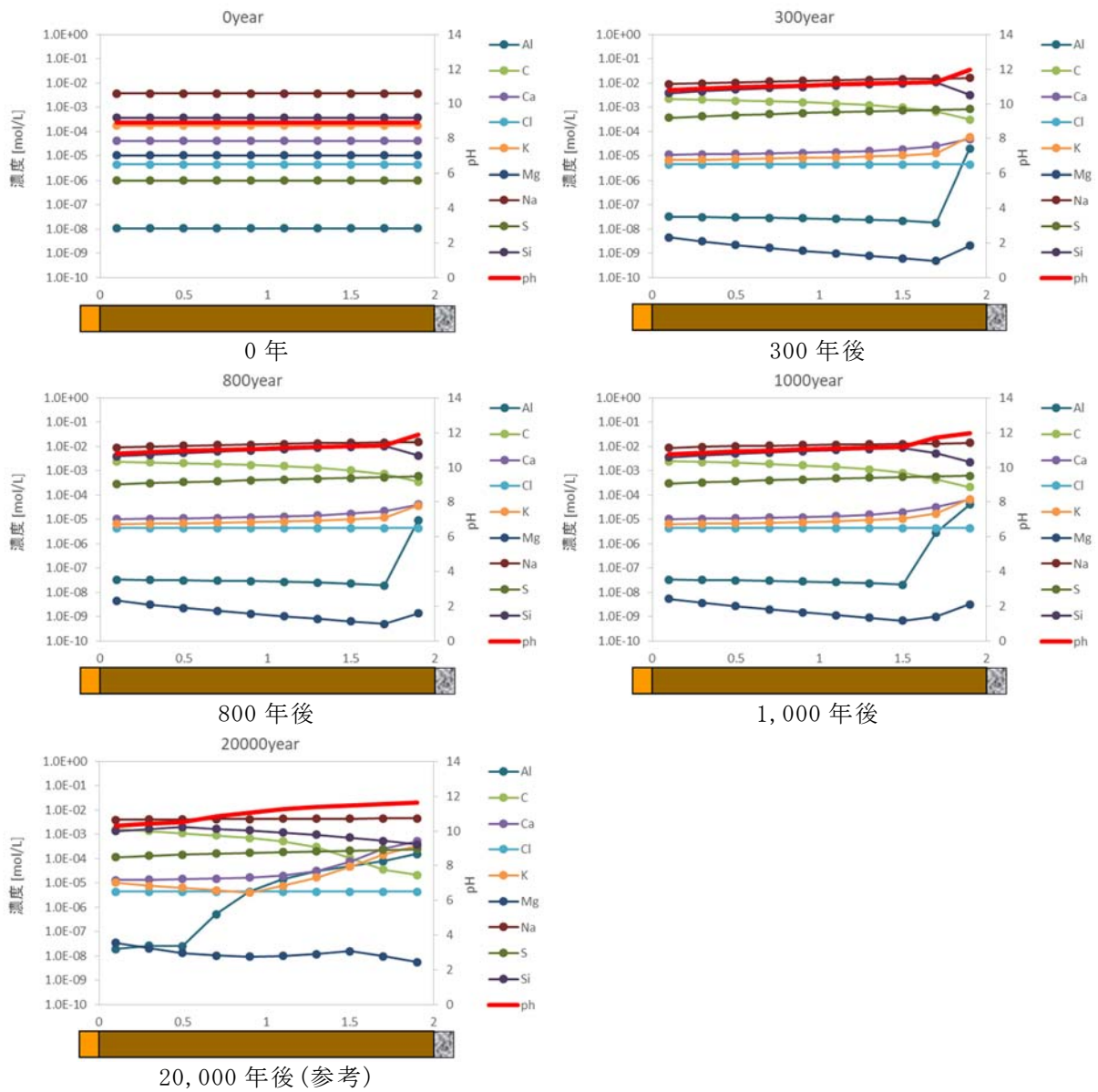
第 9 図 3号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na型)における等価透水係数の時間変化の結果
(ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



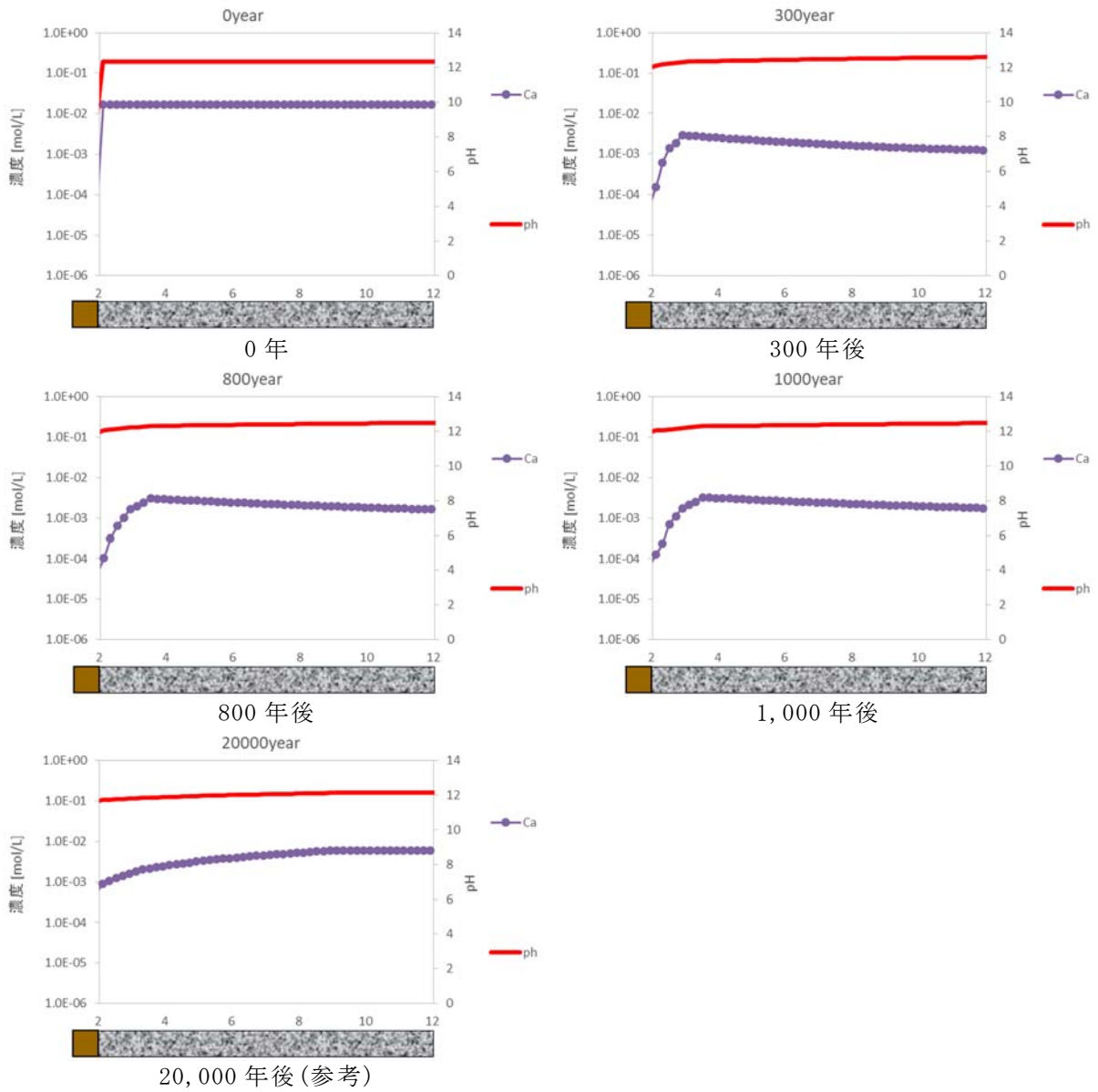
第 10 図 1号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na型)における等価透水係数の時間変化の結果
(ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



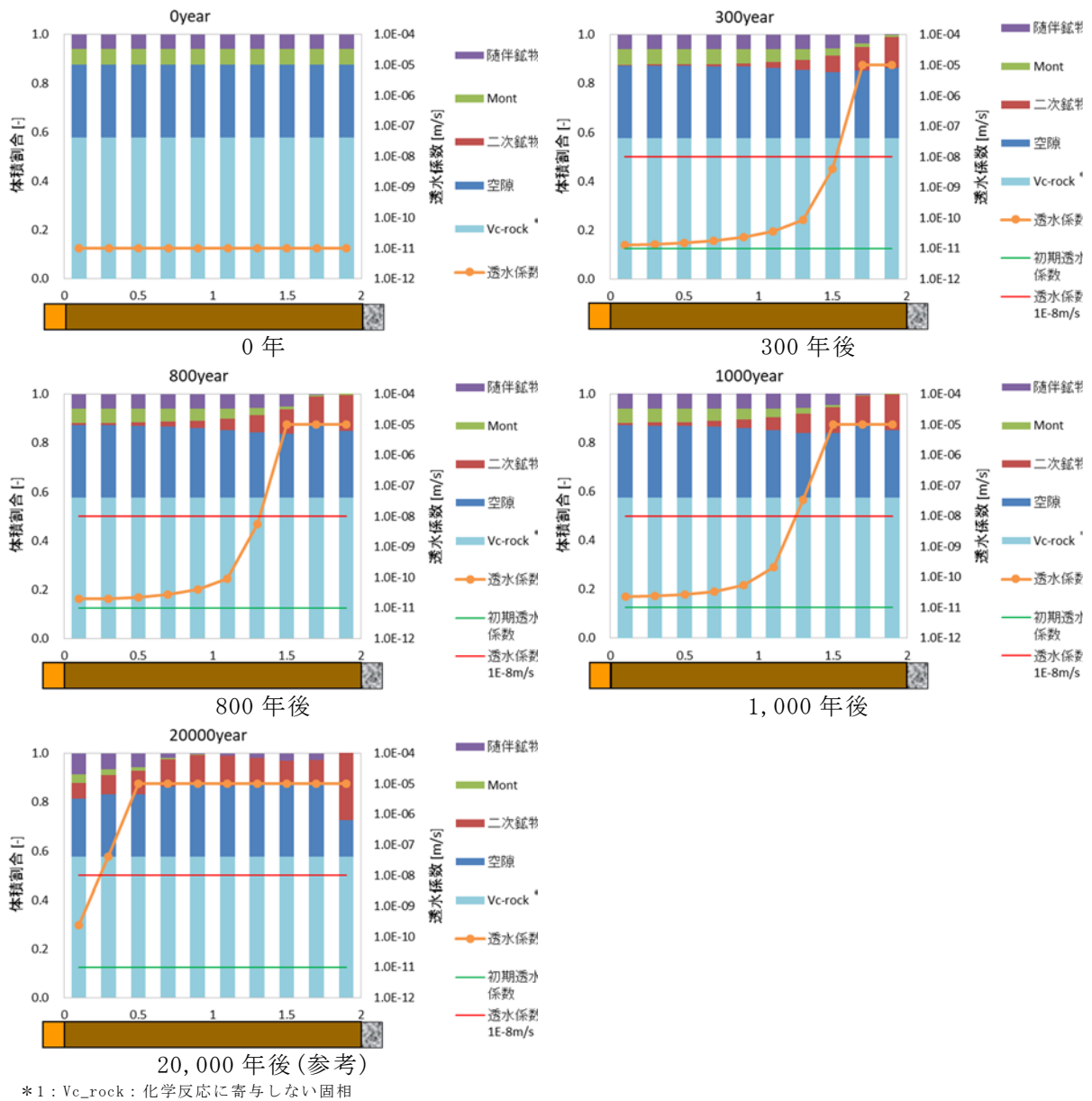
第 11 図 3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na 型)における鉱物組成と透水係数の分布図
(ケース②: 難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



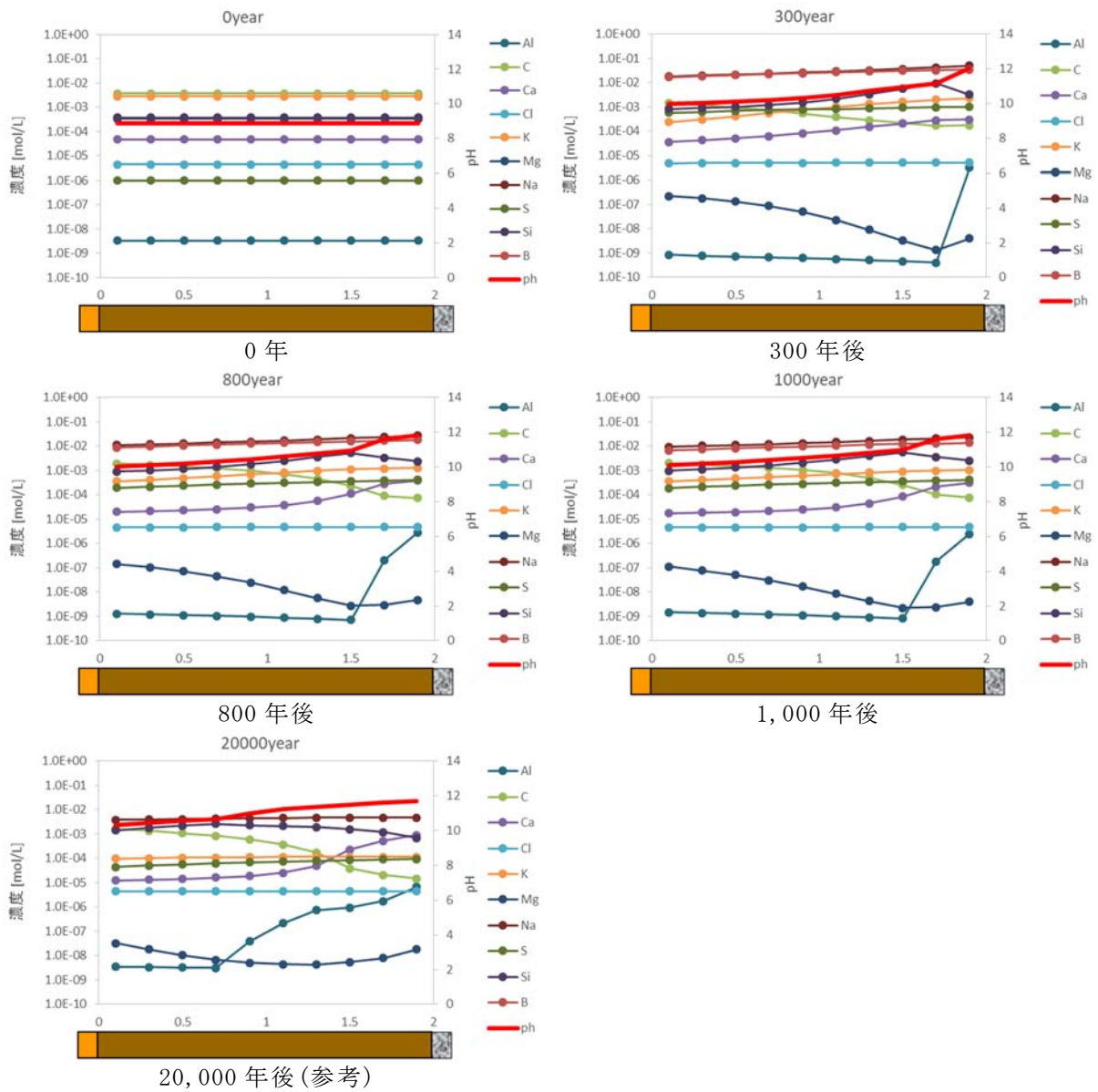
第 12 図 3 号廃棄物埋設地の難透水性覆土 (Na 型) における液相組成の分布図
 (ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



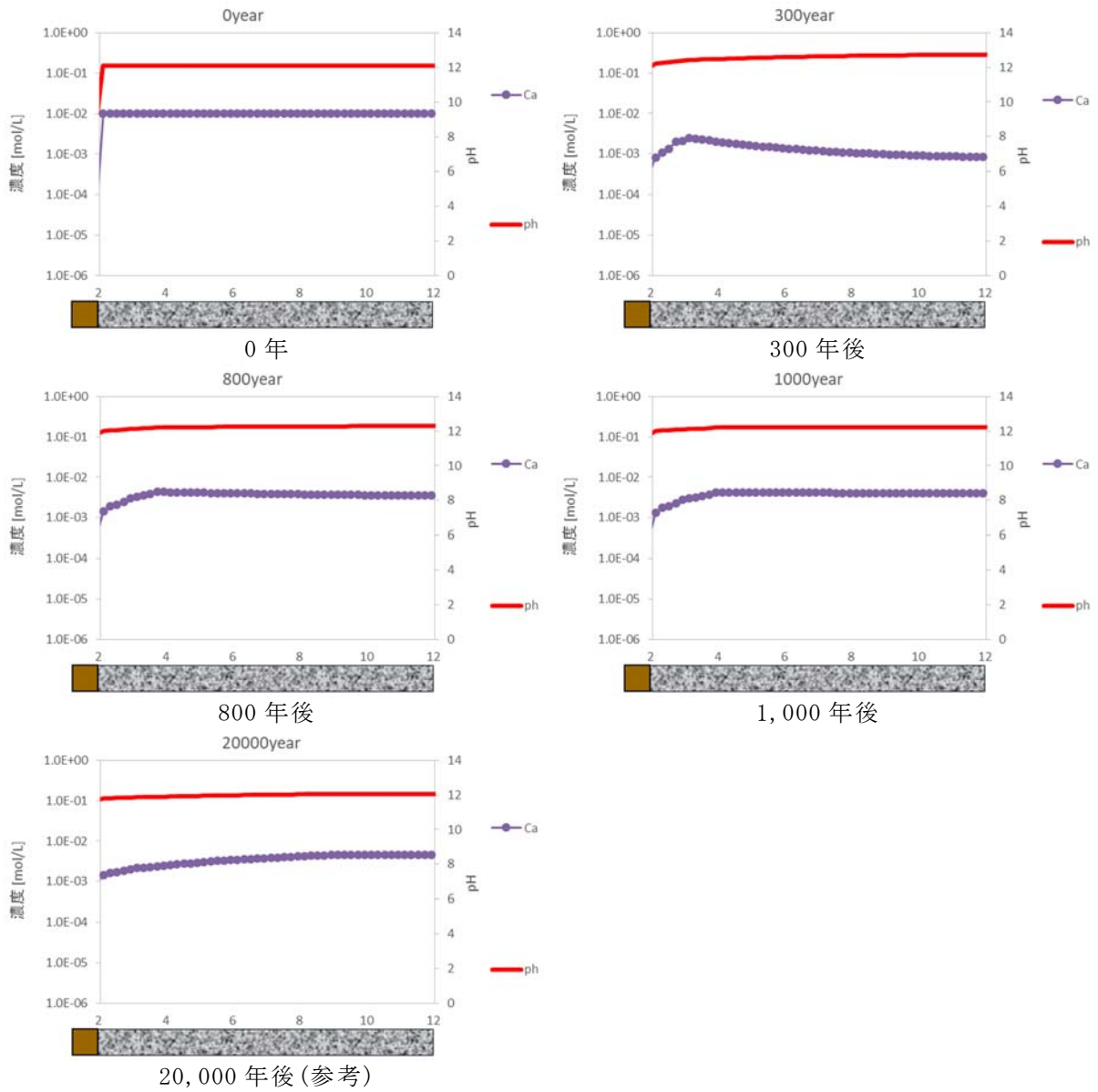
第 13 図 3 号廃棄物埋設地の埋設設備内の液相組成 (pH、Ca 濃度) の分布図
 (ケース②: 難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



第 14 図 1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na 型)における鉱物組成と透水係数の分布図
(ケース②: 難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



第 15 図 1 号廃棄物埋設地の難透水性覆土(Na 型)における液相組成の分布図
(ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)



第 16 図 1 号廃棄物埋設地の埋設設備内の液相組成 (pH、Ca 濃度) の分布図
 (ケース②：難透水性覆土中の拡散挙動を単純なモデルとした場合)

4. まとめ

難透水性覆土の材料仕様を、Ca 型ベントナイト(クニボンド)を 3 割配合した材料仕様から、Na 型ベントナイト(クニゲル V1)を 2 割配合した材料仕様に変更した場合、Na 型ベントナイトの主成分である Na 型モンモリロナイトの優れた膨潤性より高い止水性を示していた。1,000 年後においても、3 号廃棄物埋設地では、その高い止水性が維持される結果となった。一方、難透水性覆土中のモンモリロナイトの体積割合が難透水性覆土(Ca 型)と比べて低いため、1 号廃棄物埋設地では、モンモリロナイトが溶解し透水係数は大きく上昇する結果となった。それでも、1,000 年後において、高い止水性が維持されていることが確認された。

以上より、長期的な化学的影響を考慮した難透水性覆土(Na 型)の線量評価上の透水係数は 1,000 年後において下記の値を基に設定する(第 2 表)。

第 2 表 化学的影響の評価結果(難透水性覆土のベントナイトを Na 型にした場合)

	3 号廃棄物埋設地 [m/s]		1 号廃棄物埋設地 [m/s]	
	ケース①*1	ケース②*2	ケース①*1	ケース②*2
0 年	1.00×10^{-11}	1.00×10^{-11}	1.00×10^{-11}	1.00×10^{-11}
1,000 年	1.07×10^{-11}	1.23×10^{-11}	3.20×10^{-11}	5.73×10^{-11}

*1：難透水性覆土中の拡散係数モデルを空隙率とモンモリロナイトの含有割合を関数とする経験式(補足 5 数式 3)とする現実的な設定をした場合

*2：難透水性覆土中の拡散係数モデルを、モンモリロナイトの割合を 0 とし単純に空隙率に比例するという単純な設定(補足 5 数式 4)とした場合

以上